

524-4441



4

4441



話 史

編 一 第

述 甲 田 松

〇 複写

貴族院  
函  
号  
册

Kodak Gray Scale

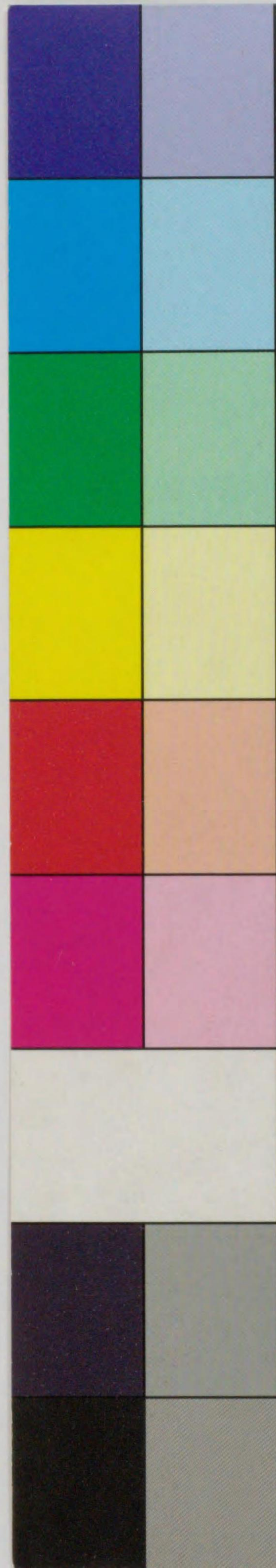
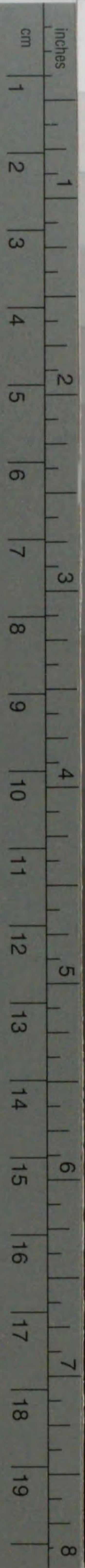
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black





貴院  
函  
号  
冊

昭和二年十一月廿二日

○ 山本書記序 寄贈

日  
鮮  
史  
話  
集  
第  
一  
編  
三  
松  
田  
甲  
述

二  
十  
二



日  
鮮  
共  
榮

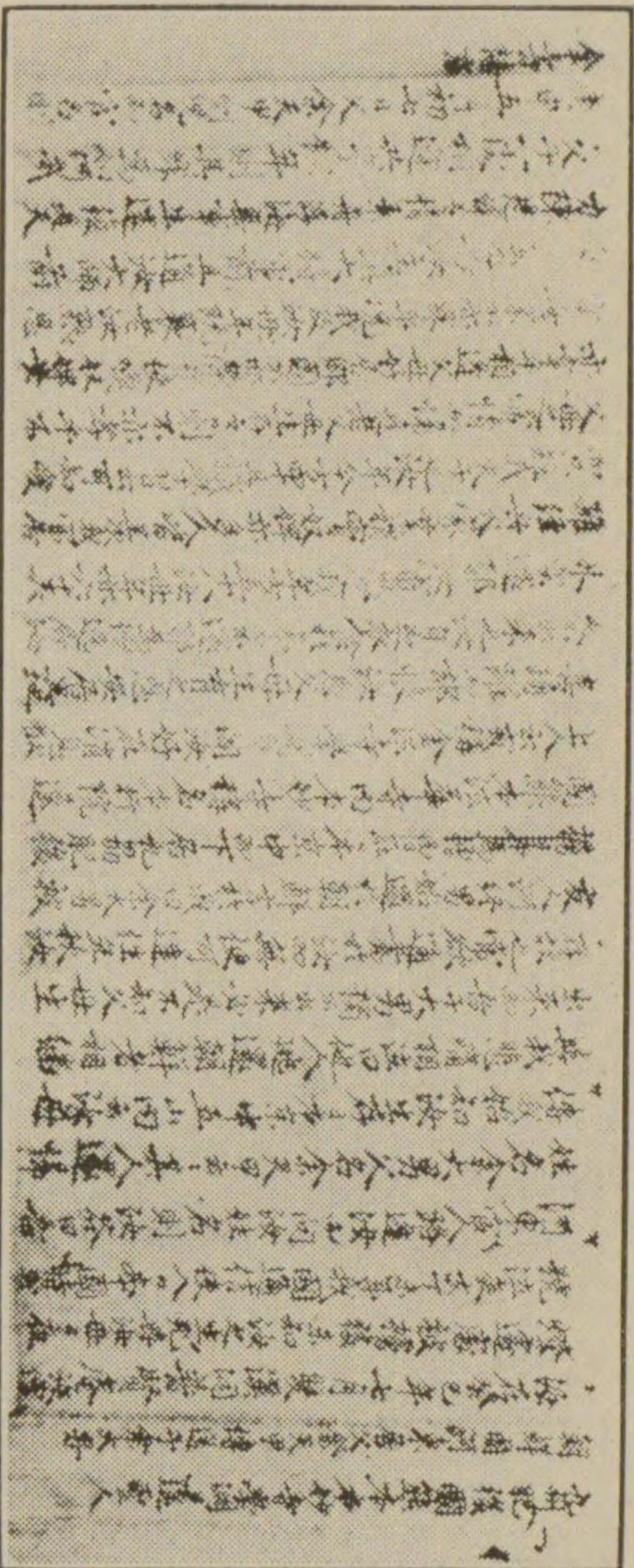
七十二翁日布

524  
4441

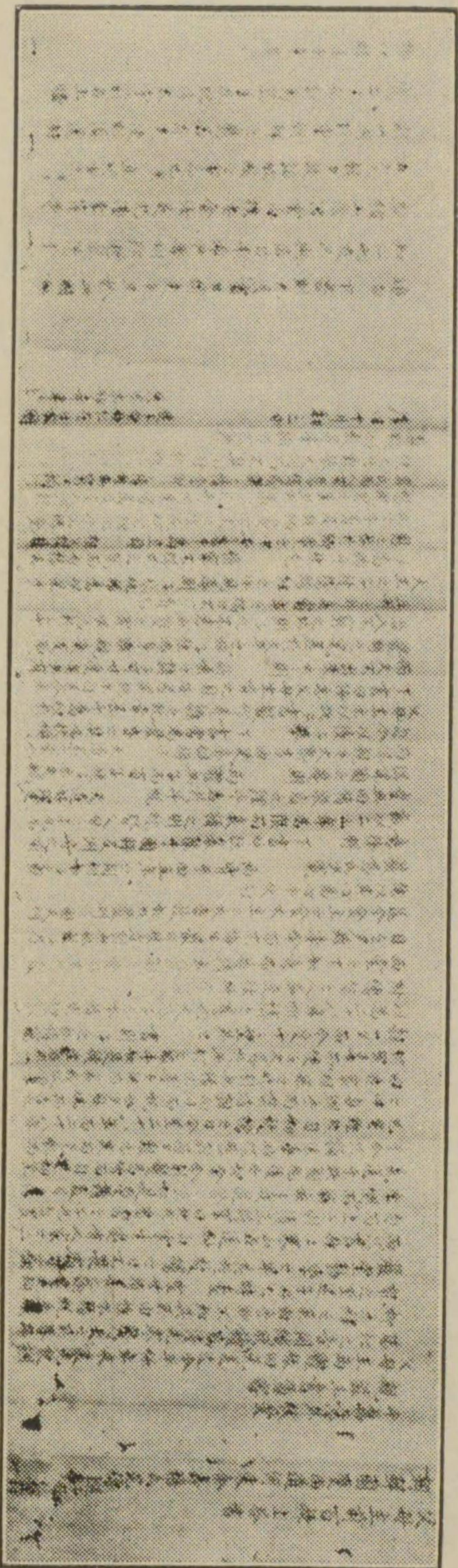


80W42615





父壽禧ヨリ上上人ニシテ翰書  
(藏所寺妙本本熊)



日遼上人ヨリ朝鮮父の贈リシ翰書の草案  
(藏所寺妙本本熊)

### はしがき

本書に載する所は是れまで朝鮮研究者より閒却せられたる事項に就て鄙見を述べたものである。もとより感興に乗じて筆を執りし爲め、各題目は關聯もなく、時代を逐うて叙列したのも無い、又往々重複して書いた所もある。要するに、確信すべき史乘、文集の類、及び予が實地の調査より得たる隨筆に過ぎぬ。幾分にも朝鮮を知らむとする人の參考とならば欣幸である。題して「日鮮史話」と云つたのは妥當でないかも知れぬ、只日鮮史蹟に關係したものが多いため、斯く名づけたまでである。

大正十五年二月

松田 甲識す

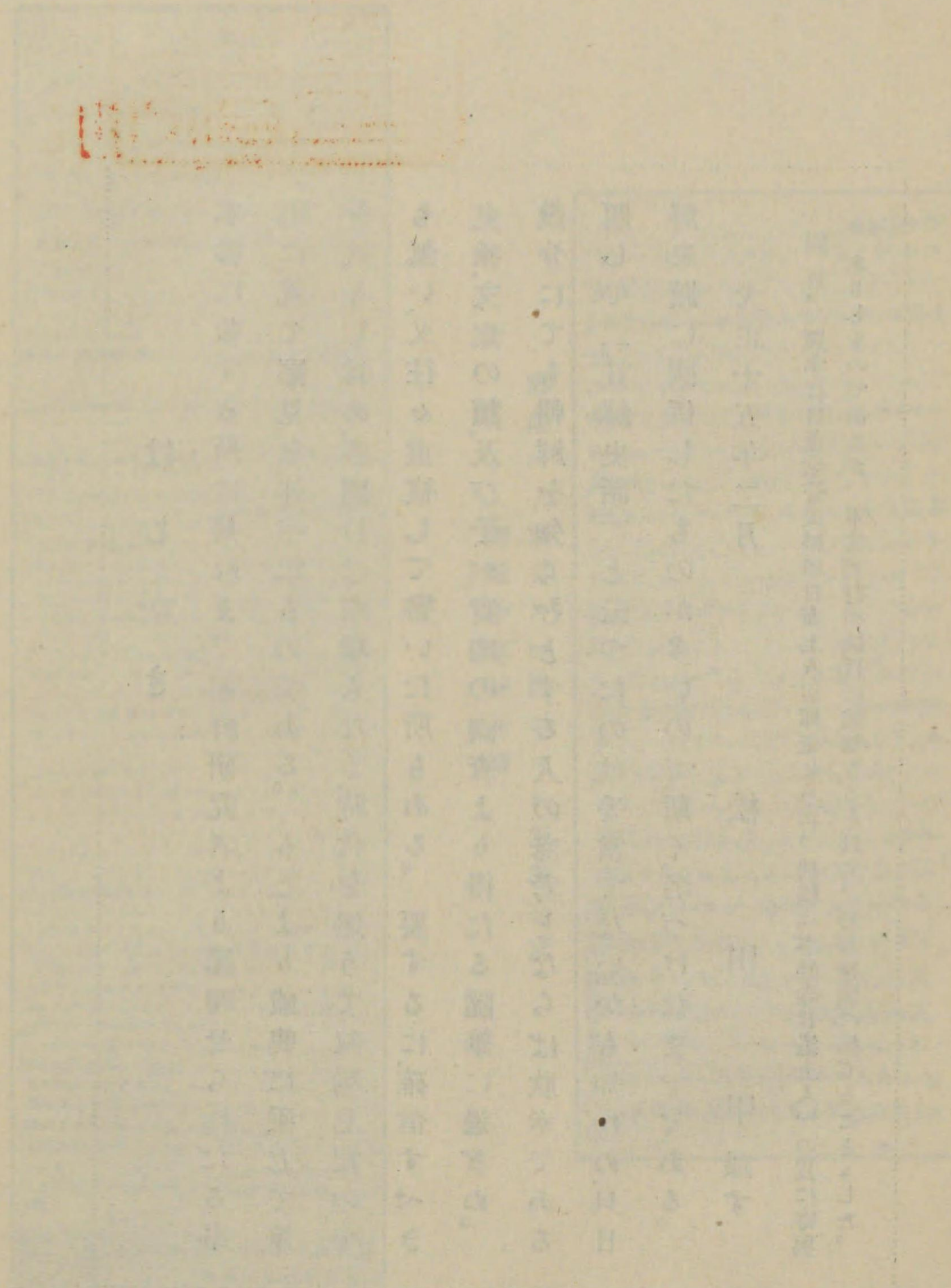
附言、題字は日蓮宗管長杉田日布上人が揮毫せられ、拙稿『本妙寺日遼上人』の爲に寄與ありしものであるが、本書刊行の趣旨に適切なるを以て、乃ち巻頭に掲ぐることにした。



日 鮮 史 話 第一編

目 次

德川時代の朝鮮通信使	一
朝鮮の櫻と櫻桃 <small>附、躑躅</small>	一八
博多と朝鮮人の事蹟	三〇
朝鮮人の白衣に就て	四
<small>日本教化に大功ある朝鮮出身者</small>	
本 妙 寺 日 遙 上 人	五三
人見鶴山と洪滄浪	七七
<small>朝鮮人を祖先とせる</small>	
熊本の碩學高本紫溟	一〇五
<small>李退溪の學說を研修せる</small>	
薩摩の大儒赤崎海門	一三三









以て之が回復を圖らんとした。併し當時國事多端にして自ら力を盡す能はざりし爲、専ら朝鮮との交渉を對馬の太守宗義智に委任した。是に於て義智は、慶長四年(宣祖三十二年)より同六年に亘り、四たび使を遣して家康の意を通じたるも、朝鮮は容易に之を承諾せず、漸く同九年(宣祖三十七年)孫文或を正使とし、僧惟政(號松雲)と共に來らしむるに至つたので、家康及其子秀忠は、江戸より京都に上ぼり伏見に於て延見した。文或等は家康の眞情を諒解して歸國せしに因り、朝鮮の廷議も愈々和好に決し、修交の爲、所謂通信使(當時回答使と稱し、後に通信使と改む)なる者を送る事とした。先づ國交は復舊したるもの、尙ほ日本に對する狐疑は忽急には掃蕩せられなかつた。然るに元和元年(光海君七年)家康大阪城を陥るゝや、其の豊臣氏を亡ぼしたるは、即ち朝鮮に代りて仇を報せしに同じきものなりとの意より、大に之を德として、上下心を安んじ、宗氏より來聘を促す毎に必ず之に應ずるのが例と爲つた。即ち其の時代及通信三使(正使、副使、從事、官を三使と稱す)の姓名等は次の如くである。

一、慶長十二年(宣祖四十年丁未)五月、正使呂祐吉、副使慶暹・從事官丁汝寬、修交の爲、江戸城に於て徳川二代將軍秀忠に謁し、歸途駿府に於て、家康に謁す(一行五百人)

一、元和三年(光海君九年丁巳)八月、正使吳允謙・副使朴淳・從事官李景稷・海内統一を賀する爲、伏見城に於て秀忠に謁す。(一行四百二十八人)

一、寛永元年(仁祖二年甲子)十二月、正使鄭崑・副使姜弘重・從事官辛啓榮、將軍襲職を賀する爲、江戸城に於て徳川三代將軍家光に謁す。(一行三百餘人)

一、寛永十三年(仁祖十四年丙子)十二月正使任統・副使金世濂・從事官黃辰、海内泰平を賀する爲、江戸城

に於て家光に謁し、又日光山に至り東照廟を拜す。(一行三百六十餘人)

一、寛永二十年(仁祖二十一年癸未)七月、正使尹順之・副使趙綱・從事官申濡、世子(竹千代、後家綱と改む)生誕を賀する爲、江戸城に於て家光に謁し、又日光山に至り東照廟を拜す。(一行四百餘人)

一、明暦元年(孝宗六年乙未)十月、正使趙珩・副使兪瑒・從事官南龍翼、將軍襲職を賀する爲、江戸城に於て徳川四代將軍綱吉に謁し、又日光山に至り東照廟を拜す。(一行四百八十五人)

一、天和二年(肅宗八年壬戌)八月、正使尹趾完・副使李彦綱・從事官朴慶後、將軍襲職を賀する爲、江戸城に於て徳川五代將軍綱吉に謁す。(一行四百七十三人)

一、正徳元年(肅宗三十七年辛卯)十一月、正使趙泰億・副使任守幹・從事官李邦彦、將軍襲職を賀する爲、江戸城に於て徳川六代將軍家宣に謁す。(一行四百九十四人)

一、享保四年(肅宗四十五年己亥)十月、正使洪致中・副使黃璿・從事官李明彦、將軍襲職を賀する爲、江戸城に於て徳川八代將軍吉宗に謁す。(一行四百七十五人)

一、寛延元年(英祖二十四年戊辰)六月、正使洪啓禧・副使南泰耆・從事官曹命采、將軍襲職を賀する爲、江戸城に於て徳川九代將軍家重に謁す。(一行四百七十八人)

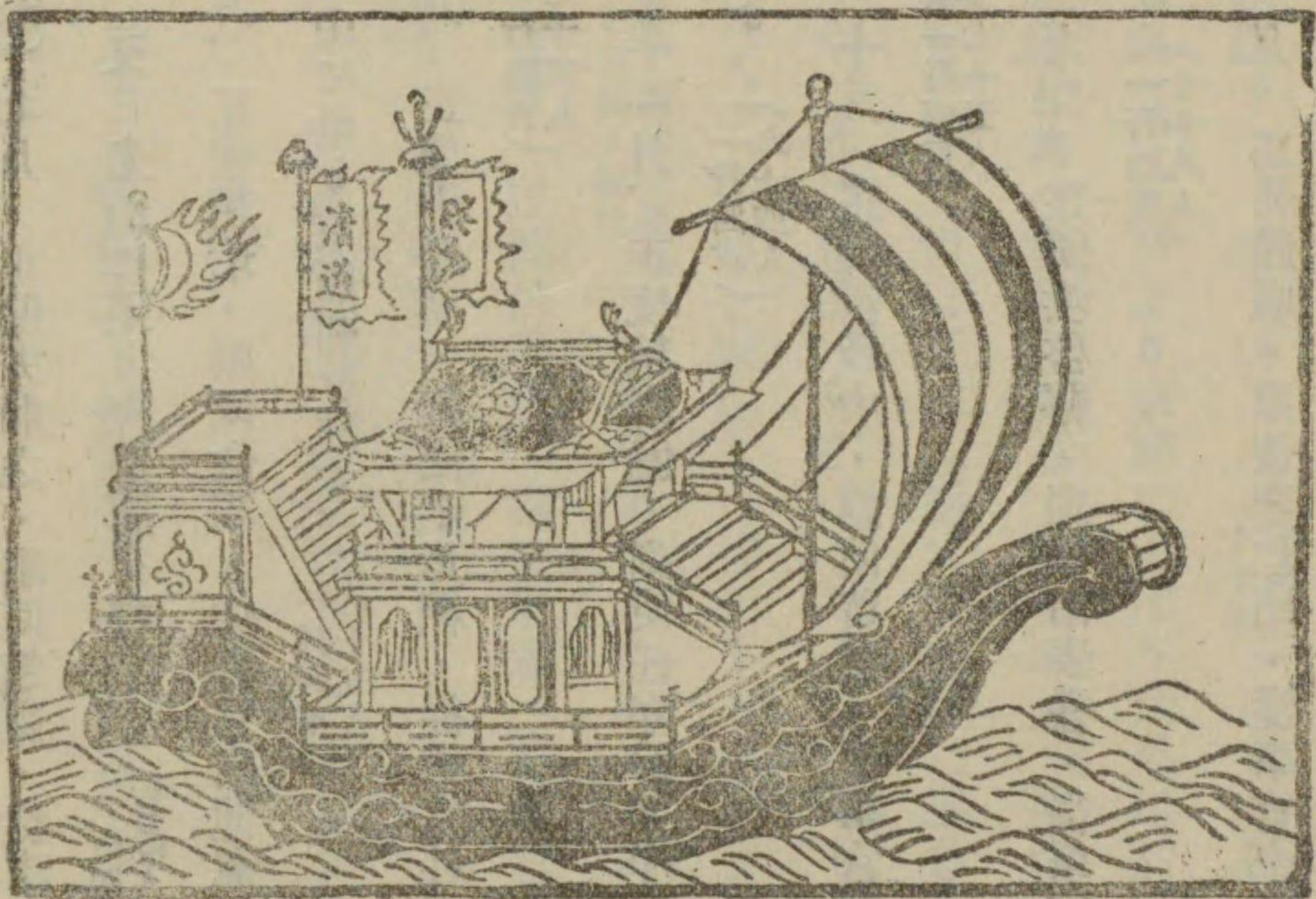
一、明和元年(英祖四十年甲申)二月、正使趙曦・副使李仁培・從事官金相翊、將軍襲職を賀する爲、江戸城に於て徳川十代將軍家治に謁す。(一行四百七十七人)

一、文化八年(純祖十一年辛未)五月、正使金履喬・副使李勉求・從事官李明五、徳川十一代家齊の將軍襲職



を賀する爲、對馬に於て、幕府の使小笠原國重・脇坂安董と應接す。(一行人)

慶長十二年より文化八年に至る約二百五年、通信使の行くこと都合十二回に及んだ。宗氏は幕府と朝鮮との中間に立ちて雙方の威嚴を損せぬ爲、或は無理なる事件を起し憎むべき所爲も行つたが、長き歲月、斡旋の任に當りて焦慮せし功勞は多とすべきものがある。斯の如く兎に角、徳川幕府は朝鮮に對しては、祖先家康の企圖に基づき、平和政策を以て圓滿に通交すべく繼續した。然るに當時の朝鮮は、支那を天朝として戴き、其停止することゝなつた。

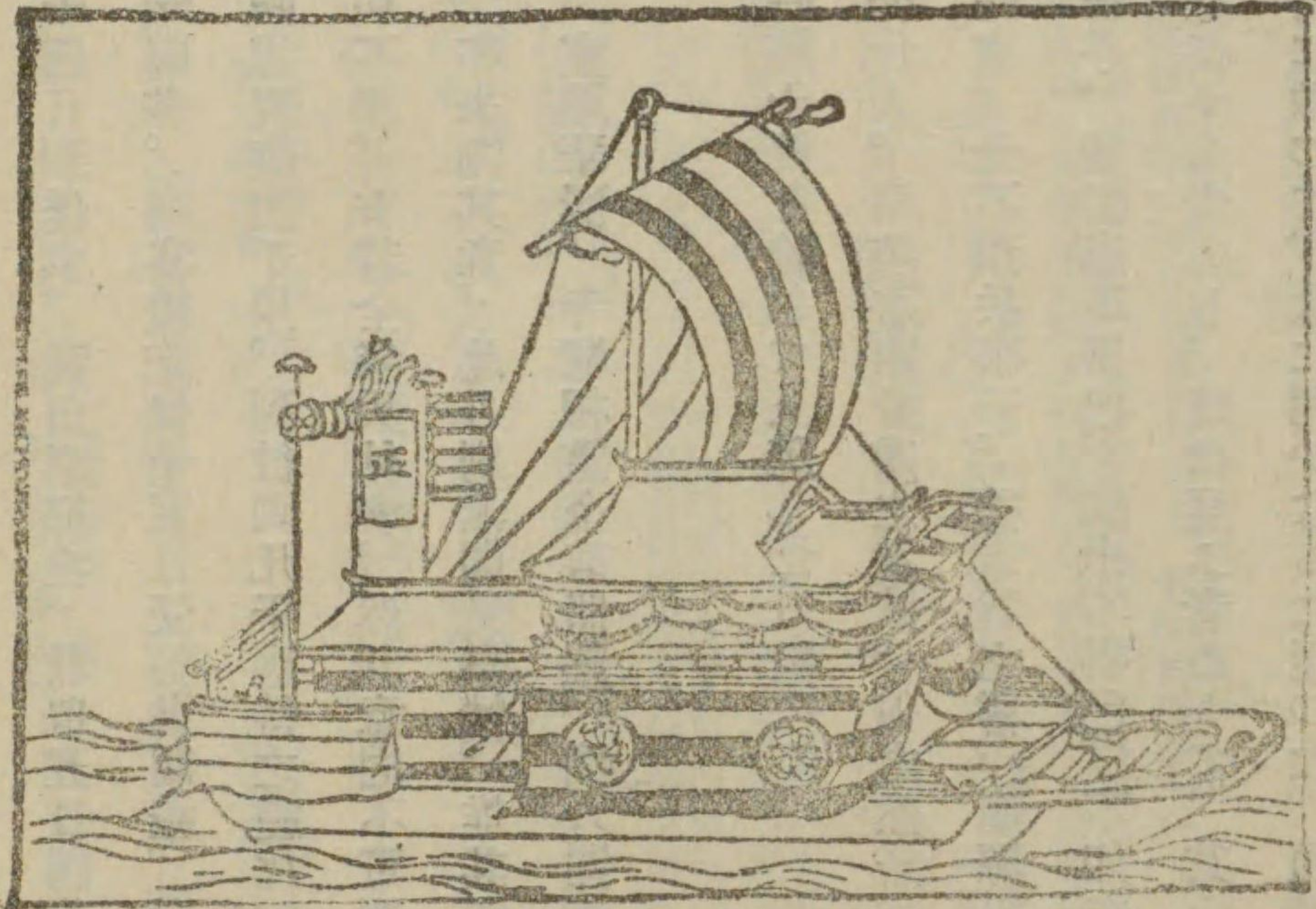


船鮮朝しり乗の使正を間阪大山笠

の威を假りて虚勢を張り、何事も尊大に構へ、堂々として日本に入り來るを以て、徳川幕府も勢ひ之を送迎するに儀禮に傾くこと、なり、従つて其の失費も頗る多く、又一方財力疲弊せる朝鮮は、送使毎に人民より物資の徴發に苛酷を極めし爲、互に國內より非難の聲起るに至りしを以て、文化八年より對馬に於て雙方の使者相會見するに變更したが、其後遂に此れさへも

前記の如く通信使行十二回の内三回までも續いて仁祖より家光に使を送りしことは奇異にも感せらるゝが。此れには大に理由がある、王の四年(寛永三年)清兵來りて山河を蹂躪するや、家光之を聞きて義憤を發し、宗義成に内意を含め、朝鮮を援けんとして、送るに鳥銃三百、長劍三百、焰硝三百斤を以てした。

日本國對馬州太守平義成。奉書朝鮮國禮曹大人閣下。近者萊釜二伯之書曰。山戎猖獗、貴國不幸西邊失守。大王赫怒整旅舉以征之。想必討滅可不日矣。然而陋島之於貴國。素有如同室之



船本日しり乗の使正を間淀阪大

に於て王も清の暴戾に反し日本の義氣あるに感じて、使を屢々送つたものと想はれる。王の二十一年(寛永二十年)

義。豈可不相救而忍視哉。爰將差援兵。而先遣平智次。爲飛報諸左右。仍幅獻兵器之物。以爲戒心小助。餘須嗣申。驚怪心亂。只此不一謹惟明察。然し朝鮮は辭して援軍を願はなかつたが、獐猛慄悍なる清兵は、益々侵略の威を逞うするに至り、慙む可し仁祖は其の十五年(寛永十)清の太宗に降り封冊を受くるの已む無きに至つた。是



の通信正使尹順之、釜山鎮に歸るや直に啓して

臣等四月十五日。自東萊地方。截蠻浦俟風發船。行五日程、因風雨阻留十餘日。然後進程、五月初七日到大阪城。海路始窮入干河口。十四日到倭京。關白副都也。歇留五日調集夫馬。自此陸行。初八日始抵江戶城。關白所都也。十九日關白受國書。行宴禮訖留十五日受答書回禮。還由來路。風潮不順。或行或止。十月二十日還到對馬島。大約水陸道程幾四千里。到彼國凡千應待之禮比前加厚。接話之際不及上國但前日信使到。彼必盛陣軍容而今即一切不用。有若全無兵仗者。然其意固不可測。對馬島主與臣等相見之時。雖一從舊例、而語言於肆氣色張大。亦未測其意。此外別無聞見事情。惟其國內民物殷盛。加於前所聞。大阪江戶等地。城池壯固。閭閻櫛比。室屋華麗。寺觀相望金碧照耀。國人聞他國使臣入境。到處士女聚觀彌滿山野。生口之蕃亦可概知。

と曰ひ、又同時の副使趙綱は、時務十策を論じて上疏したる中に

日本之與我既已通好。若遣一介行人。明陳吾困於虜之實狀。彼之然諾爲吾用。將不待辭之畢也。宣廟甲辰年間。家康不曰乎。壬辰我在關東。全不預兵事云。秀吉我之讐。而源也滅平。則非我敵怨明矣。議者曰。日本非親信之國。此虜獨可親信乎。親信出不得已。同出不得已。不如求日本之援助。

と曰へる如うに、是迄日本を或は信する者あり、或は疑ふ者ありて、其の實情は十分朝鮮に諒解せられなかつたのであるが、此の尹順之等の行に依つて、大に明かなるに至つた。趙綱の文中に虜とあるは清を指した事は言ふまでもない。

通信使の一行は、前記の如く、少なくとも三百人を超え、多き時には五百人に達した。其の職別並に豫定の員數を見るに餘りに大袈裟なりしに驚かざるを得ぬ。

- 使一員「文官堂上結 衛吏曹參議」 ○副使一員「文官堂下正三 品結衛典翰」 ○從事官一員「文官五六品結 衛弘文館校理」 ○堂上官三員「初以教誨堂上二員差送、肅宗八年壬戌倭人請加一員仍以爲例○倭人謂之上上官」 ○上通事三員「漢學一員○在前並以倭學教誨充差察任、肅宗八年壬戌老峰閣相國以爲漢學既以上通事見差而不行其任不可仍以漢學一員倭學二員定式」 ○製述官一員「有文才之上上官」 ○良醫一員「倭人有請則以術業精通者擇選」 ○次上通事二員「教誨」 ○押物官四員「漢學舊押物官一員倭學二員則教誨及聽敏中出身者差送、肅宗八年壬戌倭人請加一員以聽敏中出身自加差今爲四員」 ○寫字官一員「善寫者擇送」 ○醫員二員「典醫監惠民署各一員」 ○畫員一員「善畫者擇送」 ○子弟軍官五員「使副使各帶二員、四員」 ○軍官十二員「使副使各帶五員內六兩箭善射平弓善射各一員自兵曹試取定選從事官帶二員」 ○書記三員「三使各帶一員依軍官例啓下、肅宗八年壬戌楊前定奪」 ○別破陣二人「以上謂之破陣例兼軍官故亦陸上官」 ○馬上才・典樂各二人 ○理馬一人「古例熟手一人帶去、肅宗八年壬戌、日光山致祭停止後革○倭人例欲領知先期來請故使以下至理馬職姓名禮曹啓稟後移文萊府草注紙半折列書以送如牌文先文之規」 ○伴倘・船將各三人「三使各率一人○以上謂之次官」 ○卜船將三人「三卜船各一人」 ○陪小童十九名「三使各率四名堂上各率二名」 ○禮單直一名「三使各率一名」 ○奴子五十二名「三使及堂上官各率二名上通使以下至馬上才各率一名」 ○小通事十名「三使各率三名一名領馬先行」 ○都訓導三人「三使各率一名」 ○節鉞奉持四名「使副使各率一名」 ○砲手六名「三使各率二名」 ○刀尺七名「三使各率二名堂上率一名」 ○沙丁二十四名「三上船三卜船各四名」 ○形名手・蠶手各二名「使副使各率一名」 ○月刀手四名「使副使各率二名」 ○巡視旗手・令旗手・清道旗手・三枝槍手・長槍手・馬上鼓手・銅鼓手各六名「三使各率一名」 ○大鼓手・三穴銃手・細樂手・鐸手各三名「三使各率一名以上謂之中官」 ○風樂手十八名「三使各率六名」 ○屠牛匠一名「以上格各率二名」 ○格軍二百七十名「三使船各六十名三卜船三十名以上謂之下官○肅宗八年壬戌因倭人請減人役量減形名蠶手各一人及月刀手以下至鐸手五十八名以格軍兼定」 (增正交隣志)

斯くも多人數なる一行の事故、其の選抜には、王廷でも大に苦心したものと想れる。洪致中(肅宗四十五)の



上疏中に

製造官。従前毎以中庶文官帶去。日本頗尙文詞。多有能文之人。而一行詞翰酬應之任。專委於製造官。其爲任因不輕。故今番則不必以中庶爲例。當不拘一地極擇帶去。

と曰ひ、又『松穆館稿』(英祖四十年通信使 隨員李彥瓚の著)に

朝廷極選文臣三品以下。備三价以送之。其幕佐賓客。皆宏辭博識。自天文・地理・算數・卜筮・醫相・武力之士。以至吹竹・彈絲・謔浪・戲笑・歌呼・飲酒・博奕・騎射。以一藝名國者。悉從行。

とあるを讀みても、當時の朝鮮が、如何に日本に對つて虚勢を張りしかを想像せられ、如何に負けじ魂の國民性であるかも亦推測せらるゝのである。洪致中より前の通信使趙泰億の行きし時、製造官には李嶺(號東 郭)の如き文才豊富なる者も居つたが、三使は新井白石・室鳩巢・祇園南海・三宅觀瀾等と應接するや、其の學識淵博なるに驚き、殊に詩の唱和に當り、日本にも斯る作者あるかと嗟嘆して、遂に筆を投じたりしとの事である。其の反感か如何かは知らないが、泰億は歸國後、領議政徐宗泰の啓を経て日本に書籍を輸出するの禁令を行ふ事となつた。

今番信使。見我國書籍多入倭國。書籍之禁素無定例。而若商譯潛賣。倭人何從而得之乎。懲毖錄亦入去云。此等之書豈可使倭人見之乎。皆當一禁。而至若閑漫文集卜筮等書及中朝書籍。不必一例禁斷。自今定式。如史乘及文集。一切嚴禁。犯賣者。以潛商律。閑漫文集及不緊書式。參用次律何如。上曰。當初元無書籍之禁。故有此流入之弊。除中原書冊外。國乘文籍。並爲嚴禁。且令邊臣。一々搜檢。如有現發者。啓

聞後。從其輕重稟旨勘罪。

然し時機既に遅して、當時朝鮮の書籍は大抵輸入せられてあり、又朝鮮に頼らずとも、支那より多くの書籍は輸入せられたから、此の禁令は日本の文化に何等の影響をも及ぼさなかつた、元來朝鮮は日本を以て文藝未開の國として輕侮して居たのであるが、漸次事情の明かなるに従つて、大に注意を拂ひ、通信使行の人選の如き益々嚴にするに至つた。

通信使の事に就ては、幕府先づ宗氏に内命を下し、宗氏は朝鮮の禮曹參判と書簡を往復して、時期を決定するのであるが、朝鮮の方では渡航準備に一年以上も要し、愈々其の時期が來ると、一行は釜山に集合し、永嘉臺上に海神の壇を設けて、行旅平安を祈るの祭文を獻じた、今其の一例として、南龍翼(號靈谷、明曆元年の從事官)の筆に成りしものを掲ぐ、

維歲次乙未。五月甲申朔二十七日庚戌。通信正使副使從事官某等、謹以清酌庶羞。敬祭于大海之神。伏以有海者四。最鉅東溟。東溟有神。最著其靈。神人雖異。理則攸同。幽顯雖間。誠則必通。顧今行役。啣命絕國。絕國伊何。日出之域。滄波限界。剝木以達。五十餘年。聘信靡絕。吾君明聖。有道交隣。修其舊好。送我三臣。付以禮幣。授以旌節。理此舟楫。涓此吉日。半千之人。分載六艘。層濤駭浪。性命髮毫。微神之賜。何以利涉。不敢愛身。王事是急。神其保佑。勤戒風伯。速惠便順。屏去饕惡。鯨鯢潛伏。蛟鱷遁避。張帆舉碇。一瞬千里。母遲母礙。載安載全。直抵扶桑。計日回船。幹事殊方。摠神之福。歸見吾君。亦神之德。神垂令名。人被洪休。一理感應。永世圖酬。茲潔我誠。載薦我酌。神其聽我。賜我歡格。尙饗。



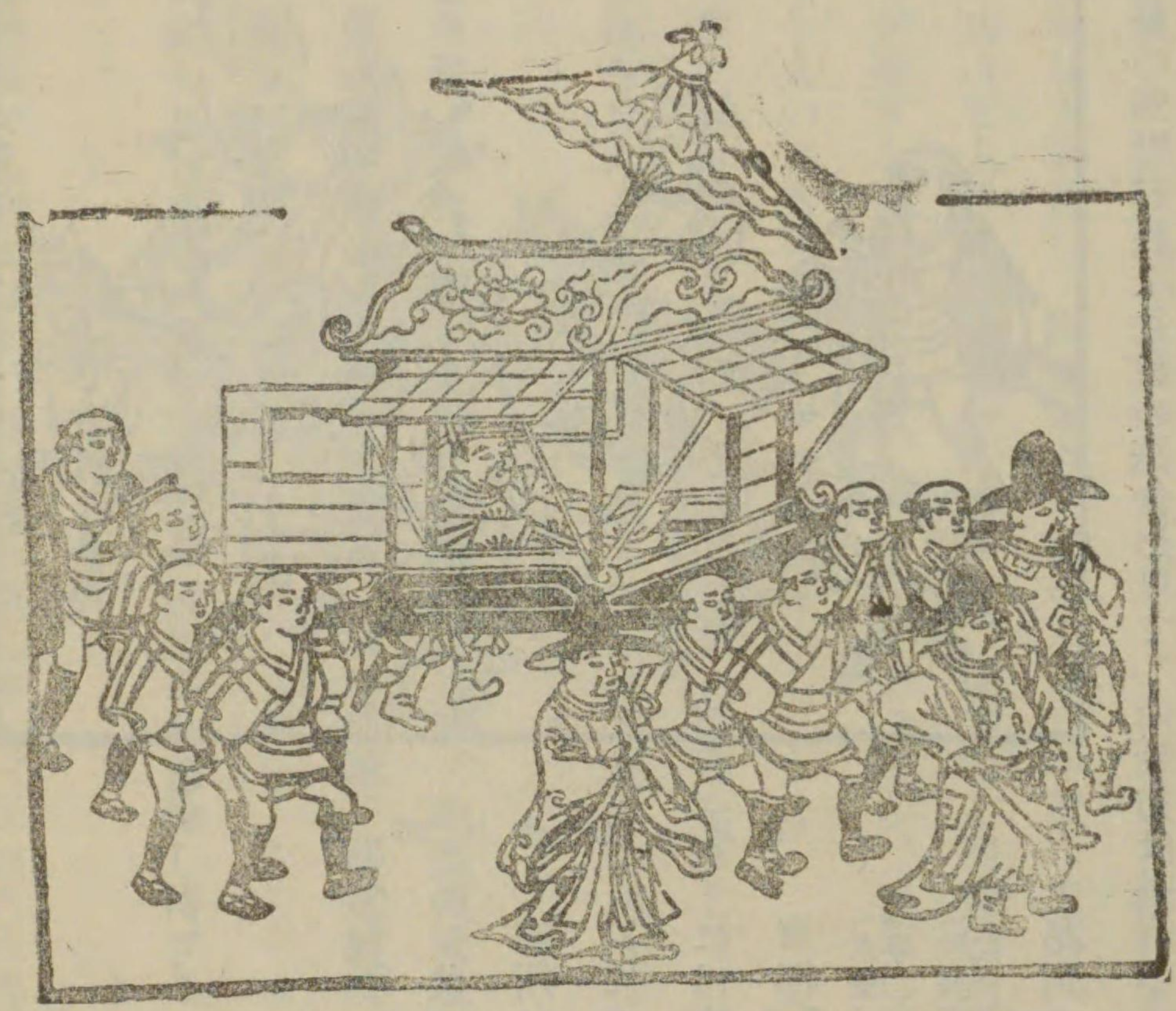
現今でこそ汽笛一聲釜山港を出づれば、僅九時間にして赤間關(下之關)に到着するが、當時は偏に好風を待ち、帆力に頼つて渡航したので、其の風待ちにさへ多くの日子を費した。而して三使は各々其隨員と共に三船に分乗する、即ち之を騎船三艘と稱し、外に方物、食糧等を積載するのを卜船と曰つて之が三艘、都合六艘、宗氏の船に護られて出帆するのである。趙綱(號龍洲、寬永二十年の副使)の『東槎錄』に能く其の船の事を寫してある。二月若日陛辭。行届東萊釜山浦。有司者已治三畫船。艤于泊步而待。蓋爲三使各載一船也。不佞遂登柁樓。考其制度儀物。船長四十尺有奇。廣十五尺有奇。底板之連者六。杉板之築者十。測其高尺度者十有二。中設二楹。楹中作板屋者左右。左爲洞房。中容二席。以板爲壁。塗以菱花。四壁皆有戸。赤白爲漆。乃余寢臥處也。右亦如之而差狹。編裨處焉。其後有二房。通官諸員役處焉。板屋上制如平勝樓。周施欄濫。即使臣廳事也。洞房左右。咸亘板爲道。便舟格之往來。趁事者。且列櫓於其間。并左右數凡十六。船頭及腰。各建高檣。船尾穴置大柁。此其船制大較也。船之左。樹旗幟。畫龍者一。繡字者四。船之右。建蠶及節鉞。船頭又植纛承大鼓。炮礮者。鼓吹者。鉦鑼者。又挾大鼓而處。韓船以彩幔。此其儀物大較也。船舶の寄港は略ぼ次の箇所であつて、府中(今の嚴原)では宗氏との交渉もあり、壹岐への風待ちもあり。相應に日數を費した、藍島の如き小島にさへ、風待ちの爲、十餘日も碇泊したこともある。

對馬 浦 對馬府中 壹勝本 筑前藍島 長門赤間關 周上關 安藝蒲刈  
備後鞆津 備前牛窓 播磨室津 攝津兵庫 津

兵庫より大阪河口に至れば、幕府より數艘の迎へ船が出る。之に轉乘して大阪に上陸、滯宿數日の後、一行

の約三分一の人員を留め、江戸に向つて出發する、即ち先づ船にて淀川を溯るのであるが、三使各々別船に分乘し、諸大名の船にて送られ、淀に至り、これより陸行となる、大阪出發後の書慰及宿泊地は、左の如く定められてあつた。

日西後先奉國書於金鑲船。三使臣各乘鑲船。三首譯兩判事。亦有鑲船。鑲船之制。大如我國水上船。内外着漆。左右設欄。黄金粧飾。以形龍鳳。層閣雕刻。以象禽獸。眩人耳目。動水波瀾。奇巧之制。不勝殫記。



輪 上 の 正 使

- 一、河枚 方(晝)
- 一、山城 (宿)
- 一、山城 都(宿)
- 一、近大 津(晝)
- 一、近守 山(宿)
- 一、近八 幡(晝)
- 一、近彦 根(宿)

一、美今 須(晝)

一、美大 垣(宿)

一、美洲 股(晝)





一、尾鳴 海(畫)

一、三岡 崎(宿)  
 一、相模 小田原(宿)  
 一、相模 大磯(畫)  
 一、相模 藤澤(宿)  
 一、武藏 神奈川(畫)  
 一、武藏 品川(畫又)

此の如く大阪より、途中十五六箇所に宿泊して江戸に到着し、江戸にては前に本誓寺(當時馬喰町に在り)、後には本願寺を旅館とした。途中も京都(本國寺又)、守山(東林寺)、彦根(宗安寺)、大垣(花林院又)、名古屋(性高院)、吉田(悟真寺)、藤枝(洞雲寺)、品川(東海寺)、等は寺院を旅館に當

てられ、其他は諸大名若は富豪の別墅、又は急造の館舎を以てした。尙ほ一行の爲に、奥羽より西國に至るまで總べての諸大名の石高に割當て、人夫千數百、馬五百餘にて送迎したる爲、實に街道の宿驛は喧雜を極め

宿舎の如きは、大なる損害さへ受くるに至つた。菅茶山の『筆のすさび』に、其の一斑を寫して居る。

四方の國、北狄より強きはなく、琉球より貧弱なるはなく、朝鮮より禮儀なるはなしと、書中に見えられたる蠟燭をぬすみ食ひ、或は席上に尿し、坐側に睡さす、僕從など廳前に鼾睡するもあり、物しれる輩も、詩を人に送るに、號を書する類、あげて數へがたし箕子の化も、年久しくして、かくなり下りしか、唐山の人、これを禮儀なりといふもいぶかし。

江戸に着後、市中の警戒は益々嚴重を加へ、數日を経て、愈々國書を奉じて、將軍に謁見の爲、登城せんとするや、其の壯大奇異なる鹵簿を見んとして、途上寸地も餘さざる程老若男女は蟻集した、申維翰(號青泉、享保四年の製述)の『海游録』に

三使臣具金冠玉佩。朝服秉笏。乘我國輜。余與三堂譯・上通事。黑團領乘懸輜。書記・醫官。亦皆黑團領帽帶。軍官。羽笠錦袍。佩劍囊鞭鞭頭。併騎金鞍駿馬。旗旋節鉞。兩部鼓吹。管絃緩聲之樂。隊々而進。入第一城門。觀光男女。簇々如蠶頭。皆錦繡衣云々。

と記せる如く、彼等が意氣揚々として登城せし有様は、到底今日想像し得ざる事で、又日本側の『見聞軍抄』

に 御城へ出仕の爲體を、貴賤男女見物せしに、勅三人は輿に乗り、伴の人々異様なる體にて、横笛・笙・ひちりき・大鼓・かつこ・調拍子・すりつづみ・色々品々、見なれぬ管絃の道具を手毎に持ち、絲竹呂律の



聲、微妙の音楽を奏して登城也。異國の名寶數を盡してさげ給へり。將軍御感悅なめならず、終日丁寧なる御もてなし、誠に美盡し善盡させ給ふとぞ聞えける。

とあるも如何に奇觀に驚きしかと判る、城中謁見の嚴肅なりし儀式等に就ては、茲に記すの煩を避け、唯其の主たる目的の朝鮮の國書、徳川將軍の答書、並に贈答物品の一二例を掲載する。

朝鮮國王李焯。奉書日本國王殿下。聘問之潤。倭焉一世。竊承殿下克紹基圖。誕敷區域。其在隣好。曷勝欣聳。肆馳崑价。庸舉信義。修睦致慶。式循故常。仍將非品。聊寓遠忱。惟冀益懋令猷。永固交誼不備。

- 別副 人蔘五拾觔 大孺子拾匹 大段子拾匹 色大紗貳拾匹 白照布貳拾匹 黃照布貳拾匹
- 匹 黑麻布參拾匹 虎皮拾五張 豹皮貳拾張 貂皮貳拾張 青黍皮參拾張 魚皮壹百張
- 色昏參拾卷 各色簫伍拾柄 眞墨伍拾笏 黃蜜壹百觔 清蜜拾器每缸壹斗 鷹子拾連
- 駿馬貳匹

日本國王源家宣。奉復朝鮮國王殿下。玉燭時和。應二儀之交泰。寶隣世睦。講百年之欣懽。禮幣既豐。書辭且縟。其於感懌。罔罄敷陳。有少謝儀。附諸歸使。願符善禱。永介純釐不備。

- 別幅 鎧貳拾副 大刀貳拾把 長刀貳拾條 厨子壹座 屏風貳拾雙

此の別幅を朝鮮側の書類には、甲衣貳拾領、偃月刀貳拾把、長劍二十把、厨子一座、金屏風二十雙としてある。同じものでも名稱に依つて偉く見える。而して其の大刀及長刀の鍛工と屏風の畫師とは次の如くであつた。

(新井白石全集に據る)

〔近江國下坂肥後守 康繼之孫 武藏國〕下坂康繼 〔山城國粟田口國 網之孫 武藏國〕法城寺國正 〔先祖相模守貞宗 之弟子 武藏國〕橘永弘 〔美濃國關金重 之孫 武藏國〕源國永

〔山城國藤原來金 道之孫 山城國〕藤原來金道 〔攝津國忠綱 之孫攝津國〕忠綱 〔攝津國兼道 之孫攝津國〕兼道 〔加賀國宗忠 之孫加賀國〕藤原國平 〔薩摩國 孫薩〕康國 〔肥前國忠吉 之孫肥前國〕藤原忠吉 〔肥前國忠吉 之孫肥前國〕藤原政廣 〔肥前國忠吉 之孫肥前國〕藤原行廣 〔因幡國忠吉 之孫因幡國〕忠國

〔先祖豐後國河内守 元行之孫豐前國〕紀政平 〔美濃國志津兼 氏之孫武藏國〕清平 〔越中國清光 之孫越中國〕清光 〔豐後國忠行 之孫豐後國〕行恒 〔山城國信國 之孫筑前國〕源重包 〔先祖原田是一 之弟子筑前國〕藤原守次(以上大刀) 〔安藝國輝廣 之孫安藝國〕輝廣 〔先祖山城國國廣 之弟子 陸奥國〕國虎

〔先祖攝津國和泉守 國定之弟子陸奥國〕貞則 〔備中國青 江之孫〕國貞(以上長刀、外十六振は大 刀と同人なるを以て略す)

一孝徳天皇白雉圖一雙 探信 一文武天皇慶雲圖一雙 探信 一平重盛諫父圖・楠正成教子圖一雙

春湖 一大江匡房賦四百句圖・源經信兼三船才圖一雙 養朴 一紫式部編書圖・清少納言捲簾圖一雙

洞春 一朝觀行幸圖・釋典圖一雙 内藏允 一唐樂圖・大和樂圖一雙 永叔 一源義仲陷俱利伽羅圖

一雙 探雪 一源盛綱渡藤戸海圖一雙 永叔 一源爲朝大箭圖一雙 柳雪 一平義秀破門圖・泉親

衡負船圖一雙 探信 一巴女殺敵圖・板額女拒敵圖一雙 養朴 一鶴飼・猿廻一雙 梅雲 一富士

三保一雙 養朴 一吉野・龍田一雙 養朴 一住吉・玉津島一雙 壽碩 一松圖一雙 探雪 一

花島一雙 休碩 一祇園會一雙 春笑 一犬追物一雙 如川

朝鮮國王李吟。奉書日本國大君殿下聘問之曠。今垂三十載。遞承殿下紹有基圖。撫寧方域。休聞所及。欣

聳豈已。致慶修睦。於禮則然。肆遣崑价。用展鄰誼。不腆土宜。用仍表遠忱。惟冀益敦舊好。永膺洪祉不備。

別副は前と大同小異である故省略する。



日本國源家重。敬復朝鮮國王殿下。聘問修好。書辭通信。就審起居泰寧。寔切嘉慶。乃今聞誕保前緒。以固邦基。仍率舊章。爰叙新權。幣儀既多。禮意愈深。所以彰兩國交際之誼。益知永世講信之厚也。聊將土宜。附諸歸使。惟冀親睦無違。休祥可期。不備。

- 別副 貼金六曲屏風貳拾雙 描金鞍具貳拾副 擦金紙匣伍副 擦金硯匣伍副 染繪臺百匹 綵紬貳百端。

又此の屏風の畫題と筆者は即ち次の如くである。(延享五年編、朝鮮來朝記に據る)

- 墨繪龍一雙 清水・石山一雙 平景清・那須宗高一雙 狩野祐清 墨繪牛馬一雙 鹽釜松ヶ浦一雙 源氏〔はつ音〕藤の裏葉一雙 狩野榮川 大和耕作一雙 狩野元仙 墨繪松竹一雙 牡丹・菊・小鳥一雙・源氏〔薄雲〕一雙 住吉内記 住吉祭一雙 狩野春水 柳に黃鳥と雪の椿・木つゝと小鳥一雙 狩野玉榮 杜若と結梗・鷺と鶉一雙 狩野泊壽 茶摘一雙 狩野梅軒 田に鴈と秋草一雙 狩野祐甫 鯉と小魚一雙 狩野洞壽 人丸・赤人一雙 狩野探林 墨繪猿猴一雙 奈良八景一雙 源賴政・藤原秀郷一雙 狩野常川。

以上贈答の物品を對照するに朝鮮よりの贈物は、毎回同じき其の土宜に過ぎなかつたが、徳川幕府の方では、情意を籠めて大に工夫を凝らし、成るべく珍品を選択し、其の刀劍にせよ、繪畫にせよ當代の名匠の手に成りしものを以てした。前記の作者は其の一斑に過ぎぬが、何れも聲譽を博したる人々である。今日に在ては千金を以てするも得易すからざる貴重の品で、好事者をして垂涎せしむるのみならず、美術上の模範とすべき

ものである。尙ほ幕府は、一行中の地位ある者にも貴重の物品を贈つたのであつた。

此の他江戸滯留中の儀禮、日光山參拜等の事に關しては、冗漫を恐れて一切省略する。斯く通信使一行數百人が、當時交通不便なる海陸を、數箇月も費して往復したるは、餘りに虚飾的なる儀禮に過ぎざりしと冷評する人もあるが、其の儀禮の虚飾に過ぎ多人數なりし事等は彼れが支那より受けたる習風で、日本にては如何ともするを得なかつた。然し此の事ありし爲、兩國間の感情は融和され、貿易も亦頻繁となつた。殊に日本の國民性は知識を四方に求むるに在るを以て、第一回通信使に於ける林羅山より、第十二回通信使に於ける古賀精里等に至るまで、毎回有數の學者は應接して經史の論議に努め、詩客文人は遠く奥州・北陸・西國等より出て、京坂に一行を迎へ、唱酬を試みたる如きは勿論、徳川光圀、稻生若水等が本草學に就て問答したる等は著しき事實である。又日本は李朝に先だつて歐亞と交通し、南方支那の物資も長崎に直輸入せられし爲、日本固有の文物と併せて通信使行に依つて大に朝鮮に移入された。其れのみならず、個人間の交誼上に於ける美はしき逸話も亦多いのである。故に予は此の通信使行を以て兩國間に大なる利益を及ぼしたるものと言ふに躊躇せぬ。此等に就ては更に稿を改め述ぶるの要あるを以て、茲に省くことゝした。要するに本稿は此等に對する緒言に過ぎないのである。

附言、本稿中に挿入したる圖は、延享五年(即ち寛延元年 英祖二十四年) 出板の『朝鮮人大行列記』より縮寫したもので、通信使洪啓禧一行の時に係る。



朝鮮の櫻と櫻桃——附、躑躅

今や朝鮮も内地人の移住につれて、櫻樹も亦數多く移植せられ、到る處の野に山に絳雲綺霞の變遷たるを見るは、實に喜ばしき次第である。言ふまでもなく、内地種の櫻は、色澤艶麗に、香氣馥郁開くも媚びず、散るに怯ぢざる特性は、優雅の中に凜たる氣象を存して、他邦にも亦之に比すべき花は無い。

然らば朝鮮の方は如何と云ふに、唯濟州島に内地種の櫻に髣髴たるものはあるが、其の他は所謂『ヤマサクラ』に屬し瓣は單、色は白く、輪も亦小さく、見るさへ極めて寂しみを感ずるもの、みである。尤も此種のものは鬱陵島・智異山・金剛山・又北鮮等可なり多くの地方に散在して其名を『ポッサム』보쌈 (Potnam)と稱し、漢字としては『柰』と書いてある。これに就ては、今より二百餘年前、新井白石の著なる『東雅』の中にも

櫻(中略) 朝鮮に此物ありやなしやの事を對州の人に問ひしに、かしこにある館中に、この楊貴妃といふ櫻を移し植て其花の開きし時に、王城の人の來り見しに問ひたりけるに、かしこにもあるなり、其樹名をば榛といふなりといひしと答へたり。正徳聘使の時に、其學士の稻若水に對へし所を見れば、彼國にも此物はなきなり。さきに榛の字を以て對へしといふは、榛亦作柰ものをいひしと見えたり。

と書けるのを觀ても、朝鮮に櫻の無きことは夙に證明せられてある。正徳聘使とは即ち正徳元年(李朝肅宗二十七年)の通信正使趙泰億(號謙齋) 副使任守幹(號遜窩)を指したので、其の一行中の學士とは李瓊(號東郭)の事である。稻若水は

即ち稻生宣義で京都の儒者にして本草學に通じ『庶物類纂』一千卷を著述したる程の人故、朝鮮の草木に就て、質問を爲したるものと想はれる。かしこにある館とは釜山に於ける對州宗氏の使館を指したもので今の府廳の位置がそれである。其處に楊貴妃櫻を栽ふしといふのは、恐らく是れ朝鮮に櫻樹移植の嚆矢であらう。其後今より百六十二年(日本明和元年、李朝英祖四十年) 洪良浩(號耳溪)が、京城に近き牛耳洞に約二百本を日本より移植して、遂に今日の名勝を成すに至つた事は、櫻花と、もに、彼れの芳名を長く傳へねばならぬ。

櫻花に就ては、若水のみでなく前田菊叢も大阪の旅館に至り同學士に問ふ所があつた。菊叢は名を子績と稱し、備中松山の儒官である。此の菊叢及若水と東郭との問答は、彼等通信使の來た翌年、京都の書肆で出版せられた『鷄林唱和集』の中に載せてある。日本の學者は此の如く朝鮮の學者を珍重した、左に其の問答を轉掲する。

若水問 此樹我邦名櫻花。樹高二三丈。葉與垂絲海棠一樣。惟枝條不柔軟爲異也。三月初生葉開花。略似薔薇長春花形。其色有白者紅者。又有重瓣單瓣之異。蒂長三四寸。於葉間或三萼至五萼爲叢而生。一如海棠花。而蒂差長。單瓣者結實形似郁李子。而小生青熟赤味甘。其葉穉者淺紫色。大者標綠色。至霜後葉丹可愛。花品甚多。至數十百品。其最可觀者有都勝。紛紅重瓣。花頭甚豐特極富麗。有御愛。單瓣紛紅。比常花差大。有美人紅。重瓣嬌紅開早。有緋櫻。千葉初綻時深紅。及開色衰。有香櫻。芳郁特甚。又有一叢中開花重單相間者。衆花攢爲毬者。繁密綴枝作花如千葉郁李花者。豐腴豔美群芳皆在下風。徧查古今載籍。率收垂絲海棠而不言有是花。豈以中原之地所稀有而人不及見耶。貴國與弊邦相隣。地氣當不相違。其或有是花。名



子以何稱之也。

東郭答 俺始到馬州。得見貴邦所謂白櫻桃。其枝葉之奇。信如來書中所畧。而第恨已後花時。不得見其花色之爛漫耳。我國櫻桃樹高不至一二丈。不過鬱密叢生。其實有紅白兩種。而花色亦零碎婆娑不甚美好。故種之者只爲其食實而已。與貴國之櫻絕不相類矣。

菊叢問 本邦自古賞櫻花甚盛。百花之中專稱花則不言而知其爲櫻花。猶如洛陽牡丹蜀中海棠。每春花開。艷麗奪自芳香襲人。實與梅花相作伯仲。而未聞賞愛如此之盛。其著見于篇詠者。纔有沈詹事山櫻開欲燃。王荆公山櫻抱石映松枝之句。竊怪櫻花特擅美於東方。而不播芳於中華也。或風土之殊櫻花之美不及本邦所有乎。如有所聞則請示之。貴邦此花之愛與本邦同致乎。

東郭答 我邦櫻桃甚多。至有白者。而花者則不甚貴之惟食其實而已。蓋其花色不甚繁麗。比衆艸無可稱者矣。近見貴邦櫻桃花。與我國之櫻不相似。花色甚好。恐非我國之所種者也。

更に往昔朝鮮の人が、日本の花卉に對し、如何なる感想を起したかを識らんがため『海行摠載』より少しく之を轉載する。

李景稷（日本元和三年、李朝光海君九年通信使從事官）の『扶桑錄』

花草則別無奇花異草。而以木櫻爲第一。其木如我國之山櫻。而枝柯裊々而長。其葉團々而大。其花則雖未及見。而有千葉單葉二種。大如白菊花云。

姜弘重（日本寬永元年、李朝仁祖二年通信副使）の『東槎錄』

花卉則以絲櫻・茶花・枇杷・櫻欄之屬。爲第一異卉。所謂絲櫻・長枝裊々。其葉團々。彷彿垂楊。而尤細而長。金世濂（日本寬永十三年、李朝仁祖十四年通信副使）の『海槎錄』

花卉則以絲櫻・茶花・枇杷・蘇鐵・櫻欄等物。爲第一異卉。所謂絲櫻・長枝裊々。垂絲之狀。彷彿垂楊。而體如山杏。

所謂絲櫻云々とは即ち『シダリサクラ』を稱したのである。而して列記し來りし何れを讀むも、彼等の花卉に對する感想は極めて淺薄であるが、獨り南龍翼（日本明暦元年、李朝孝宗六年通信使從事官）の『扶桑錄』に至つては、其の觀察が他に超絶してゐる。

家々庭園。必植花卉。栽培蒔養。窮極巧奇。引水方塘。異石爲假山者處々有之。木則梧・檉・松・柏・杉・檜・槐・柳・桑・漆等皆有之。而其中我國之所無者。有棕櫚。無枝直上。有毛如鬣。上生青葉。狀如芭蕉。布如羽蒂。長者或過屋。挺如槍竿。有蘇鐵。株如棕櫚而稍短。葉如棕櫚而稍狹。性惡濕好燥。欲枯則拔置屋上。釘鐵以植則復生。物性之好怪也。有鶴羽。枝葉如檀。不花不實。冬夏長青。正月德談時相遺云。有白丁木。形如黃楊木。人多造剪盤曲其枝葉。上如鋪床。下如張蓋。皆嘉木也。花則牡丹・芍藥・四桂・月桂・石竹・冬柏・蓮・梅・菊花・躑躅等花皆有之。而菊花則絕貴且晚。躑躅則冬亦開。其中我國之所無者。有木櫻其枝裊々而長。其葉團々而大。其花有千葉單葉二種。大如白菊花。國俗稱爲第一品即奇花也。草則我國所產藥草蔬菜幾盡有之。而土芋最賤。雜植於田畝之間。藺荷・生薑・瓜・蒜・葱・韭・薇・蕨等菜皆佳。菁根則味品亦好。而本細而長。菘菜甚細而不可食。瓠長如東瓜。茄子則其形如椎。蒿茸則冬月亦食。其中我國之所



無者。有唐茄。來自南蠻。種葉而生。葉上生葉。葉如佛耳。青而有刺。高可尺餘。危可數寸。四時一色。可經六七年云。即異草也。果則我國所產各種諸品無不有之。桃・李・棗・杏・林檎・銀杏・榛・櫟等果皆佳。梨・柿・柑橘・西果・眞瓜・葡萄等果極賤極佳。粟則大如兒拳。胡桃則頭尖體小。而味皆不佳。柿有不熟。而其味不辣可食。乾柿則體長而味好。所不產者只海松子。其中我國之所無者。有枇第。十月開花。花如杏花而色黃。至月結子如葡萄。至五月始熟。味甚甘潤。有金柑大如榛子。皮薄味酸。而香烈過於柑橘。皆珍果也。草樹之中。最賤者竹。大可爲椽。小可爲竿者。簇立遠近。處々人家皆鋪以爲床。縛以爲籬矣。此の如く叙述極めて精細で、別に奇花異草無しと言へる李景稷とは、其の注意に大差がある。以上諸家の記事にて、朝鮮に内地の櫻と同種のもの、無かりし事は益々明白となつた。但景稷の『以木櫻爲第一。其木如我國之山櫻』とは何を指したるものか疑問である。尤も宋の王安石の詩に

山櫻抱石蔭松枝。比並餘花發最遲。頼有春風嫌寂寞。吹香渡水報人知。

と詠じ、題を櫻桃、又一書には山櫻としてある。辭面上より案すれば内地の山櫻に髣髴たるもの、様に想はれる。之より推すと景稷が山櫻と言つたのは朝鮮で普通稱する奈のことではあるまいか。

内地の山櫻即ち朝鮮で稱する奈の字を、支那の韻書で見ると、素奈・赤奈・丹奈・柴奈・綠奈・碧奈・甘奈・美奈・山奈・園奈・元都奈・後堂奈などあつて山櫻の如うには想はれぬ。又字書には果名、林檎の同種。奈何の奈と同字としてある。其の奈と奈は同字といふ事よりして、内地の山櫻を朝鮮の人が奈と書くのを、予は實に面白く思ふ。何となれば昔より櫻花の勝地として名高き『奈良』を朝鮮の人よりは『山櫻良し』とも讀ま

れ、又『芳賀』(地名)・『芳宜』(萩)と同じく芳の字を『ハ』と讀む如うに、花を「芳奈」と書けば「芳ばしき山櫻」とも見らるゝ故である。斯る事よりしても、内鮮兩土の同文關係に深き趣味を感ぜざるを得ない。又内地にて山櫻の樹皮を樺と云ひ、或は山櫻を直ちに樺櫻と呼ぶ處もあるが、朝鮮でも山櫻に樺の字、或は其の實に奈、皮に樺の字を用ゆる人がある。徐有桀(李朝正祖)の「林園經濟志」に

樺。本作檜。「在處」深山中。有之。可移栽園裏。樹甚高壯。三月開花。微紅色。結實始青而紅。既熟如點漆。與櫻桃同時熟而稍先之。倭俗甚重此花。謂之櫻桃。「功用」其材淡褐色。木理密而硬。刻板印甚佳。伐生木埋土中。久後出用。則愈不脆。

と書いてあるが、之を『大日本國語辭典』(上田文學)に

やまさくら「櫻桃」薔薇科、櫻屬の落葉喬木。幹の高さ二三尺。葉は互生、卵形にして銳頭、重鋸齒を具ふ。花は繖花序に排列し、花梗は平滑なり。四月頃開花し、淡紅色五瓣の小花なれども、又往々重瓣なるものあり。果實は赤紫色の小核果なり。我が國、各所の山地に自生し、就中大和國の吉野山、山城國の嵐山、武藏國の小金井など古來名あり。又往々觀實用の爲め庭園に栽培せらる。材は版木又は小器具を作るに適し、樹皮は曲物を縫ふに用ひられ、花は鹽漬として、食用に供せらる。『山櫻』、『木辛夷』

とあるのに對照して殆んど一致して居り、内地の山櫻・樺と朝鮮の奈・樺とが同種たる事を察するに難からぬ。殊に有桀が『倭俗甚重此花。謂之櫻桃』と言へる如く、辭典の方にも『やまさくら』を漢字にては櫻桃としてあるのも符合してゐる。



内地の『サクラ』は、往昔佐久良・佐具良・作樂などと書き、後世に至つて『櫻』の字を當てたのである。櫻に就ては『康熙字典』に果名櫻桃也、一名含桃。『月令廣義』に仲夏之月、以含桃、先薦寢廟。『爾雅』に果熟最先、故云先薦。『本草綱目』に一名朱桃、一名麥英、深紅爲朱櫻、黃者爲蠟櫻とある如くに櫻桃の事たる明かであるが、何時しか其の一字を取りて我が國華たる『サクラ』に用ひられ、而して『櫻桃』の二字は、嘗に『ユスラ』のみならず、亦『ヤマサクラ』・『サクランボ』にも用ひ、殊に近來は西洋櫻即ち『チェリ』の實までに書くに至つた。然し支那・朝鮮では櫻桃の字を内地の所謂『ユラス』のみの稱としてゐる。

櫻桃ユスラ（鮮音 *Angsto*）は、朝鮮にて古來珍重する果物である。是れ百果に魁けて熟するを以て、先づ祖先の靈前に供する慣例もあり、且其色綺麗に、其味殊に甘美なるが故でもあらう、又李朝世宗最も之を嗜好せられたゝめ、孝心深き文宗が尙ほ太子たりし時、手づから宮苑に植えて、其實の熟するを待つて献せられしと云ふ美談は遍く人の知る所である。此樹は朝鮮の到る處にあるが、就中、京城の名産と稱し、經學院の後方より、東小門の附近に亘り、多くの畑に栽培せられ、櫻花の散るや間もなく、紅珠燦然處々の店頭に堆積するを見る。

澤堂李植（李朝仁祖時代の人）の詩に

白華纔綻綴未纒。瓊苑行看薦赤瑛。人世未知移徙樂。兩鄉那忍別離情。一名移徙樂

と詠じ、又朴世堂（李朝顯宗時代の人）の『山林經濟』に

櫻花。枝老則不旺。宜割移。或種核亦可。蓋此樹頻數移栽則盛。故俗稱移徙樂。頻澆泔水。則子大早熟。と書いてあるが、『移徙樂』は朝鮮音で『イサラ』と讀み、移し徙ウツし樂むとの意を表はしたものである『サクラ』

を『作樂』と書くのと、其の意味こそ違ふが趣巧は相似てゐるのも面白い。内地にて櫻花を『ユスラ』と稱するのは朝鮮の『イサラ』の音より轉じたものである。既に新井白石の『東雅』にも次の如く言うのである。

『ユスラ』といふは、もと韓地の方言に出でし也。即今朝鮮の俗に『移徙樂』としして『ユスラ』といふもの是也。

又『和漢三才圖會』に

宇治の左府頼長公の記に云ふ。天養二年五月三日、權大納言宗輔、嬰ユスラ賞を送りて云く、和泉の國より尋ねて之を取る所なりと、其色紅く、大さ碁石の如く、其體圓く、其核微小、三種あり、之を食するに甚だ美、其味甘く、賞翫に堪へたり。

とあるが、頼長は藤原氏（北家）の氏の長者と呼ばれ、公卿間に於ける無雙の權威者であつた。斯の人にして尙ほ櫻桃ユスラを珍重する此の如くなりしを見れば、當時其の栽培は極めて尠なかりしものと想はれる。天養二年（鳥羽法皇時代）は今より七百八十一年前で、高麗仁宗の二十三年に相當する。其の名の『ユラス』を朝鮮の『イサラ』より轉せしと同じく、其の樹も或は朝鮮より移植されたものではあるまいか。

『ユスラ』の語原は、前記の如くであるが、『サクラ』の語原は不明である。大槻博士の『言海』に

木花開耶コノハナサクヤヒメ（櫻神とす）の名よりして開耶サクヤの轉かと云、或は開麗サキウラの約かとあるが、是れ木花開耶コノハナサクヤヒメが、美しき紫色の雲に乗りて、富士山の頂から櫻の種子を蒔かれたと云ふ神話がある故でもあらう。又芳賀博士の『國民性十講』中に曰ふ



「酒なくて何のおのれが櫻かな」は、萬葉集大伴旅人の讃酒と同じ思想である。自然の景色に對して面白をかしく、一生を送れば、人生の望は茲に足る、厭世的自殺は日本人の性質にはない。サケの語根はサで、恐くはサクラ Sakura と同語根の語であらう。幸 (Saki) 榮 (Sakae) 盛 (Sakari) 等もみな同一の語根 (Sak) から出たものに相違なく、櫻の花のバツト咲きみだれたうつくしさは、繁昌、榮華、富貴等一切を聯想する。酒をのんで心楽しい境遇も同じであるから同語根からこの二つの語が出たのだらうとおもふ。實に然りと首肯せらるゝ。而して櫻花は常に繁昌、繁華、富貴のみではなく、平和、快樂、正義の氣象をも表現してゐる。吾人は此の國華の爛熳たる好時節に於て、内鮮同胞相提携して互に胸襟を開き聖代を謳歌せねばならぬ。

更に筆を轉じて述べんとするは、朝鮮の人が、往時日本の躑躅を頻りに愛賞せし事である。尤も史上にも、世宗二十三年(日本嘉吉元年)倭遣使。進躑躅花數盆。

と特筆し、又、姜希顔の『養花録』にも

我英廟(世宗)二十三年春。日本進躑躅花數盆。上命植内苑。及其花開。葉單而花瓣甚大。色類石榴。重附錦萼。久而不衰。上嘉賞。命上下林苑分植。

と載せ、日本より寄贈したる事實もあるが、常に世宗時代のみならず、其より以後四百數十年の間、多くの詩人が題詠してゐるのは、實に奇と謂はねばならぬ。

詠日本躑躅

申 叔 舟 號保開齋世宗時代人

我昔雲帆掛大洋。孤舟五月繫扶桑。當時暫寄須臾興。今日相看思渺茫。

扶桑躑躅

金 安 國 號慕齋燕山君時代人

催晨羲馭上扶桑。紅射晴輝照萬方。震域仙葩先孕秀。人間凡卉總無光。不隨千品爭繁麗。獨把孤標付太陽。國色豈終淪裔地。天姿端合薦明堂。枝涵玉露乘春澤。根托金盆寄海航。上苑韶華環紫極。聖君玄造愜青皇。瑤階始覺蓓蕾異。錦萼俄驚爛熳香。瑞德自應齊屈軼。娛歡寧肯比姚黃。賞希慶曆參群彥。才陋清平進艷章。願與周蓮同愛植。草教奇玩誤成荒。

謝瀟灑翁送日本躑躅

金 麟 厚 號河西仁宗時代人

海外風流絕代姿。閒園養得幾多時。誰知終日絲々雨。爲送連根第一枝。

倭躑躅

洪 重 聖 號芸窩肅宗時代人

何年日南種。作此海東花。異色披紅錦。仙姿染絳紗。暗中猶照夜。明處若蒸霞。五月開方盛。繁英滿我家。是れ僅に其の一斑に過ぎざるも、若し夫れ諸家の詩集より、日本躑躅・扶桑躑躅・倭躑躅等と題するものを採拾せんとせば、實に際限ないのである。而して此の如く愛賞したるは何故であらうか。之に就ては朝鮮に無かりしかと云ふ疑問さへ起る。然し既に一千年前、新羅の崔致遠(號孤雲)は、躑躅花の詩を作つてゐる。

石罅根危葉易乾。風霜偏覺易摧殘。己饒野菊誇秋艷。應羨巖松保歲寒。可惜含芳臨碧海。誰能移植到朱欄。與凡草木還殊品。只恐樵夫一例看。

又『東國輿地勝覽』の開城府山川の部にも、躑躅の事を書いてある。



進鳳山。在府東南九里。山内外杜鵑花盛開。世稱進鳳山躑躅。卞季良詩。遠上層峰一逕斜。白雲垂地掩僧家。山中古寺多相似。處々春風躑躅花。

殊に『羅山先生文集』には、寛永二十年(李朝仁祖二十一年)朝鮮の通信使行中の進士朴安期(號螺山)と躑躅花に就ての問答が載せてある。言ふまでもなく羅山は林道春の事で、徳川幕府の學政を司りし大儒である。此の問答の如きは事極めて些細ではあるが、知識を海外に求めたる一端が窺はれる。

先生曰。馬喫躑躅花。則中毒。或病或斃與羊不異。想貴國馬亦然乎。欲解其毒救其死。而未知藥。請示其藥方爲幸。救物者廣仁之端也。勿爲靳固可也。安期曰。未曾見喫躑躅花而病者。未嘗知救藥。先生曰。躑

躅花者杜鵑花也。可得其旨以問馬醫。安期曰。杜鵑與躑躅不同。躑躅有毒。杜鵑花則食喫不妨云。

『東國輿地勝覽』に「杜鵑花盛開。世稱進鳳山躑躅」と書し、朴安期の「杜鵑與躑躅不同」と答へてゐるのは異様に思はるゝが、支那・朝鮮の字書・韻書を觀ると、杜鵑花・躑躅・山石榴・映山紅・謝豹花を同種としてある。然し何づれにしても朝鮮に躑躅のある事は叙上の諸記で明かである。其の種類のの中には有毒のものもあらうが、洪錫謨(號陶厓純祖時代人)の『東國歲時記』の中には

三月三日。採杜鵑花。拌糯米粉作圓餅。以香油煮之。名曰花煎。卽古之熬餅寒具也。

とあり、又予は往年、北鮮慶源に客たりし時、長白茶なるものを饗せられた。之は白頭山に産する躑躅の葉なりとの事で、香氣もあり味も甘美で、彼邊の人は長命の藥と稱すに由ても、亦朝鮮にて躑躅を藥用視する事が判るのである。

斯の如く躑躅の其土にあるにも關はらず、日本の躑躅を愛賞し、而して日本の名花にして且移植に容易なる櫻を顧みざりしは何故であらうか、尤も日本に於ても寛文(李朝顯宗時代)より延寶(李朝肅宗時代)に亘り躑躅栽培の流行した事がある。然し朝鮮の人が日本の躑躅を珍重せしは久しき歲月の間であつて。決して一時の流行では無い。如何にしても陽氣なる櫻を移植せずして躑躅を愛賞したるは不思議の至りである。

——(大正十四年四月稿)——



# 博多と朝鮮人の事蹟

## 緒言

鳥も通はぬ玄界灘と謠はれた渺茫たる海上を、一葉の小船に乗り、山成す巨濤に襲はれては鯨鰐の餌たらんとし、壹岐や對馬の港灣に幾日となく風向を窺つて、漸く日韓相互に往來したるの昔時、其の主なる發著點は、即ち今の博多であつた。博多は曾て那津と云ひ、後に灘津・灘の大津・荒津・袖の湊などの名も呼ばれた。應神帝の時、始めて此に筑紫都督府を設けられ、次いで最初の太宰府(今地名として存する太宰府は後世の移轉に係る)も亦建てられた。九州統治の重鎮、對韓外交の要衝を占め、遣唐使の船も難波津を出でて、瀬戸内海を過ぎ來り、此に碇泊するを常とした。然し一面海外への開放地たると同時に、他面に於ては外敵襲來の目的地たりしは言ふまでもない。要するに、博多は昔時、西日本に於ける内治外交且貿易の樞要なる地點であつた。

斯る關係上、古來朝鮮に於ては、博多に絡はる傳説もあれば又史實もある。就中其の著しきものとして諸書に記せるは、新羅の朴隄上、高麗の鄭夢周、及び李朝初期に於ける申叔舟の事である。今此れを茲に略述し、併せて徳川時代朝鮮通信使が、其の往復の寄航地としたる、博多灣外の相島に就て記すこととする。

## 朴隄上

朴隄上に就ては『東國通鑑』に委しく叙してある。然し新井白石の如きは、東史多訛と稱して同書を非難し、殊に此の朴隄上の事蹟を疑つて居る。茲には趙曠(號永湖又濟谷、英祖四十年の通信使)の『海槎日記』に於ける記事を轉載する。

博多津。倭音和家多。(略中)此地多朝鮮人事蹟。朴隄上。羅人也。羅王有兩弟。一質干高句麗。一質干倭。王募能使者。或薦隄上。隄上行説高句麗。得與王弟歸。王曰。寡人失兩臂。今全其一。而尙無一臂。又送隄上干倭。説不見聽。托以觀魚。因大霧出送王弟。自歸請命干倭。如春申故事。倭怒之。令隄上跌足於竹根之上。使稱日本臣。隄上應聲輒稱新羅臣。倭怒而燒殺之。隄上之妻。登鷄述嶺。望夫而死。(略下)此の趙曠のみならず、徳川時代朝鮮通信使の一行は、いづれも博多近海を通過したるため、其の紀行には朴隄上の事を書き、又弔詩を作つた人も尠なくない、左に示す趙綱(號龍洲、仁祖二十一年の通信副使)の『忠烈歌』の如きも亦其の一である。

余行過雞林。登鷄述嶺。傷朴隄上之妻死于其處。及抵日本。又過博多州冷泉津。即隄上所死地也。夫死於國。婦又殉夫。兩美并稱。雙節俱全。眞可謂忠臣烈女也。余嘗覽史而嘉慕之。今行弔兩貞魂。豈不悲哉。遂爲詩。名曰忠烈歌。

昔度鷄述嶺。今過冷泉津。嶺樹蒼々不見日。津流浩々愁殺人。哀哉新羅朴隄上。夫婦兩處俱歿身。夫死國婦死夫。夫忠婦烈昭々照千春。婦死猶爲雞林山上石。夫歿已化博多城下塵。石望行人無轉時。塵與孤魂歸不得。我欲招之魂不聞。唯有悲風颯々吹荆棘。擊節聊爲忠烈歌。臨江一唱淚橫臆。

朝鮮の歴史に據ると、朴隄上は新羅訥祇王時代の人で、彼れが日本に使したるは、允恭天皇の朝に相當する。事の實否は姑らく措き、新羅王我が贅肉を噉へと叫びし調伊企儺の忠烈と、松浦山上に石と化したる佐用姫の



貞節とを、合せたる如き一の傳奇である。詩人久保天隨は、曾て三韓樂府二十闕を作り『憂息曲』と題して此事を賦し、序中に『倭皇大怒、縛隄上。諭以禍福。隄上守節不屈。倭皇乃剝其脚皮。刈菴葭。使趨其上』と曰ひ、又『炮烙之刑極慘毒。周苛不屈真剛腸』と歌つてゐるが、いづれ朝鮮の或書に讀まれ、斯る粗暴な語を成したものであらう。之れを前に掲げた趙曦の文に、單に倭と曰ひ、又『令隄上跌足於竹根之上』と曰へるに對照する時は、此に大なる差違を發見する。元來、朴隄上の事は傳奇と同様のもので、確たる證據が有るのではない。朝鮮の諸書に人嚇しの文句を遣つてゐるは、結局時代が然らしめたに過ぎぬ。趙曦は流石に平和の使臣であつたゞけ、比較的穩かに述べてゐる。今日朝鮮の古史より資料を取らんとする者は、大に慎重の注意を要せねばならぬ。

### 鄭 夢 周

朝鮮理學の祖として、政治家として、又外交家として、殊に高麗の忠臣としての鄭夢周の名は、普ねく天下に聞え、其の事蹟は敢て縷述を要せぬ程已に知悉せられて居る。故に茲には單に日本に使したる事を記すに過ぎぬ。

彼れは高麗辛禔王三年丁巳、即ち今より五百四十九年前、日本の天授三年九月に渡海した。其の何故に使せしかは、李崇仁の『送鄭達可奉使日本詩序』(東文選所載)に明かだ。達可は彼れの字であつて號を圃隱と曰つた。

李崇仁は陶隱と號し、圃隱・牧隱(李禮)と文名を齊うしたる當代の學者である。

(前略)日本國霸家臺使者至矣。(中略)殿下若曰。霸家臺日本巨鎮也。使者來夫豈徒哉。(中略)殿下勞慰優渥。使者

獻書弊訖進而告曰。主將聞島夷竊發、焚蕩人室廬。孤寡人子婦。至或憑陵近地。且奮且耻。遂欲殄滅之。

遣賤介以報師期。殿下聞其言益嘉之。勅有司館殺。使者加等。留月餘告歸。則殿下召宰相曰。報聘禮也。

矧今通隣好息寇災。聘使宜慎簡哉。於是遣成均大司成鄭達可以行。其交遊之舊。咸歌詩贈焉而屬予序。

予惟日本氏有國最古。自漢魏世通華夏。衣冠制度粲然可觀。今霸家臺主將。英豪武毅爲一方藩翰。思戢暴

亂以成兩國之好。其用心可尙己。達可學博古今。氣醇以方。言溫而辨。(中略)自聞命之日。躍々然直以爲己

任。視其溟渤不翅若坦塗然。聘使可謂得人矣。其通隣好息寇災。可曉足待也。(下略)

霸家臺は即ち博多であつた、九州探題今川了俊の遣はした使者である。彼れは直ちに之と同行し、博多の太宰府に至り交隣の利を説く極めて痛切に、相互の感情を融和して深厚なる待遇を受け、其翌年七月に歸國した。彼れが客裡作つた詩の中に次の如うなものがある。

奉使遊桑域。從人間土風。染牙方是貴。脫履始爲恭。柳入新年綠。花如故國紅。客居殊寂寞。喜聽足音登

平生南與北。心事轉蹉跎。故國海西岸。孤舟天一涯。梅窓春色早。板屋雨聲多。獨坐消長日。那堪苦憶家

此の梅窓春色早。板屋雨聲多の句は、古來朝鮮人の口に膾炙してゐる、それは何故かと云ふに、朝鮮には輒

近まで梅樹は無く、瓦屋藁屋だけで板屋も亦無かつた、此句を新奇に感じたのは尤もである。又前首の染牙・

脫履の二句の如きは、當代日本の風俗を宛然觀るやうに寫してゐる、更に左の詩の後聯、却喜云々の十四字に

至つては、彼れが如何に意志の疏通せしに感激したか、窺はれる。



海島千年都邑開。乘槎到此久徘徊。山僧每爲求詩至。地主時能送酒來。却喜人情猶可賴。休將物色共相猜。殊方孰謂無佳興。日借肩輿訪早梅。

彼れは此の如く日本の人情の意外に厚きを感じた。殊方孰謂無佳興。日借肩輿訪早梅。と吟じたのも事實である。されば其の觀音寺の作に曰ふ。

野寺春風長綠苔。來遊終日不知回。園中無數梅花樹。盡是居僧手自栽。

溪流遶石綠徘徊。策杖沿溪入洞來。古寺閉門僧不見。落花如雪覆池臺。

觀音寺とは現に博多の東南二里、二日市近くに在る清水山普門院のことである。同寺は天智天皇より聖武天皇に至る七十八年間に成りし宏壯なる建築で、關西第一の巨刹とされた。爾來數次祝融氏の災に罹り、當時の面影は無いが、尙ほ多くの國寶を藏し、觀世音寺と題せる小野道風の扁額、『都府樓觀看瓦色。觀音寺只聽鐘聲』と詠める菅公の句に名高き銅鐘も亦残つてゐる。

彼れは文武兼備の偉人で、壯時已に女眞を破り、日本に來りたる前後には遼東及び南京にも使した。又學堂を建て、郷校を置き、義倉を造り、水站を設け、新律を定むる等、文化的事業を起した功も多大である。李朝太祖成桂の策謀に陥つて、終に高麗の王室に殉し、哀れ開城善竹橋頭に碧血を濺いだり、太宗に及んで領議政を贈り、文忠と諡せられ、永く祭祀を享くるに至つた。肅宗が彼れの畫像に題したる贊語は、能く一生を盡くしてゐる。

粹然和氣。光風霽月。衣冠高古。精采發越。才抱王佐。學倡性理。世崇異端。獨存孔子。居家惟孝。立朝

以忠。專心所事。就死從容。烈々侍中。扶植綱常。窮天罔墜。令名無彊。

### 申 叔 舟

申叔舟、字は泛翁、號を保開齋と曰つた。其の略歴を叙すれば、世宗己未文科に登第し、丁卯の重試に選ばれて集賢殿に入り。日本に使い、歸つて『海東諸國記』を著し、又命を承けて遼東に至り、辛未直提學と爲り、文宗の壬申、使を奉じて明に行き、世祖の即位するや、大提學を拜し、後ち右議政・左議政を経て領議政に陞り、成宗の時に至つて歿した。彼れは六朝に歷事して常に樞機を參畫したる李朝五百年間、罕に見る所の純良なる功臣である。

彼れの日本に渡海したのは、世宗二十五年癸亥（日本嘉吉三年、今を距る四百八十三年前）將軍足利義勝卒し、同義政其の後を繼ぎたる爲、此れが弔慶に關しての通信使下仲文と共に書狀官として赴きしもので、歸途には對馬に於て宗貞國と歲遣船の數を約定し、交隣上の親和を圖つたのであつた。

彼等一行の目的地たる京都の往復には、博多に留まること久しかつた。それは當時博多の太宰府は、對韓外交の權力を掌握して居た故である。彼れは後年、日本僧壽蘭の爲に作つた詩の中に次の如うに言つて居るが、海山の景を寫して畫の如く、人をして其の間に遊騁せしむる概がある。

昔我泛海窮東溟。綵纜手繫扶桑枝。馬島松浦隔海隅。九州山勢西南趨。管崎斜連霸家臺。白沙十里松萬株。黑水揚波沒涯涘。平生漂梗緣桑弧。赤關尾路兵庫津。淡路四州羅星辰。王都百里山作城。西北嵯峨東嶙峋。



三川流惡南注海。町條井々街巷勻。南仙相國領諸寺。觚稜日照輝金銀。似聞干戈起輦轂。朱門寶利俱灰塵。栖芳有寺在西山。洞府幽深隔人寰。客中暫凭潭北軒。往々魂夢尋清閑。光陰倏忽三十秋。胸中歷々懷舊遊。眼底紛々田與海。天時人事同悠悠。撫今念舊重悲感。扶桑照檻空白頭。

前詩の後半及び左の文を見ると、彼が如何に京都の形勝を愛し、如何に足利氏の厚遇を受けしかも想像される。日本國王殿下とは、足利將軍を指したのは言ふまでも無い。

癸亥之春。受命爲日本通信使書狀官。艱難跋涉。閱數月。得達于京都。館于東山之慶雲菴。方畢傳使命而日已在翼。日本國王殿下。以所館幽僻。令觀于都城諸寺。乃於孟秋上澣六日。遊相國寺。越三日又遊于西山之天龍寺。遂曆栖芳寺而息焉云々。(日本國栖芳寺 遇眞記の一節)

又次の詩の如きは、久しく博多に滞在して、異土の客たるに倦みしをも推測される。

在博多島、次韻仁叟伯玉仲章謹甫山居

半歲天涯已倦遊。歸心日夕故山秋。山中舊友青燈夜。閑話應憐海外舟。

一任東西自在遊。滄溟萬里海天秋。翻思有命應先定。字是泛翁名叔舟。

彼れが著たる『海東諸國記』は、當時の日本、琉球の歴史・地理・風俗、其他日韓關係に就き詳述したるもので、夙に日本に於ても繙刻し、今尙ほ攷古の好資料として重んぜられてゐる。其の筑前の事を記せるを見るに、

筑前州。山有り海濱を距る三里、山頂に火井有り、日正に照せば煙焰天に漲る。水沸いて溢れ、凝て硫黃

と爲る。凡て硫黃を産すること島皆同じ。郡十五、田水一萬八千三百二十八町九段。州に博多あり、或は霸家臺と稱し、或は石城府と稱し、或は冷泉津と稱し、或は呂崎津と稱す。居民萬餘戶、小二殿・大友殿と分ち治む。小二は西南、四千餘戶、大友は東北、六千餘戶、藤原貞成を以て代官と爲す、居人行商を業とし、琉球・南蠻船舶の集まる所の地。北は白沙三十里、松樹林を成す有り。日本皆海松、唯此に陸松有り。日本の人多く畫に上ばせ以て奇勝と爲す。我國に往來する者、九州の中に於て博多最も多し。(原文)と書いてある。此れにて四百八十年前の博多を略ぼ想像せらるゝが、福岡は當時福崎と稱する貧しき漁村に過ぎなかつた。其の一躍して盛大なる城市と成つたのは、黒田長政が、筑前五十二萬石の國主として封せられたる慶長年間である。

更に同書に、當時の風俗を叙しあるは、朝鮮人の眼に奇異に映せしを知り得るのみならず、今日内地人としても亦珍らしき感じがある。

飯食漆器を用る。尊びて土器を用ふ、筋あり匙なし○男子斷髮して之を束ぬ。人短劍を佩ぶ。婦人其の眉を抜き其の額に黛し、背に其の髪を垂れ、之を續くに髻を以てし、其の長き地に曳く、男女容を治ふる者、皆黒く其の齒を染む○凡そ相遇ふ、蹲坐以て禮と爲す、若し道に尊長に遇へば、鞋笠を脱ぎて過ぐ○人家、木板を以て屋を蓋ふ。惟天皇國王居る所及寺院は瓦を用ふ○人喜んで茶を啜る、路傍茶店を置きて茶を賣る、行人錢一文を投じ一椀を飲む。人居處々、千百群を爲し市を開き店を置く。富める人、女子の歸つぐ無き者を取り、衣食を給して之を容飾し、號けて傾城と爲し、過客を引きて留宿せしめ、酒食を饋り直錢を



收む、故に行く者糧を齎さず(男女と無く皆其の國字(國字號加多千 那凡四十七字))を習ふ、惟僧徒の讀む經書漢字の如し  
○男女衣服、皆斑染、質を弄うして文を白くす。男女上衣纒に膝に及び、裙は長く地に曳く、冠無し、或  
は烏帽を看く。天皇・國王及其親族の看くる所、立烏帽と號く、笠は蒲或は竹、或は相木を用ゆ。(原文)  
申叔舟に就ては茲に筆を擱き、他の一切を省略する。但、特に書き通してならぬのは、彼れの病に臥して命  
且夕に逼るや、當時の王、成宗は使を馳せて、彼の言はんと欲する所を問はれたるに、彼れは乃ち、願くは日  
本と和を失ふなかれと對へて瞑したることである。後ち七十年退溪李滉も亦た、日本と交を絶つは社稷の憂に關  
し、生靈の命に係ると上疏した。兩賢の戒めは一致してゐる。他日暗澹たる戰雲八道を掩ふたのも、此の戒めを  
等閑に附したからである。

## 相 島

徳川時代、宣祖四十年(日本慶長十二年)より、英祖四十年(日本明和元年)に亘る約百六十年間、十一回の通信使が、往路は  
壹岐より歸路は赤間關(今の下關市)より、必ず寄航したる筑前の相島は、福岡の西、西戸崎(海中道)の北に當る方敷町  
の小島で、申叔舟の『海東諸國記』に「丁亥年。遣使來朝。書稱筑前相島大將軍源朝臣正家」と書いてある  
のが即ちそれなのである。國音、相は藍に通ずるを以て、通信使に關する日鮮兩邦の諸書には、いづれも藍島  
と書いてあるが、同じく航路に當る海中(下關市の西、若松の北)にも亦た藍島(長門國、豊浦郡に屬す)なるものがあるため兎角誤を生じ易  
い。相島の東北海中に花栗(又鼻剗)と呼ぶ巖嶼があつて奇觀と稱せられ、李景稷(號石門、光海君九)の「扶桑錄」

に「藍島有小島。中穿如門。謂之鼻口島」と曰ひ申維翰(號青泉、肅宗四十五年通信使の製述官)の『海游録』にも「有奇巖卓十餘、  
突立海面。左右兩穴。呀然若鼻竅。其名鼻窟云」と曰つて居る。然るに左の文を、吉田博士の『大日本地名辭  
書』には、長門國豊浦郡藍島の項に入れてある。是れ全く同名より生じたる誤と言はねばならぬ。

藍島之東。距岸二町。有一石門。俗名鼻剗。高可五六丈。雙闕相去三丈許。上爲宇。若鑿通。然屹立漫々之上。舟過其内。亦可  
三丈。實天造之奇也。晚頭命棹船往觀。然風浪頗厲。不能入門而反。巡歷濱。絕壁千尋。巖巖岌岌。而石面盡剖裂。如割如疊極  
齊整。大可奇也。薛羅縫其罅。碧松架其頭。下則橙牙嵌嵌。屈曲爲洞。浪匯入其口振蕩。實中土人所駭目也。(北禪文章)

左に通信使中の筆に成れる藍島(以下相島を)に就ての二三の記事(原文)を掲載して、當時筑前の太守黒田侯が、  
如何に彼等を鄭重に待遇せしかを知る資料とする。

藍島、延袤數里、居人僅に數十戸、筑前州の地界なり、館舎皆新造、鋪陳の什物、其の齊楚を極む。玄  
蘇、景直等、來りて對飯を請ふ、饌品亦極めて清潔、器皿皆新造を用ひ、塗るに金銀を以てし、上下員役  
の供備具せざる莫し、太守長政、麾下黒田三佐衛門等を送り一行を支供す。(宣祖四十年通信使慶應、  
暹の海棧錄原文、漢文)

藍島、筑前州に屬す。上に青山有り、三面を障ぎて半月の如く、中衍瀑を爲す。民田屋舎俯て海に臨み、  
海外遙山、彎控する百里許、便ち平湖圓鏡を作す。草木雲烟、皆爽朗幽楚、觀る者輒ち恍然自ら失す。即  
ち余が航海以後、初めて神仙の境を見るなり、新築の館舎千間に近く、帳御の諸物華麗、厨盤日供、一岐  
に視るに又倍す。余が館する所西隅に在り、亦甚だ瀟洒、西山爽氣を挹む可し。太守源宣政、食廩五十二  
萬石、福岡を治す。此を距る東南五十里。(中略)福岡十里の外、博多津有り、是れ新羅の忠臣朴隄上、義に  
死するの處、鄭圃隱先生、使を奉じ留めらるゝも亦此の地、之を倭に問ふ。倭言ふ故事知る者無しと。蓋



し知らざるに非ず、向つて之を諱むなり、雨森東(洲)藍島に在り、我に贈るの詩に「雄關月照霸家臺」の句あり、霸家臺、何許に在りや、東曰く是れ博多津、倭音和家多、貴國申文忠叔舟使を奉せし時、筆録して乃ち霸家臺と曰ふ。此れ音譯の訛に因る、而も其の義便ち佳、今に至り呼びて以て名と爲すと。(申維翰の「海游錄」)

(原文漢文)

右の文中、博多を霸家臺と呼ぶに至つたのは、申叔舟より始まると雨森芳洲が曰つたとしてあるが、芳洲のみでなく、朝鮮人の多くは斯く信じてゐる。然し此れは誤りで、前に掲げた鄭夢周の條に、李崇仁が『日本國霸家臺使者至矣』と書ける文あるにても其の非なるを證せらるる。如何となれば此文は申叔舟の渡日よりも十六年前に成りたるもので、霸家臺と呼んだのは尙ほそれより舊きものと認めねばならぬ。

島の長廣、四五里に過ぎず、彈丸の小と謂ふ可きなり。四而則ち極めて通濶と爲す。北馬島を望む、馬島の北、想ふに是れ我國の山川、誠に一蹴して到るべきがごときなり。西岐島を望む、又其の西に肥前州有り、而して遙に殘山の外、海天に接するを見る。云ふ是れ江南の船長崎島に來り通ずる即ち此地なりと。中原の消息憑問の人無しと雖、天末を指點すれば、隱然眼前に森羅するがごとし。顧みて副使に謂つて曰く、遠役苦と雖、吾輩をして此行有らざらしめば、想ふに應さに濟谷・倉洞の弊廬に吟じ病むべきなり。其れ何を以てか遙に中國の山河を望まんや。偏邦に生れ、井に坐じて天を觀るがごとき有り、而るに今方さに天地の大を見るなりと。副使曰く然り。渡海以後、實に無興の況、今日始めて快濶事を得たるなり。山勢逶迤、南より以て東して赤間關に達る、幾んど五六百里と爲す。復た幾州郡、幾勝地有らん

も、四望周圍、洽ねく數千里に過ぐ、日本地方、未だ詳に知らずと雖、其の遠望通暢、未だ此地に愈さるもの有らざるなり。倭船百餘艘、赤間關より風に乘じ帆に飽き、霎時の間、已に數百里を過ぐ。時に夕照山に返り、海波鏡の如く、亦一光景を添ふ。畫師をして模せしめば、果して能く此の眞箇境界を寫し得るや否や、設令眞景を畫き出すも、我心の豁然たる處に至つては、想ふに半分をも模畫し得ざるなり。(趙曦の「海遊日記」原文)

此れ英祖四十年の通信正使趙曦が、副使李仁培と共に、藍島の高處に登れる即興を叙したるものであるが、其の快濶なる風景に對し、副使を顧み「遠遊苦と雖、吾輩をして此行なからしめば、想ふに應さに濟谷(趙曦の郷里)・倉洞(李仁培の郷里)の弊廬に吟じ病むべきなり」と曰つてゐるの、其の反面に朝鮮の兩班なる者が、常に溫突内に蟄居して、見聞の極めて狭小なりしを窺はれる。然し趙曦は日本より歸國の翌々年、咸南三水に謫せらるや、同時に隣邑甲山に謫せられたる徐命膺と相約し、白頭山の絶頂に登り、嘯咏を恣にしての歸途、圖らずも恩赦の報に接し、遠謫の禍は却つて探勝の幸に化したる果報者で、壯遊彼れの如きは當代無比と謂はれてゐる。

通信使一行を宿せしむべき藍島の客館は、其の都度、領主黒田侯が巨費を投じて新築したもので、其の待遇の他の諸侯に勝りしことは彼等の多くの紀行にも書いてゐる。又いづれの諸侯も、通信使には文學ある者を選び接待せしめ、且つ才を試み名を揚ぐべきの機會を與へたが、一方詩文自慢の朝鮮側では殊に詞鋒を闘はすを以て誇りとした。此れに關して福岡より出でたる學者は略ぼ左の如くである。



一、天和二年(肅宗八年、尹趾完一行) 貝原益軒・貝原趾軒・鶴原九臯・竹田春庵

一、正徳元年(肅宗三十七年、趙泰億一行) 竹田春庵、神屋松堂、釋鐵相

一、享保四年(肅宗四十五年、洪致中一行) 櫛田琴山・古野梅峰・小野東谿

一、寛延元年(英祖二十四年、洪啓禧一行) 櫛田菊澤・島村晚翠・井土魯珣

一、明和元年(英祖四十年、趙曦一行) 櫛田菊澤・井土魯珣・島村秋江(他日儒俠の名を博したる龜井道載(號南冥當時年二十一、作詩の妙を以て信使を驚かせしは此時である)

以上列記の中、殊に貝原益軒は、博識篤行を以て著はれた學者であつて、滔々たる儒流を超脱して居た。其の『益軒年譜』に「秋七月九日。與朝鮮學士三人會面。筆語且以詩爲唱和」とあるのみで、詳細を知るを得ざるは遺憾である。然し學士三人とは成琬(號翠)・李聘齡(號盤)・洪世泰(號滄)のことであるが、詩を以て無益の閑文字と看做し、實踐躬行を學者の本分と爲したる益軒としては、恐らく彼等を好敵手と思はなかつたであらう。鐵相は博多光明寺の僧で、詩に工に、又書を能くした。今尙ほ斷簡零墨も大に尊重せられてゐる。彼れは直接信使に面會はせぬが、左の詩を贈つて唱和を促した。(雜林唱和集に據る)

波瀾無恙。錦帆抵此。是兩邦之慶也。因賦拙律一篇。寄呈朝鮮國諸大官公笑政

星軺遠聘擗桑天。旌旆先光藍水邊。去國離家多嶮峻。慰情寫景有詩篇。秋風爽氣灑人骨。夜月清輝入客筵

勿謂東都千里外。錦帆明日浪華前。

當時の正使趙泰億(號平泉、又謙齋)・副使任守幹(號靖庵、又青坪)・從事官李邦彦(號南岡)の直ちに此れに次韻したのが次の

詩である。

海外高秋八月天。星槎夜泊筑陽邊。風帆阻滯經二日。韻釋慇懃寄一篇。王事賢勞催木道。仙家悵望隔蒲筵

他時儻可來尋否。屈指歸期在臆前。平泉

迢々客路日東天。眼底扶桑指點邊。一棹乍停藍水曲。上人遙寄碧雲篇。虎溪未及成三笑。驪彩失驚照四筵

便欲從師超世累。蓬山知在木杯前。靖庵

上人宜住蔚藍天。底事浮杯大海邊。會向仙槎聯寶筏。先從客榻寄華篇。玄機只在談空地。道骨難瞻誦偈筵

遙望禪菴何處是。白雲深鎖碧峰前。南岡

又、鐵相と同時に、神屋松堂は左の如く「藍島八景」を賦して、一行中の詩人李碩(號東郭)に唱和を求めたが、出船切迫、遂に之を獲る能はざりしとの事である。

藍島遠望 一螺積水中。髣髴望瀛蓬。只見雲橫處。素濤接鬢空。

橘峰湧翠 嵐光佳氣叢。山色曉來濃。疊翠開鴉黛。雲鬢粧點工。

志賀晴月 晴峰獨出烟。皎月扇容懸。萬里孤月客。遠望思悄然。

殘島漁火 雨氣海雲昏。漁火萬火屯。纔廻洲外去。浦月滿潮痕。

蛇海夕暈 航舟不可經。一簪入雲靑。只被斜陽照。波間錦繡屏。

一岐雲黛 山顏試曉粧。水鏡俯蒼茫。雲鬢秋容淡。修眉一抹長。

大島歸帆 島中數百家。僻似隱桃花。歸棹乘風至。悠然拍手歌。

新宮暮烟 熙朝實樂哉。浦戶似春臺。處々望烟火。携魚與酒來。



享保四年に、小野東谿が唱和したる詩篇は『藍島鼓吹』と題し、大阪に於て出版せられたのであつたが、今は稀有に屬し、只寫本として傳へられてゐる。

雞林分節。奉使殊域。洋溟萬里。風濤多艱。戴星衝霜。王事靡盬。賢勞何如。天神默祐。文候清嘉。國有法制。不得輒造行館。徒切慕蘭之恩。謹賦燕詞。伏冀郢正。不佞姓小野。名士厚。字于鱗。一字玄林。別號東谿。年二十八。爲筑前州醫臣。

奉呈青泉詞案

青泉

西風萬里木蘭舟。仙客乘秋海上遊。宮錦袍鮮鸞殿內。金蓮炬照鳳池頭。星移益部珠光見。雲繞蓬萊紫色浮。一世文宗申學士。名流六十有餘州。

奉和東谿醫伯高韻

扶桑八月繫孤舟。不羨銀河博望遊。落日層臺生蜃氣。青天危嶼出鰲頭。仙人拾翠行相贈。海客尋眞喜共浮。無限煙霞珠樹窟。文星乘興筑前州。

辱承惠韻與芳訊一通。盡拾鮫人淚。以修枯眼。讀之爽然。諷之琅然。實海外名山烟霧氣所化耳。奉玩千百。至今令人神狂。即高明有何過聽於鄙名。而投此馨香以賭木瓜耶。幸得丰姿眇膝。一下上古。是所仰冀。所以不辭陋拙。勉和鄙雪。若不附唾笑而塵之。願已足矣。僕姓申。名維翰。字周伯。號青泉。官今秘書省著作郎。行年三十九。作一可笑人。

右は同書より僅に二首を抜抄せしに過ぎざるが、朝鮮側なる權道(號卑)・姜柏(號耕)・成夢良(號軒)・張應斗(號菊)等の詩が多く載せてある。而して小野東谿に關しては、次ぎの如くに、申維翰の『海游錄』に具さに書いてあつて。當時歡交の情が紙上に活躍してゐる。

雨森東(洲)、筑前の兩記室を引きて來る。一は琴山と號し、一は梅峰と號す。人と爲り俱に敏にして慧、

座定まり、余戯に律語を以て之を挑みて曰く「得君琴上語。邀我筑前州」と、客喜んで笑ふ。即ち詩を以て唱酬す、遞に發して遞に答ふ、皆拙朴笑ふ可し。琴山識見殊に凡ならず、余と古今の文章及疑問數條を筆談す、頗ぶる奇言有り。小野玄林なる者あり、筑前の醫官を以て公事を被りて來る、唱酬の席に與かる能はず、詩を送りて意を致す。余詩文を以て之に答ふ。夜使館に往く、適ま其人を見る、方さに雨森東と帳道燈花の間に對語す、東、我を見て起て之を指して曰く、此れ玄林なりと、其の人妙少清揚、沾々喜色あり、通事をして替り謝せしめて曰く、蒙惠の篇什、百年の珍贖と作す可しと。(原文)

顧れば今を距る百五十二年より溯る百六十年間、通信使數百人の一行が、往復合せて二十二回寄泊して、叢爾たる孤島の蟹舍蟹屋も、衣冠の影に掩はれて喧雜の境と化したのであつた。爾來歲月は茫として煙波の如く、何等史的關係なく、只釣漁を業とする島民は、往時朝鮮人の斯くも寄泊せる事を知る者已に罕れなのである。然し藍島の名は朝鮮の書籍に刻されて長く滅する事はあるまい。聞く所に由れば福岡舊藩士の中には、當時朝鮮通信使行の人々の書いた詩幅などを、今尙ほ珍藏する人もありとのことである。(大正十四年八月稿)



## 朝鮮人の白衣に就て

朝鮮人の一般が、四季を通じて常に白き衣服を着る事に就ては、種々の傳説を聽かぬでもないが、畢竟是れ古來の風習を頑強に墨守否白守すると云ふべきのみで、他に何等理由の有るのでは無い。世界いづれの國にせよ、古代に於ける衣服は、原質其の儘、着色せぬものを用ゐ、其の染料の發見せらるゝに従ひ、種々なる色彩を加ふるに至つたもので、殊に紬・麻を以て衣服の重なる原料と爲したる、日本・朝鮮・支那の如きは、原質自然の色、即ち白を用ゐたのは言ふまでも無い。左に先づ支那の文獻より朝鮮に關する例證を抜載する。

一、魏志(今より約千三百七十年前の著)、馬韓の條 其の民は土著にして種植し、蠶桑を知り、繇布ウツを作る。又衣は布袍、

足は履革にして蹻踰す。(繇は即ち綿の字、今は棉花に用ゐるが、古は帛と系の合字として絹を稱した。布

は麻・苧・葛等の織物である。)

一、同書、辰韓の條 土地肥美にして五穀及び稻に宜し、蠶桑を曉り、繇(絹と麻とを合せ織りたる物)・布を作る。

一、同書、扶餘の條 衣は白を尙び、白布大袂、袍褌して草鞞を履す。

一、隨書(今より約千二百八十年前の著)、東夷傳 服色素を尙び、婦人髷髮頭を繞らし、雜綵及珠を以て飾と爲す。

一、宋史(今より約五百八十年前の著)、高麗の條 士女素服を尙ぶ。

一、明の董越の朝鮮賦(今より四百三十八年前の作) 衣皆素白にして布縷多く篋、裳則ち離披して襞積も亦疏。

是れに由つて觀るも、朝鮮にては、蠶絲・麻布の類が昔より作られ、服色の素白を尙びし事明瞭である。而

して絹・布は賦税にも當て、通貨にも亦代用せられた程であるから、可なり多量に製出されたものと思はれる。

一、隋書 高麗(高句麗)は人ごとに、稅布五匹、糧五石なり、遊人なれば、三年に一度稅す、十人にして細布

一匹を共にす。

一、後周書(今より約千二百八十年前の著) 高麗(高句麗)の賦税は絹布及び粟なり、其の所有に隨ふ、貧富の差等を量りて之を

輸す、

一、同書 百濟の賦税は、布・絹・綠麻及米等を以てす。

一、高麗圖經(今より約八百百年前の著) 泉貨の法なく、惟紵布・銀瓶ビョウビンの二を以て其の直に準せしむ。(銀瓶とは、高麗肅宗二年に、銀瓶を用ひ貨て

と爲し、銀一斤を以て之を作り、濶口と名つけたのを云ふ。)

更に朝鮮の史上に據ると、白衣を著たる證としては、屢々其の禁令ありしを見るも明かである。李朝純祖時代の領議政鄭元容(號經山)の著たる『文獻撮錄』に「白衣之禁」と題し、次の如く書いてあるので、其の梗概が窺はれる。

肅宗(李朝十代)十七年、白衣の禁を申ぬ、國法元白衣を禁するの制有り。明宗(李朝十代)乙丑より以後、累ね

て國恤を經、仍ほ素衣を着け、毎に華人の笑ふ所と爲る。宣祖(李朝十代)申ねて之を禁す、士人職無き者、

亦紅衣直領を穿つ。顯宗(李朝十代)の朝又之を禁す、士大夫遵行すること十數年を數ふ、後又因循廢闕す、

是に至り又白衣を禁し青衣を着るを命ず、英宗(李朝二代)二年命じて公卿より士庶に至るまで皆青衣を着けしむ。



然し此れは決して李朝に始まつたのでは無く、高麗時代に於ても既に禁令を出してゐる。即ち『東國通鑑』忠烈王元年(今より六百年前)六月の條に、左の如く書いてゐるのが其の一例である。

太史局言ふ、東方は本位、色當さに青を尙ぶべし。而して白なる者は金の色なり、國人自ら服を易へ、多くは褻たふつくるに白紵の衣を以てす。木は金を制するの象なり、請ふ白色を禁せんと、之に従ふ。

李朝に於て屢々白衣の禁を出した中にも、英祖は最も嚴しく之を行はんとした。其の二年丙午(今より二百年前)の『實錄』に

公卿士庶の吉服皆青を尙ぶを命ず、(中略)有國以來、服色各尙ぶ所有り、我國は東國なり、宜しく青を尙ぶべし、而も、人皆白を衣とす、豈に佳兆ならんや、況んや先朝申ねて公卿より士庶に至るまで、吉服一體に青を尙ばしめたるあるをや。

と有り、又其の十四年戊午(今より百八十九年前)の『實錄』に

右參贊李德修上疏す、略に曰く、論ずる者謂ふ、我東國に國す、東は時に於て春たり、色に於て青たるに、而も俗、衣の白きを喜ぶ、宜しく白を禁じて青を尙ばしむべしと。殿下亦既に其の言に従ひ行はしむる日あり。臣竊に謂ふ、萬物東に始まりて西に成る、東方の人西方の色を尙ぶは其の始あり終ある所以(中略)是が故に東俗の白を尙ぶこと前史多く之を記せり、隋書・宋史及明の董越の錄する所、其の尤も明白にして徵ある者なり。夫れ俗を成すや數千年、今にして之を改むるは未だ其の可なるを見ず、臣謂ふ其れを已むるに如かざるなりと。上答ふるに當さに思量すべきを以てす。翌日教を下して曰く、右參贊の

疏、黙して之を思ふに過てりと謂ふべきなり、夫れ元亨利貞、包む所の者は元なり。春夏秋冬、其の本は即ち春なり。仁義禮智、包む所も亦仁なり。惟元なり故に能く永うして貞し、秋冬の氣肅然と曰ふと雖、其の終を成す所も亦是れ春なり、此を推して以て觀れば、秋成つて冬藏するは仁に非ずして何ぞ、我國白を尙ぶ、是れ先儒の言と雖、其の尙ぶ所を謂ふに過ぎざるなり、豈に近日のごとく甚しうするを謂はんや。卿士大夫藍を以て耻となし、下賤に至るまでも亦此の習に催ひ、皆白衣を着く、我國青丘に處り、國を立て仁を垂る、若し漢の赤を尙びしに比べば豈に仁に従はざるか。右參贊只舊史を覽て近弊を察せざるなり。忠實文の相更はる亦時に隨ふのみ。顧ふに今や世道刻薄、生民蕭然たり、而して朝廷の上、未だ仁厚の風を聞かず、此の時當さに仁を尙ぶべきか白を尙ぶべきか、近來人心浮薄、藍を改めて白と爲さば、必ず將に紛然たらんとす、其れ中外に曉諭せよ。

と有る如き是れである。英祖の下教は世道の刻薄、人心の輕浮を慨すること深く、仁愛の氣が充ちてゐる。李德壽は西堂と號し、全義の名族で、後に『肅宗實鑑』を編修し、又文衡を掌りたる當世の大儒であつた、其の上疏を見るも硬直の人たりしを想像するに足りる。

叙上の如く、朝鮮人の白衣に就ては、高麗の後期より李朝の殆んど歴代に亘りて禁令を發したのであるが、其の改めよとの趣旨は、數百年間同一で、即ち朝鮮は東に在り、東は五行に於て木に位し(五行の説は、土を主と爲し、木を東、金を西、火を南、水を北と爲す)、時に於て春たり(四季を四方に配し、春を東、夏を南、秋を西、冬を北と爲す)、色に於て青なり(五色を天地に配し、黄を中天、青を東、白を西、赤を南、黒を北と



爲す。故に青色を用ゆべしと曰ふにある。斯の如く屢々禁令の出づる毎に服従したやうなもの、數年ならずしては白衣の舊に復し、幾たびも同じ事を繰り返して遂に容易に改め得ざる程の習風を成すに至つた。尤も當に衣服のみではなく、住居の構造、食物の割烹の如きも、更に改新工夫を爲さず、依然として舊風を守るに過ぎぬのである。

尙ほ傳説の中に、高麗時代には、佛教が盛んに行はれ、而して佛教に於て謂ふ所の西方淨土とか、清淨無垢とかは、即ち色に於て白を意味するもので、又白衣觀音などと稱するが如く、佛の多くは白衣を纏ふてゐる。従つて佛を極端にまで信仰したる當時の民衆は悉く白衣を着けた爲め、其餘風が今日にも遺つて居ると言ふのであつて、如何にも理由ある如くにも思はれるが、白衣は高麗に始まつたのではなく、遠く昔より繼續して來たのである。然し此の説の如く佛教の關係上、或は着用の度を一層増したかも知れぬ。

斯く白衣を用ゆるのは朝鮮の風習ではあるが、古代より王侯貴人の常服、殊に朝廷の服制等は他の色彩のものを使用したるは言ふまでも無い。其の例を次に掲ぐる。

一、舊唐書(今より約九百八十年前の著) 高勾麗傳 衣裳服飾は唯王のみ五綵し、白羅を以て冠を爲し、白衣小帶す、其の冠及帶は成な金飾を以てす。官の貴き者は即ち青羅を冠とす、次は緋羅を以てす、二鳥羽を挿み及び金銀を飾と爲す、衫は笄袖なり、袴は大口白韋なり、帶は黃にして韋を履とす。國人は褐を衣て弁を戴き、婦人は首に巾幘を加ふ。

一、同書、百濟傳 王の服は大袖紫袍にして青錦の袴、烏羅の冠にて金花を飾と爲し、素皮の帶、烏革の履

なり、官人は緋もて衣と爲し、銀花もて冠を飾る、庶人は緋紫を衣るを得ず。

而して白衣と、もに聯想さるゝ染色の事に就ては、參考と爲すべき何等の資料も無い。但傳説に、衣の染め

方は僧寺より始まり、遂に民間に普及したものであると云うてゐる。今日でも僧尼の多くは、自ら 덕가랑님 (樞の類)・竹葉(黒燒とし)・지치・블푸레(皮木)等を以て衣を染むるとの事である。殊に朝鮮には近來まで染物を職業

と爲す所謂紺屋なるものは内地の如くに無かつたのである。

序でに棉花の朝鮮に入りし事に就て、曹植(號南冥、明宗、宣祖時代の人)の『木綿花記』を抄録する。

惟我東方。初無木綿花。人之衣服。以紬以麻。而所謂絮不知其以何物爲也。(中)高麗末恭愍王時。晉陽人

文益漸(略)至正二十年間奉使入元朝。事有意外之屯。旅食京華至三載之秋。將還本國路出村田。田有白花如雪。文君見奇之。使從者金龍摘取數三箇。有守田老嫗曰。汝何爲者。此木綿花。外國人摘去。則摘者守

者均服同罪邦家之禁令也。汝自摘去宜服其辜。我有何罪同被重典。速去毋遲不使人知。君聞言思之曰。古

詩云木綿花發錦江西者。必謂此花也。藏諸囊橐而來。翌年種之花階上。春有五色花。秋有白綿花。隣里村

巷之人競來觀賞。得其種而分植。自是漸繁遍於國內。云々

是れ實に棉花を朝鮮に種植したる始めであつて、今より五百八十年前に屬する。李朝に至り太宗は、文益漸の功を賞して參知政事を贈り江城君に封じ忠宣と諡せられ、世宗は更に領議政を贈り富民侯に封せられた。其の綿種を始めて栽培したる處は、慶尙北道義城郡山雲面堤梧桐なりと言ひ傳へられてゐる。

棉花は元來熱帶地方の産である。支那にては宋・元間に播種された、日本でも元龜・天正頃までは多く麻の



衣服を着けた、恐らく棉花の播種は朝鮮より晚かつたであらうが、耕作は盛んに行はれ、培養法は益々研究され、其の收穫甚だ多く、従つて利用の途も發達してゐる。而して往昔朝鮮と同じでありし白衣は今や只、婚禮、葬儀等の式服位に古風を遺すのみとなつた。此等によつて觀るも、桑椹文化の進歩如何を比較し得らると思ふ。

——(大正十四年六月稿)——

日本教化に大功ある朝鮮出身者

## 本妙寺日遙上人

附、加藤清正に殉死したる金官

法鼓鑿鑿晝夜に響き、香煙繚繞樓臺を籠め、賽者絡繹として常に絶えざる、肥後熊本の本妙寺(號發星山)は、銀杏城と對峙する高地に據りて堂皇たる壯觀を構へ、日蓮宗の中本山たる位置を占め、末寺諸方に亘りて六十餘を有し、衆生濟度の勢力も亦た偉大にして、信徒の數、百萬を超え、其の名徧ねく世に知らるゝ九州屈指の雄刹である。

斯くも同寺が、四方の信仰を受くる所以のものは、曾て國家安全の勅願所たる光榮を荷うたに在る事は勿論であるが、其の主たる原因は、智仁勇の三徳を兼ね備へ、啻に攻城野戰の功のみならず、平素信仰措かざりし『法華經』中の「國土觀」・「人生觀」竝に日蓮上人の『立正安國論』より受け得て、之を事實に現成し、水利に、土工に、殖産に、興業に、儒學に、文藝に、偉績を奏したる人法一體の英雄、加藤清正血食の廟あるが故たるや明かである。

抑も同寺は、天正十一年(李朝宣祖十六年)、清正が、關白豊臣秀吉の下に、主計頭たりし時、亡父彈正清忠の冥福を祈らん爲に、大阪に創立せしものであるが、其の後、肥後の領主と爲るや、同十九年、之を熊本城内なる三寶



院(天台)の舊址に移し、京都妙傳寺十二世日眞上人を請じて以て開山第一世と爲したのであつた。

日眞、字は慧性、發星院と號した。幼より甲州身延山の久遠寺に入り、日乾上人(號寂照院)に従つて得度し、宗義の造詣極めて深く、年壯にして氣鋭、其の博淵の學、剛毅の行は、英雄清正をして大に心を傾けしめた。文祿元年壬辰(宣祖二十五年)、清正朝鮮の軍旅に赴くや、日眞は多くの僧侶を率ゐて之に従つた。清正が到る處の戰場に翻へしたる「南無妙法蓮華經」の旗は、此等勇敢なる僧侶の護持したるものであつた。殊に日眞の事に關しては、文祿・應長兩役の和戰兩方面に最も努力したる朝鮮側の傑僧、松雲大師(名は惟政)が、清正の陣營に出入せし際の日記(題して『奮忠持難錄』と曰ふ、松雲の法孫、南鵬の編したるもの)に、其の當時の實狀を書いてあるのは、深く興味を感ぜらるゝ。是に由つて觀るも、日眞が清正の帷幕に在つて、單に記室の任のみではなく、重大なる畫策に參したる事は推測に難しとせない。

又自日本來倭僧二名。着白絹長衫。又着金襴袈裟。儼然出坐廳中。一僧名本妙寺住持日眞。粗知書畫。故

問答事、專委此等僧書之云々。(甲午四月入清正營中探情記)

明十六日早飯。喜八及倭僧日眞。持酒與肴。率鳥銃軍五十餘名。護還于公須串前樹陰下。設餞題詩。共爲和答。懇懃慰禮。以期後會而送云々。(前同記)

十二日朝後。日本僧日眞・在田・天祐等三僧。來見我等列坐。皆以沈行和議成不成。及我國不和等事。

隨問隨答云々。(甲午七月再入清正陣中探情記)

清正與倭日眞等三人對話。引我等列坐云々。(前同記)

松雲の日記に此の如く書いてあるが、彼れが日眞に重きを置きし事は、今尙ほ本妙寺に藏する彼れの書簡に據りても證せらるゝ。又後年、彼れは孫文或と共に日本に使したが、其の時の如きは、日眞も亦に彼れを大に優遇し、清正の廟に「淨池院」、本妙寺の山門に「發星山」の額を書かして掲げた程である。

朝鮮役終り、次て關原の戰も平定に歸するや、清正は近衛關白信尹の執奏を経て日眞多年の忠誠を聖聽に達した。信尹は清正が戰場に翻へしたる「南無妙法蓮華經」の旗の筆者であつて、因縁淺からざる人である。後陽成天皇大に日眞の功を嘉せられ、慶長十年、本妙寺を以て國家安全の勅願所と爲すの論旨を下され、同十一年、更に日眞を權大僧都法印に叙し、且つ紫衣を賜はりて永代住職の著用を許された。次で京都本國寺の日桓上人は、本妙寺に命じて、九州に於ける一派の長と爲すに至つた。斯く同寺の基礎を固め資格を重もからしめたる日眞は、越えて十三年、後を二世日繞(號妙雲院)に譲り、熊本高麗門外の妙永寺(清正其母の冥福の爲、日眞を開基として建てたるもの)に退隱し、更に熊本に本覺寺・川尻に法宣寺・水俣に法華寺等を創立して教化の擴張に努め、寛永三年四月遷化した、享年六十九歳である。二世日繞は任に在ること三年に滿たずして、慶長十四年八月入寂した。其の後を繼ぎ第三世の祖と爲つたのは、是れぞ乃ち日遙上人にして俗に稱する高麗上人である。夫れ國としても、亦家としても其の三代の君たり主たる者の明暗に由つて、盛衰の氣運相定まるとは、古より謂ふ所であるが、本妙寺の如きも實に此の第三世日遙上人の智あり學あり才ありて、經營宜しきを得たるが爲、永遠に隆盛を致すことなつた。

日遙上人、姓は余、幼名は大男、後ち學淵又好仁と改め、本行院と號した。朝鮮慶尙道河東の人である。宣



祖十四年辛巳(天正九年)を以て生れ、父を壽禧(初名天甲)と云つた。同二十六年癸巳(文祿二年)七月、即ち晋州城陥落の翌月、慘澹たる戦後の天地に、親故の踪跡を失ひ、孤影悄悄路頭に迷へるを、加藤軍の高橋某に扶けられ、其の本營に至りしに、主將清正先づ問ふに、姓名を以てした、彼れ黙して答へず、直ちに觚を操りて「遠上寒山石徑斜。白雲生處有人家」の古句を書きたるが、清正之を見て其の筆勢の潑刺たるに驚き、資性の明敏なるを察し、且孤となれるを愍みて、遂に留めて座側に置き、衣食を給して愛撫した。時に其齡十三歳である。〔肥後國志〕とせるは、〔肥後國志〕に八歳、〔清正記〕に九歳、又〔本化別頭佛祖傳〕等には十歳とせるは、いづれも誤謬である、そは後文に於て之を證明する。

文祿二年六月の晋州攻撃は、朝鮮役中、最も猛烈なるものであつた。是れ畢竟、其の以前、毛利秀元・細川忠興等の七將が、此の城を包圍し却つて慘敗を招きしを、秀吉聞きて大に怒り、更に清正等に復讐すべき嚴命を下した。之に奮激したる彼等は自然必死の勢を以て陥落に努めたものと想はるゝ。柳成龍の『懲愆錄』に「自倭變以來。人死未有如此戰之甚者」と書いてある如く、此の戰以來、朝鮮側の士氣は大に沮喪した。

當時晋州は、陝川・草溪・咸陽・昆陽の四郡と、泗川・南海・三嘉・宜寧・河東・山陰・安陰・丹城・居昌の九縣とを管する重鎮であつた。其陥落の報傳はるや、四方の人民は恐怖狼狽、親子老若相助くる違なくして離散した。恐らく余大男の如き迷兒も亦た多かつたに相違ない。然るに彼れ只一人、慈悲心深き清正の愛護を受くるに至つたのは實に不幸中の幸で、佛氏の所謂因縁であらう。

彼れは、清正の陣中に在る數月に亘つたが、戰雲益々八道に瀰漫して、干戈歛まるべくもあらず、従つて父母の生死を知るに由なく、深く因果の理を悟つた。是に於て清正大に同情し、先づ彼れを熊本に送り、更に日

眞の師にして當時京都六條講院に在りし日乾上人に托し、髪を剃りて僧とならしめた。彼れは既に父母を亡き者と諦らめ、其の菩提を弔はんとの發心より、身を佛に委ね、蚤く和語を曉り、教義の質問怠らず、且つ品行最も嚴正なりしを以て、日乾頗る感嘆し、之を器として更に佛法の蘊奧を究めしむべく、甲州の久遠寺(身延山)及び總州の法輪寺(飯高檀林)に徒とならしめた。彼れ修養十有餘年、天賦の玉質は研磨を経て益々光輝を發し、學識智徳、衆の推す所となつた。清正甚だ之を喜び、乃ち本妙寺二世日繞上人の遷化に際し、熊本に召還して其の三世たらしめた。朝鮮役以來、陰に陽に彼れを庇護したる同寺一世日眞上人は、尙ほ隱栖して熊本に在つた、其の歡びも亦た知るべきである。日遙時に二十九歳。斯る壯齡にして、且つ異域の人にして、九州に雄視する一派の長となり、身に天賜の紫衣を纏ふ、寔に盛譽と言はざるを得ない。

然るに一喜あれば又一憂あり、人世の哀樂は豫め期し難い。慶長十四年、日遙、愈々本妙寺三世となり、是れより將に清正の恩愛に報ゆる所あらんと思ひしに、越えて十六年清正偶ま疾に罹り、其の六月二十四日遂に薨去した、日遙の落膽は想像に餘りある。

清正遺言に、我死せば、具足を着させ、太刀かたなをはかせ、棺に入納すべし。末世の軍神たらんとの殘詞なれば、任其儀、中尾山といふに送葬し、京都より本國寺日桓上人を招請し、淨池院殿日乘大居士と戒名なしまいらせ、及葬送。清正廟所、中尾本妙寺と號し、永代迄、代々の勅願所なり。本妙寺上人は、清正、百濟國守の子、九歳に成しを日本につれこし、出家させ、日遙上人と改め、住持職となされける

〔清正記〕△は事實の相違を標した



日遙が、清正を哀慕したることは、如何に痛切なるものであつたかは『續撰清正記』に委しく書いてある。

本妙寺法談の事 玄冬廿四日に、本妙寺において、千部の法華經讀誦の結願に、住持日遙上人の法談の時、家來の者残らず聽聞しけるに、上人御出有て高座に登りたまひ、法華經方便品を訓讀有て、法談は仕給はずして先宣ふは何れも御存知の事なれども、野僧は元高麗國の者なるを、八歳のとき文祿年中の亂により、父母のゆくへをしらず、孤となり途に迷ひ居たりしを、高橋三左衛門と云ふ者にとらはれし故、定而生害にあふべきと、をさな心におもひける所に一命を助り、剩さへ清正の御介抱にて人となり、本朝へ召連玉ひしに、文字の平仄をば辨せずといへども、一連の句を漫に綴る眞似をしければ、此童子をば出家になし、御父母の菩提とはせ給ふべきと仰有つて、甲州身延山へつかはされたる故、關東を行脚して大善知識の法苑の端に陪、高祖日蓮大菩薩の流をくみ、忝も余瀾の伽梨を身にまとひ、今此高座に上る事、偏に日乘大居士(清正)の厚恩也、誠以切利より高く蒼海より深し、端的何をもつてか此恩を報せん、嗚呼哀哉、朝に紅顔有て世路に誇れども、暮には白骨となりて郊原に朽ぬと云事、今更驚くべきにあらねども、大明百萬の軍兵を蔚山においてきり退け、武名を朝鮮國に残し、此國柳瀨表において一番鎧を合、加之、天草にて兩城を責崩、宇土柳川の城を無爲に落し、名を日域に振ひ玉ふ武將たりといへども、無常の敵の來るをば防ぐに其兵なきか、容花即蕩シボて墳際一掬の塵と成り、命葉忽落ちて暮天數片の煙と立上り給ふ事、惜に猶餘りあり、啼涙するに忍びがたし、上古在原の中將の、昨日けふとはおもはざりしをと詠じ玉ひし言の葉の末迄も、おもひ出られたると宣ひ、上人落涙し玉ふを見て、滿座の聽衆一度に噎と泣て、はら／＼と座敷を立、寺外に出ければ、上人も高座よりおりて、す／＼と内陣に入給ひ畢。(△は事實の相違を標す)

日遙。清正を中尾山に埋葬の後、草庵を其の側に結び、相仕ふる宛も生前の如く爲し居たるに、本妙寺は偶ま回祿の災に罹つた。是に於て日遙は之を再び城内に築かんよりは、寧ろ清正の靈廟近くに移轉して、永世香華の役に便にするに如かずと思ひ、清正の嗣たる忠廣の許可を得て、乃ち中尾山麓の廣大なる境域を開拓し、三年の工事を續け、元和二年遂に莊嚴なる梵王城を成就した。是れ現在の本妙寺で、日遙の同寺中興の祖として仰がる、所以である。(明治十年西南の役起るや、本妙寺は熊本城と對峙するを以て、薩軍の據るを不利益とし、鎮臺司令官谷金崎僧正の努力に由つて、廟宇殿堂の復舊工事進捗し、更に高さ一百尺なる清正の大銅像の建設さへ企圖せらるゝに至つた)

爾來光陰勿々過ぎ去つて、世態人事炎涼と共に幾たびか變更した。然るに時は元和六年庚申(光海君十二年)、庭梧葉半ば落ちて、山茶花將に開かんとする初冬であるが、國を出でてより二十八年、生死知るに由なく、夢寐忘れ得ざりし故國の實父より、圖らずも一封の書信を寄せ來つたのである、日遙の胸中萬感一時に沸湧し、驚躍將に身を絶せんとした。彼れが返書に「緘を開き讀まんと欲して感涙先づ零つ」と云へるは、眞に其の間の赤心である。

九州肥後國熊本本妙寺學淵日遙聖人。朝鮮國河東父余天甲傳送子余大男

汝在癸巳年七月雙溪洞普賢庵族僧燈邃處被擄後。未知汝之生死。與汝母日夜號泣矣。去丁未年。我國通信使入日本國時。我河東官人。路逢汝。而問汝姓名。則汝答曰吾姓名余大男。父名余天甲云々。其人還歸傳我。始知汝生存日本京中五山内云。汝母與我悲痛相泣曰。他人逃還朝鮮者相繼出來。而吾子大男不出來必



是不知父母生存故也。常欲通書於汝。面無便可達。往年秋汝友人河終男。始還於朝鮮言於我曰。余大男被擄日本爲僧曾在日本京中。而下居九剎肥後國熊本法華寺內本妙寺。稱名本行院日遙上人云。或稱金法寺學淵云々。聞汝存在消息歡喜踴躍。而却恨汝忘父母生育之恩。安居異地久不出來也。汝自足衣食於日本而不還耶。爲僧逸居海外而不還耶。汝審思之。我年方五十八。汝母年亦六十矣。雖經兵火家業稍實。奴婢亦多。人皆羨我富居。而只短我失子也。汝年今方四十。且識學習云。可知愛父母之常情。而歸見老父母生存之日則不亦孝乎不亦幸乎。相逢父母好居鄉國不亦榮乎。使喚奴婢安享世業不亦樂乎。況我及汝母年既衰老。汝熟思之々々。急告汝主鎮大將軍前。且道汝大師前。力陳思歸之情。乘舟浮海無事生還。復見天日父子一處。相逢共享餘年。則其樂爲如何哉。庚申五月初七日父余天甲則兒名。而官名則余壽禧。

展讀し來り誰か心を動かさざる者があらうか。況して夙に亡き者と諦めたりし父の書信を數百里外の異域に得たる實子日遙としても一段感慨が深かつたであらう。書中、「去丁未年。我國通信使入日本國時」とは、慶長十二年(宣祖四十年)の呂祐吉・慶暹・丁汝寬等の一行を云うたもので、文祿役後、徳川時代と爲り、平和復舊最初の通信使である。日遙の居りしは五山(五山とは南禪寺、天龍寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺を云ひ、相國寺を其上に置いた)ではないが、高麗時代から、京都の巨刹とし云へば、五山の名を以て朝鮮に知られてゐた、故に「始知汝生存日本京中五山内」と云うたものと思ふ。斯く此の一行に依つて、生死不明の實子余大男の日本に在るを知り、更に其後、河終男なる者が歸郷して、熊本本妙寺に名を本行院日遙上人と稱し居ると語るを聞きては、歡喜踴躍すると同時に、子を思ふは親心、殊に老の身として一刻も猶豫し難く、乃ち此の書を裁したものである。其の「急告汝主鎮大將軍前。且道

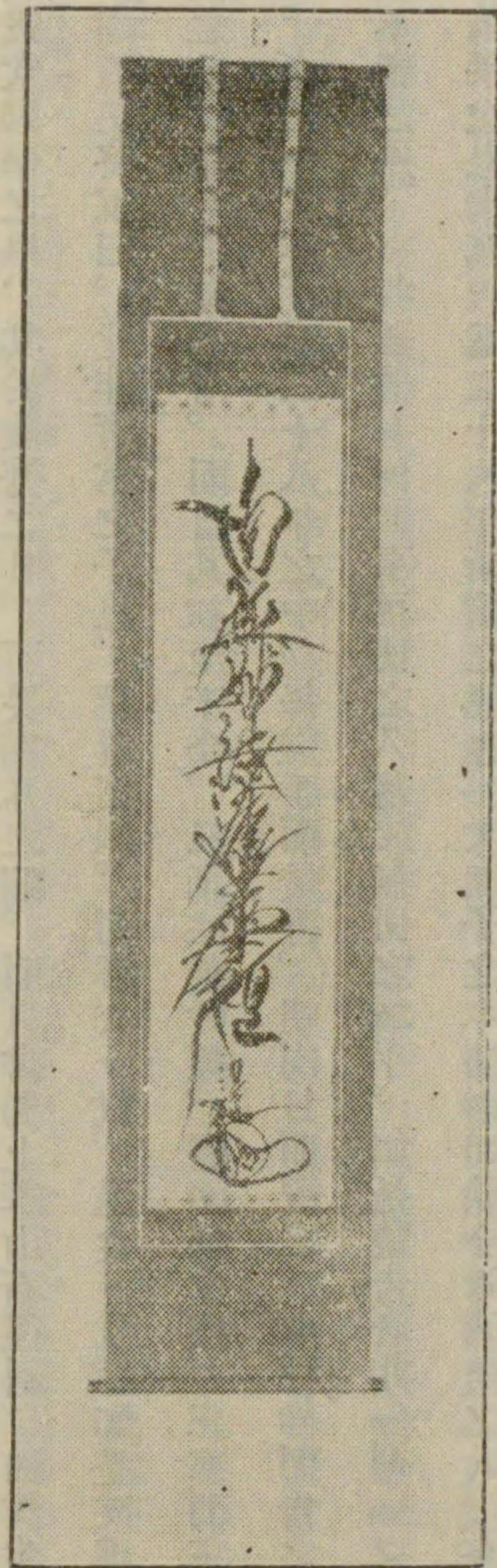
汝大師前。力陳思歸之情」と云へるが如き、歸を待つ切なる情は紙上に横溢してゐる。日遙の返書(尤も此れはる、前の余壽禧の書翰とよみに)は次の如くであつた。  
今本妙寺に寶物とされてある。

父母主前百拜上答書。朝鮮國慶尙道河東余壽禧氏宅傳上事。迷子好仁謹封

千萬意外伏受親滋手書、憑審父母主兩體依舊免恙迄今平保。年未衰老。琴調瑟和之音開緘欲讀感淚先零。此乃天之所眷耶。抑亦神之所助乎。渺不知其所由。惟不勝祝委感賀之至。迷子好仁特蒙家世積善之餘慶。更賴嚴堂勸學之早、其於被擄之日。不畏霜刃之翻。而只書獨上寒山石徑斜。白雲生處有人家之二句而上之。則清正將軍曰。此非庸常之子也。招置席側。而解衣々我。退食々我。如是愛護數月之後。先送于此國肥後之地。命令削髮爲僧。而自其初至于今。只誦法華妙經。歷朝過夕艱。忘寒而忘飢而已矣。而自初被擄之日。今二十八年。而二十八年之中。每盥手而焚香。朝向日而祝之。夕拜佛而告之曰。吾家祖宗之代。別無積不善之殃。哀我孤僧有何非辜而使之久落於無何之域乎。如是號告者非一朝一夕。而今受千々望外之書。則子之私情竊以爲二十八年祈禱之應也。大抵子之本情則切欲今附傳信之人。奔走往拜于兩堂之下。如意布告積年之鬱陶之懷。而其於當日之夕。雖委命而不悔矣。最可恨者別無他故。子乃迄今食主之食。衣主之衣者。故如此嚴刑之國。夫何能以其心爲心乎。伏乞嚴慈氏少寬兩胸于四五年之間何如。子之内意徐將下書呼泣哀陳于國將及州守之前。誠以二三年爲限而哀請之。則彼皆父母之子也。而無回情激感之理乎。若於早晚天道好環。更得歸國之慶。則兩體無子而有子。迷子亦失親而得親矣。大概吉凶榮辱俱待乎天道不亦幸乎。自今以後子奉下書常爲晨昏之具也。伏願父母主亦以此子書。擬作弄雛之玩幸甚千萬。但於下書曰。汝



忘父母生育之恩。安居異地亦自足食衣而久不出來云々。則所垂之語子可甘受矣。少有發明之冤。若於太平之時。子獨逃身離親棄友而潛入無窮之域。則子之不孝無雙之罪。必溢於三千五刑之外矣。當年之禍口不可道。而大王之子被擒。縉紳之女見辱。則子來他邦爲以榮乎。以爲願乎。伏乞俯察不得已之冤。而勿播忘恩之咎於鄉黨幸甚千萬。且煩祖父得麟氏之安否及族師遠方丈之生死何不細示乎。不勝夢想魂思之至。且於通子之奇河東官屬及友人河終男氏兩人前。懇傳感謝之情。企仰々々。情雖無窮。只拘行事之忙艱。舉大綱而



日遙上人筆蹟  
肥前島原護國寺所藏

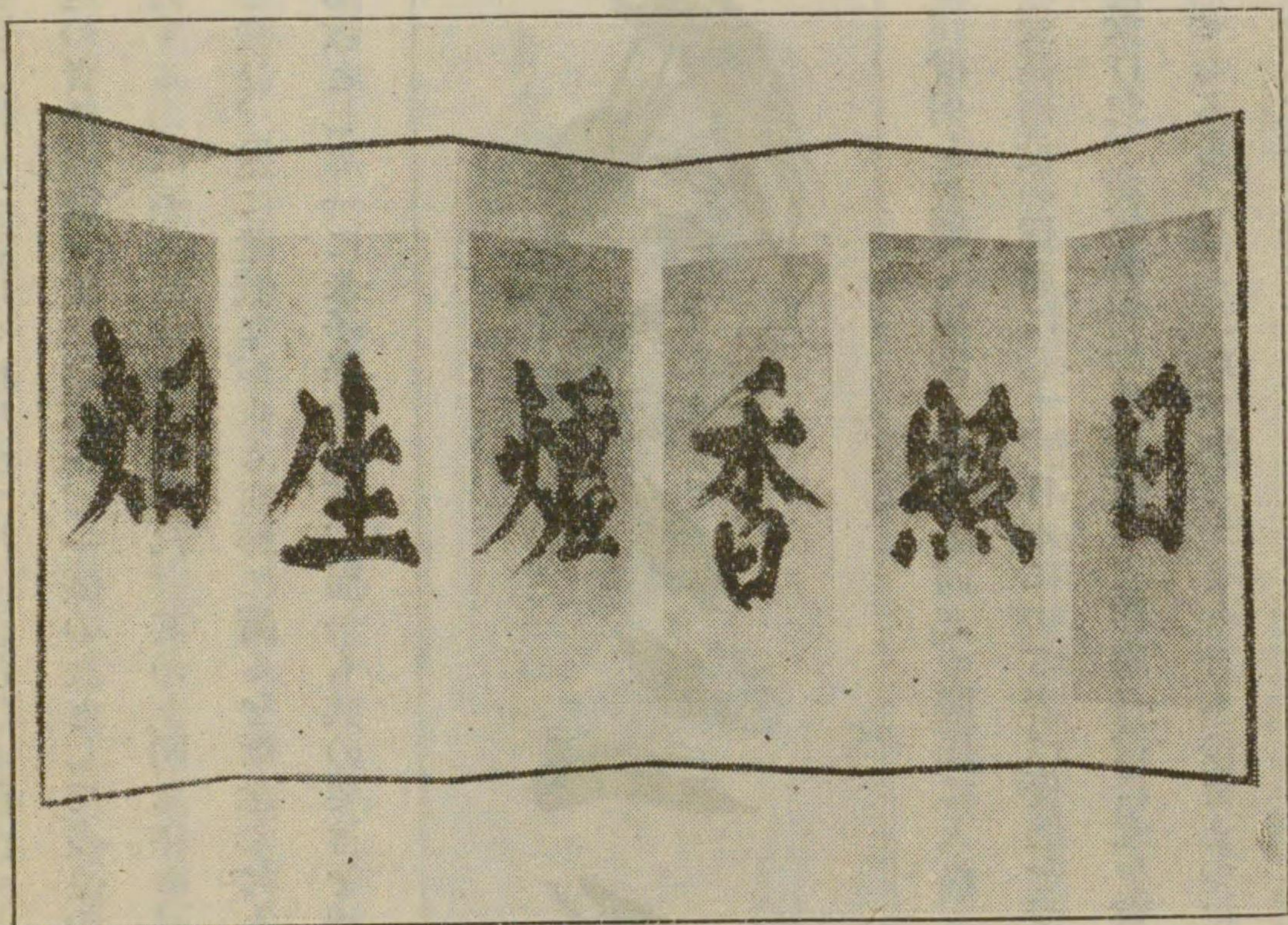
不具小目。伏惟尊鑑向教是事。頓首百拜

庚申十月初三日

迷子余好仁在日本國熊本本妙寺單上

追白。下書則九月盡日傳受矣。且於此國無知心之友。只與居昌李希尹・晋州鄭述・密陽下斯循・山陰洪雲海・扶安金汝英・光陽李莖等五六人。朝夕談話故國之事而已矣。且恐重思迷子。則此國珍重朝鮮之鷹。若有來使則須送好鷹二坐。而對馬島主及肥後太守前。各上贈物以賭迷子幸甚々々。

讀み去り誦じ來れば、一字一涙せざるを得ない。其の往きて兩堂の下に拜し、積年鬱陶の情を布告せば、當日の夕に於て命を委つると雖、悔えざるなりと歸心の切なるを述べ、又、子の乃ち今に迄れるは、主の食を食とし、主の衣を衣とすと云ひて、二十八年の久しき恩誼もあれば、父の命なればとて直ちに歸られず、徐々に嘆願すべければ、四五年の間、胸を寛うして待たれよと云ふ處、人をして最も悲哀を感せしむる。而



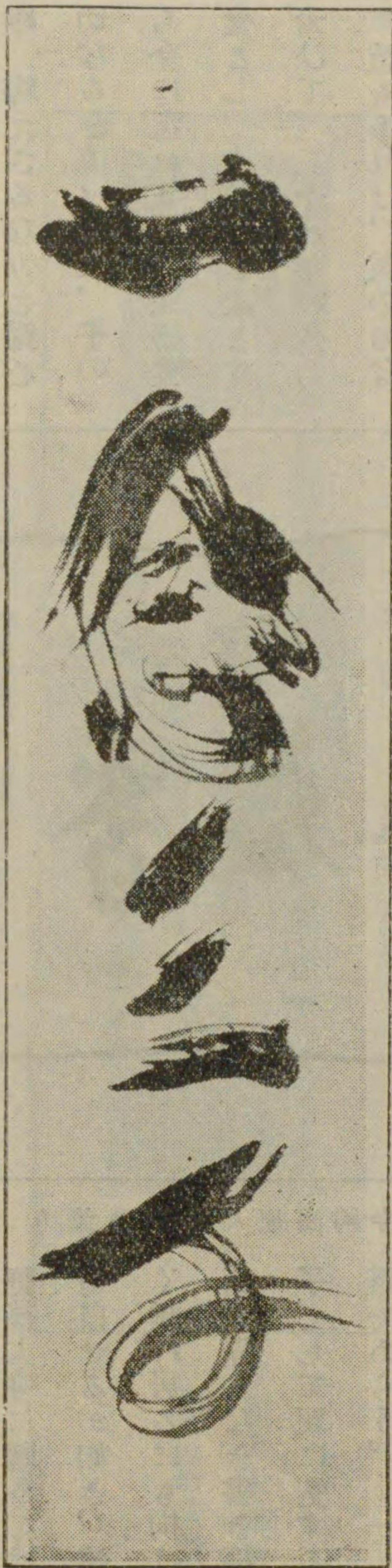
(日遙上人筆蹟肥前島原護國寺所藏)

して折角書簡を賜はりたるに、何故に、祖父得麟氏の安否と、師なる遠方丈の生死とを知らせられざるかと云ひ、又、鷹を對馬島主と肥後太守に贈りては如何と追白せるが如き、遠く久しく離れ居るにも拘はらず、斯る隔意なき書き振りは、子として親に對する情の發露であらう。

日遙は歸を思ふ事甚だ切なるものであつたが、如何せん去るに忍びざる加藤家の恩誼あり、殊に當主忠廣の代となりては、徳川氏の



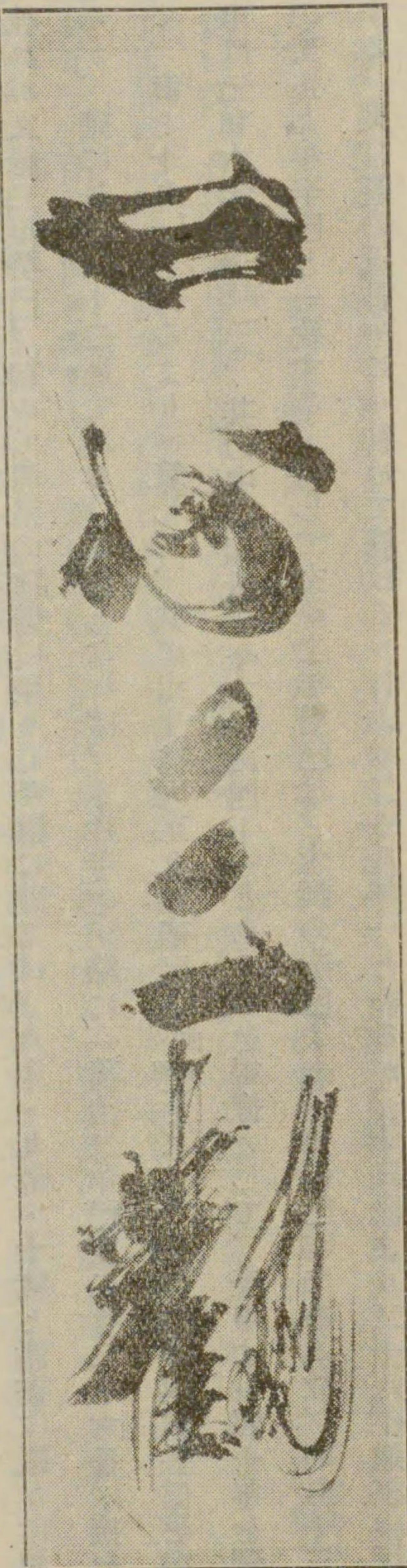
關涉極めて厳しく、日遙の哀願は輒すく容れられなかつた。己むなく荏苒歲月を送る裡に、師とし仰げる日眞は寛永三年に遷化して、日遙の責任は益々重きを加へ、一派の長として多くの寺院と徒弟とを董管する名譽の地位は、到底私事を以て引退するのは不可能なるに至つた。其の上同九年には、領主忠廣、幕府に罪を得て除封せられ、全く頼むべき人を失ひ、遂に遺憾ながらも朝鮮に歸るを斷念したものと想はるる。尤も一方朝鮮を見れば、徳教として一に朱子學を尙び、而かも其の要旨を誤りて、徒に儀禮にのみ傾きたる



(日熊 遙本 上人 妙筆 蹟藏)

結果、全く佛教を度外視して、僧侶を奴婢・倡優・白丁と同じく賤民に入れ、社會階級の最劣等者としてあつた。しかのみならず、文祿・慶長兩役の俘虜にして、日本に居る者は優遇を受けたるに反し、歸國したる者は、極めて冷淡苛酷の處置を受けた。彼の數回の通信使が、俘虜召還に意を盡したるに關はらず、歸を望む者の尠なかりし事に由つても證せらるる。日遙は敢て斯る考より日本に留まつたのではあるまいが、彼の當時好んで日本に歸化した者の多かりしを茲に述べて置く。

其の後、日遙は寺を四世日選(號本 住院)に譲り、妙光山蓮政寺(現に熊本市手取本丁に在り、古來本妙 寺の三役寺と稱せらるゝ隨一である)に退き、慶安四年には肥前島原に護國寺(號長 久山)を建て其の開山一世と爲つた。同寺は震災と火災に罹り、其の舊觀を失つたが、再三改築せられて法燈永く繼續し、日遙の筆に成る題目の一軸と六曲屏風とは、今に靈寶とされて在る。是より先き慶長六年、同じく日眞の法弟なる日榮(常林院と號す、本妙寺九世 の日榮上人とは別である)は、豊後鶴崎に法心寺(號雲 鶴山)を創建した。由來鶴崎地方は大友宗麟が耶蘇教を弘めた處であり、島原も亦た耶蘇教最も盛んに行はれ、遂には其の宗徒の暴



(日熊 遙本 上人 妙筆 蹟藏)

亂さへ起つた地方である。斯る處に新たに寺院を開基したのは、言ふまでもなく破邪顯正の重鎮を築きしに外ならぬ。而して日榮は日眞に隨行したる朝鮮從軍僧の一人であつた。清正乃ち其の戦時の功に酬いんが爲に、法心寺を建て、開祖としたのである。故に同寺には清正に縁ある多くの什寶保存され、又手植の樹木もある。之を要するに、九州の中・肥後・豊後の二國及び肥前の大村・島原・長崎地方の日蓮宗は、日眞の系統にて宣布され、それより四國・中國にまで傳播した。畢竟清正の徳望が、直接間接に偉大なる影響を及ぼしたものと



言ふも誇張でない。

日遙が島原に護國寺を建てたる翌年即ち承應元年に四世日選は遷化した是に於て日遙は、五世日悠(號一圓院)を立て、其の後見と爲つた。斯の如くにして彼れは、本妙寺に獻身的の努力を以て始終すること五十一年、上長の寵用と門弟の愛慕と、道俗の隨喜渴仰とを受けつゝ、萬治二年己亥(孝宗十年)二月十六日、遂に疾を感じて遷化し、清

正廟に近き四無礙谷と稱する本妙寺歴代の塋域に葬られた。享年七十九、墓碣は依然として今尚ほ存してゐる。彼れが文祿二年癸巳、初めて清正の陣營に至りし年齢に就ては、八歳・九歳・十歳と諸書に區々に記されてあるが、確に是れは十三歳である。如何となれば、本妙寺の記録に「萬治二年己亥二月二十六日、疾を感じて化す、壽七十九」とあるより逆算して、其の出生は天正九年辛巳(宣祖十四年)となる。父の余壽禧が書信を寄せたる庚申は元和六年(光海君十二年)で、其の中に「汝年今方きに四十」とあるのを根據として、庚申より四十年を溯れば、前の天正九年辛巳と一致する。而して文祿二年癸巳は、生誕の辛巳より一周の巳年である故、即ち十三歳に相化する。又日遙の返書中に「初めて携はるゝ日より二十八年」とあるが、十三歳より二十八年過ぎたとすれ當、正に父の書信の四十と吻合する。此等に由つて其の十三歳なりしを明確に證することが出来る、従つて是迄諸書に傳へられたる年齢は全然誤謬とせねばならぬ。

又彼れは清正に遇ひたる初め、其の能書を愛でられしと云ふ如く、後年筆法益々妙境に入り、奇古遒勁、自ら一家をして、世に珍重せらるゝに至つた、『世事百談』(山崎美成著)に次のやうに書いてあるのが一例である。

肥後本妙寺第三代日遙上人といふは、もと朝鮮國の人なり。文祿二年豊太閣朝鮮征伐の時、加藤總大將と

して彼地を攻めなびけ、凱旋のときにあたりて、雙溪洞の普賢庵にて、ひとりの小兒の居たるを見て、名を問はせたまふに、何ともそのいらへはせで、やがて筆をとりて「遠上寒山石徑斜。白雲生處有人家」とかきたるのみ、その時、兒の年十歳なり、清正これを見て奇兒なりとおもひ、わが邦につれかへれり、生長の後天資伶俐にして書をも見事にかき、佛門に入り、名を日遙といへり、これ即本妙寺の三代なり、清正の歿後も懇に香花の手向おこたらざりしといへり、本化別頭佛祖傳に見えたり、これ亦清正の日蓮宗を信ずることのあつきに出づる所といふべし、先年淺草幸龍寺にて京師妙滿寺の開帳ありしが、その靈寶いと多かりし中に、日遙が眞蹟の題目あり、草體尋常ならず、友人南野摹刻して同好に贈れり(△は事實の相違を標す)

更に又、日遙が清正を哀慕したる美談として稱揚すべく、且つ其の書に於て練達なりしを緬想せらるゝは、清正生前自ら佛工を指揮して己れの肖像を作らせたが、薨去の翌年、彼れは『法華經』八卷、二十八品、字數六萬九千三百八十四を淨寫して、其の靈像の胎内に納めし事である。殊に此の寫經が唯一の證據となりて、今より八年前、實に不可思議とも云べき發見ありしは、奇しき尊き事實であつて、清正と日遙とが、三百三十餘年來、其の夤縁を繼續するのみならず、更に未來永劫斷絶せざるを思はざるを得ない。此の事實に關しては、本妙寺現住金崎僧正の筆に成れる『清正公最初靈像出現緣起』に詳なる故、左に之を掲ぐる。

嘗て當山大方丈に安置し奉りし清正靈像は、當初公の御存命中、慶長十四年、熊本縣上益城郡坂本村播磨慶山と云へる佛工に命せられ、其彫刻に要する鋸刀の類は、熊本城外本山村國次又次郎と稱する鍛冶職に仰せ付けられしと云ことは、享保二年七月、慶山四代の後裔慶傳と申すもの、藩主の命に依りて差出せし家傳の



覺書に依りて明なり。慶長十六年六月二十四日、公の薨去し給へるや、慶長十七年壬子閏十月二十四日、當山第三祖本行院日遙上人、法華經全部を書寫して公の追善菩提の爲に、靈像の胎内に納め奉り、天明六年八月、當山第二十祖一妙院日導上人、胎内の寫經蠹害を見て之を修補し、毎年六月大祭の日蟲干をなすの掟を定められ、同二十一祖不染院日亮上人、京都の佛師林如水に命じて靈像の破損を修補し奉りしことは、當山傳來の過去帳及記録に明記しあり。されば此靈像は清正公最初の彫刻にして由緒正しく傳來確かなるものなるや一點疑ふの餘地なし矣。降て明治四年排佛毀釋の風潮盛なりし頃政府神佛混淆を禁止せし時、不幸靈像も亦た災厄に遭ひ、爾來今日に臻る迄、其所在不明に屬せしを甚だ遺憾となし居たりき。

曩是、明治四年八月九日、熊本市新坪井八百屋井龜田小次郎、官没せる公の靈像一軀を乞ひ得て自宅に鎮守し奉りしに、明治十年の兵燹に罹り、獨靈像は不思議の縁に由りて無事なりしも、鎮守當焼失して安置するに所なく、同年九月二日、一時菩提寺たる山内智運院に預け奉り、後に當山に奉納せしと云ふ。然れども單に傳へて當年官没せし靈像中の一軀なりと云ひ、又公の靈像にあらずして忠廣公の尊像なりとも云ふ傳説區々にして、當山に於ては餘りに重きを措かず、由來永運閣の一隅に祭祀し來りしに過ぎず、明治四十四年永運閣増築に際し、假本堂に遷座し奉りて今日に及びしものなり。大正七年一月偶々長崎縣西彼杵郡瀬川村實相寺住職梶原辨曉、信徒の爲に祠堂を建立し、清正公の分靈を當山に懇請せしに依り之を許可し、同時に寄附者龜田氏の承認を経て、贈るに此古像を以てせむことを約したり。然れども歲月の久しき五彩殆んど褪色して拜するに由なきを以て、當山達用達佛師松原象雲に命じて色彩を施し之を修補し奉ら

しむ。象雲一日齋戒沐浴して事に茲に従はむとして胎内に藏經あるを知り、其奥書を見るに及んで尋常一様の靈像にあらざるを確め、且つ驚き且つ喜むで當山に告ぐ、仍て嚴密に記録に徴し緣由を精査し奉りしに、是れぞ全く當年最初の彫刻にして、由來大方丈に奉安し、明治四年官没の厄難以來其所在不明に屬せし當山唯一の靈像たるに相違なきを發見し奉るに至る、蓋し一山の吉瑞之れに過ぎたるはなし矣。

乃ち慶長十四年、甫めて靈像の製作を命じ給ひしより、今茲に大正七年に及むで星霜實に三百十年、公の薨去し給ひしより三百八年、明治四年官没の災厄より、前後四十八年間に及むで此事あり、惟ふに皆是公の隱顯出沒の靈徳の然らしむるべく、今日之を發見し奉りしと謂はむより、寧ろ出現し給ひしを信せんと欲す。然れども神慮は不可思議にして猥りに凡俗の料知すべき限りにあらず、只仰で之を信じ之を喜び奉るのみ矣。

依て此由を大村實相寺に報じ、贈るに他の御像を以てすること、なし、而して此の靈像は、二月十一日紀元節の吉辰を下して、更に開眼式を奉修し、改めて當山に安置し奉る事となれり。時恰も公の銅像建設及當山伽藍全部復古改築の事業中に屬すれば、他日建築成るの日、更に改めて大方丈に遷座し奉り以て古式に復せんとなす。謹で事實の緣由を記し以て日遙上人の寫經と與に、靈像の胎内に納め奉る焉。

維時大正七年如月七日

當山再住三十四世

僧正 一本院日柱欽撰

斯る不可思議なる發見であつたので、當時熊本の「九州日日新聞」は、其の顛末と日遙上人の略歴とを掲載した。之を讀み大に興趣を起し、彼れの故郷と傳へらるゝ慶尙南道河東に就て、調査を試みんとしたるは、肥後



の人、大村大代氏(當時釜山地方法院檢事正、一昨年卒す)であつた。氏恰も同地方に出張せるを好機とし、搜索の結果遂に余大男、即ち日遙上人の遠縁に係る人々に會見し、其の家譜を閲し、且つ日遙が父に贈れる書翰二通(内一通は本妙寺に現存する草案の淨書)と、父壽禧が日遙に與へた書翰(本妙寺に現存するもの)の草案、及び親戚余弘禮が同じく寄せたる詩稿の保藏しあるを覽て、略ぼ其の志望を達し得たるを欣んだ。指を屈すれば既に三百餘年の昔、雲濤遠く隔りたる異域の間に、贈答したる書翰と其の草案とが、相互に今尙ほ遺れるは、實に珍しき事である。是れ畢竟、彼の靈像の不可思議なる發見が因をなし、更に此の不可思議なる書類が發見されたのである。大村氏は當時書類の謄本を本妙寺に寄贈した。同寺としては圖らずも其の歴史に、貴重なる數頁を加へた次第である。

予は去る七月、本妙寺に詣でて、日遙上人の墓を弔ひ、且つ同寺金崎僧正に會ふて上人の事蹟を聽くを得た。其の際大村氏の談に及ばれたるを以て、歸鮮後、河東郡衙の片倉氏に書を寄せ、上人に關する資料蒐集を依頼した。然し結局、大村氏が曾て覽られたると同じ書類の外、考證に供すべきもの無しとて、其の謄本を送られたのであつた。

祖諱得麟 配光陽仇氏・昌原黃氏 墓河東西良池波洞

父諱壽禧 幼名天甲 配平康蔡氏・文化柳氏 墓河東西良谷上名石窟良座

弟璨 九世孫聖觀 居河東郡花開面琴頭川 弟璟 九世孫定奎 居河東郡河東面花心里 本孫多居

花心里

右は余氏の家譜より、日遙に關する部分を抄略したものである。日遙は年少より日本に往きて歸らなかつ

た、且つ當時禁姪斷肉の制度最も嚴なる日蓮宗の僧たりし故に、内鮮何づれの地にも後裔の在るべき筈の無いことは勿論である。然るに其の弟なる璨と璟との血統は、斯くも連綿として續いて居り、中には河東地方に知られたる名望家もあり、亦た素封家もありとの事である。

元來、朝鮮に於て「余」といふ姓は極めて尠ない。又他の姓の如うに、全州李氏・慶州李氏・延安李氏・全義李氏などと多くの冠稱あるのと違ひ、單に宜寧余氏のみで『萬姓始祖編』に「宜寧余氏。始祖英侯。本先秦由余後。宋諫官余善才。東來。食邑宜寧。仍爲籍。十世孫興烈朔州府使」とあるに過ぎぬ。且又、其の氏族は南鮮晋州地方に偏在する故か、朝鮮の人にて余姓あるを知らぬ者さへあるに、日遙上人の如き稀世の高僧の出でたるは奇とすべきである。

河東の余氏に藏する日遙の書翰及び父壽禧の草案は、茲に載するの煩を避くるが、前に掲げし本妙寺に在るものと對照するに、本書と草案なる故に、文句に多少の相違はあり、殊に壽禧の草案は、三四年前から何遍も書き直して好便を待つた様に想はるゝ、日遙の他の一通は、壬戌冬十月初一日としてあつて、書中に、「自去夏奉答以後。長向西魂馳神騁。泣涕漣盡。想夜夢之極。又伏蒙嚴慈之副札。歡之汗不勝躡踊之至」と云ひ、「祖父主損世計。遠方丈別世之奇。聽之不勝憾愴。歎淚罔極」と云うてゐるのは、彼れが先便に「祖父得麟氏之安否。及族師邃方丈之生死何不細示乎」と質せし返答に接したものと見て見るべく、而して歸國の情願は到底許されざる意を述べてゐる。親族、余弘禮より贈つた詩は左の如くである。

龍蛇兵火學家亡。虎口餘生幾斷腸。白鴈不來愁轉苦。紫麟沈絕淚沾裳。扶桑兔上雙眸冷。若木烏低隻影



涼。待得東風滄海外。片帆高掛好還鄉。

本妙寺に在る壽禧の書信に「汝在癸巳年七月雙溪洞普賢庵族僧燈邃處被擄」とし、河東に存する草案には、「汝在癸巳七月長興寺三景樓族僧燈邃處。受學業適被擄」とあり、又日遙の草案には、「朝鮮國河東居父余大甲」とし、河東に在る書翰には、「朝鮮國慶尙道河東西良谷居父母主號余生員諱壽禧氏」とあるなど異なる點であるが、前者の寺名の相違は如何なるものか知るべき由が無い。後者の宛名を委しく書いたのは、當時送達の利便に供したものであらうが、今日としては、其の河東の何處の人なるかを知り得る證據と爲つた。

此等に就て河東の今昔を知らんが爲に、古地誌・古地圖、並に五萬分一圖(土地調査局測量)等を参照するに、河東邑は文祿役時代には、現今の古田面古河里に在つて縣監を置かれた。故に古河里は曾て古河東村と呼ばれ、尙ほ城内と稱する部名さへある。又舊史の徵すべきものは無いが、地形及地名より考ふるに、昔は今の良甫面邊を河東の首邑となした如うである。『新東國輿地勝覽』なども、此等を斟酌して讀まねば殆んど實地と一致せぬ。而して邑は其の後、牛峙・豆谷等に移され、肅宗三十年甲申(今より二百二十二年前)、更に現今の地に移して、都護府を置き、後世又改めて郡守の治所と爲すに至つた。

日遙の書翰に、父の居を河東西良谷としてあるが、西良谷とは今の良甫面の朴達里を中心に、周圍の桶井里・知禮里・雲岩里とを總括したる面名であつた。余壽禧は即ち此地に居つた。日遙上人の舊里たること勿論である。近年面制施行の際、外横甫面を合併されて良甫面と改まり、西良谷なる公稱は自然消滅するに至つた。現に良甫面内には「余」と云ふ姓がある。而して日遙の遠縁に係る多くの宗族が、今日蟾津江岸の河東面や花開

面に住んで居るのは、西良谷地方より移轉したのは勿論である。

父の書信に、戰亂當時、日遙の居處を雙溪洞普賢庵(一書には長興寺三景樓)としてあるが、『東國輿地勝覽』に「雙溪寺在蟹帖」、蟹帖在縣西十七里」と書き、又『梵宇攷』に「雙溪寺在蟹帖今廢」と書き、五萬分一圖には良甫面内に、上雙溪・中雙溪・下雙溪と註記したる部落があつて、『河東郡邑誌』の附圖に蟹峙と書ける山は其の部落近くに當つてゐる。此等を綜合すると、此の上・中・下雙溪が昔の雙溪洞で雙溪寺の在つた事も推測される。(河東郡花開面に今も雙溪寺といふのがあるが、古書に據るも此の雙溪寺とは別である)且つ河東地方は往昔、薩川部曲・花開部曲と云ひ、「其長刹頭。稱爲僧首」と『東國輿地勝覽』にもある如く、佛教盛んに行はれて、宏大なる寺院が多かつた。普賢庵や長興寺と云ふのも、恐らく雙溪寺に屬した寺院であらう。又父の書に、汝、族僧燈邃の處に在りて學業を受くと云ひ、日遙の書にも族師邃方丈とあるより見れば、乃ち文祿役の當時、余姓なる同族、僧名燈邃の處に修學中で、明敏なる彼れは、多少佛教の感化を受けて居たとも見らるゝ、其の剃髮して法衣を着くるに至つたのも、決して偶然ではあるまい。

日遙上人の事蹟に關する概略は叙上の如くである。彼れは戰亂中の迷兒たる困境より轉じて未知の異邦に入り、難境苦境に心身を修練し、歳未だ不惑ならずして本妙寺を中興し、古稀の老齡を以て護國寺を創建した。其の行爲や實に壯とすべきである。但其の歸國を得ざりし一事は憐むべきものである。然し彼れは已に因果と諦めた。彼れの父も亦其の文面より推すも情理に通じた人と觀らるゝ。思ふに俱に運を天に任せたと信ずる。而して當時の朝鮮が、佛教に壓迫を加へ、民をして安心立命の歸趨に迷はしめ、僧侶を視ること奴隸の如



くなりしと反對に、日本に於ては神・儒・佛の三者を以て國を治むるの教となした。彼れの如きも異邦の人たるに拘はらず、護法布教の權威を與へられ、活潑々地の行動を爲すを得た。果して顯著なる名譽は『高僧傳』中に勅せられ、之に加ふるに、其の朝鮮の人たるを贊揚する爲に、日遙上人と云ふよりも、寧ろ高麗上人の稱を以て永遠に尊仰せらるゝ所となつた。何人も知る如く、彼の文祿・慶長の兩役に日本に歸化したる者は尠くない。而して各々適する所の業を得て其の生を安んじた。就中、衆生濟度の佛道に身を委ねたる彼れの如きは寔に奇特の事に屬する。李朝五百年、其の人物必ずしも少しとはせぬ、然し異邦に入つて功德を後世に遺したる日遙上人に匹敵すべき者果して幾何あるであらうか、自國に居つてすら彼れ程の事を成し得たる者は罕れたと云つて宜い。實に彼れが日本の教化宣揚に貢献したる努力は偉大なものであつて、其の永遠に尊仰せらるゝ功德の上よりしても、炯々たる眼光は、當時已に三百年後の今日の氣運を透視したかの如く思はるゝ。由來佛教は廣大無邊で之を施すのに境界は無い。然るに往古日本の先導となりし朝鮮の佛教は、李朝の政策上、根蒂より芟除せられ、殆んど枯死するに至つた。而して其の枯死は遂に國力の衰頽を來たしたのである。今や氣運旋回、佛教は東方より逆轉して、人心統一の先驅と爲り、民族融合の媒介と爲り、溫かき光明は乾燥せる山河の上に放たれ、枯死したる草木も漸く蘇生して、百花將に開かんするに近づいた。日遙上人も亦た地下に莞爾たるであらう。

本妙寺は日遙上人の努力を以て現在の地に建てられて、朝鮮と縁故深きは最早贅言を要せぬが、同寺

に詣づる人は更に其の境内に、朝鮮人を祖先としたる熊本の碩儒高本紫溟と、加藤清正に殉死したる朝鮮人金宦の墓あることを知らねばならぬ。紫溟に就ては稿を別にするが、金宦の事蹟を茲に略述する。

金宦、(朝鮮某地の人なるか不明、一に姓名を良甫鑑と云ふ)文祿の役、夙に加藤清正の轅門に降り、爾來其の嚮導となつて、地勢風俗等の諮問に應じ、大に其の軍に貢献した。元來彼れの人と爲り氣慨ありし爲、彼土の國政紊亂、人心腐敗せるとは反對に、日本の志操堅固にして義烈の風に富めるを慕ひ、殊に清正の恩遇厚きに感激し、其の凱旋の時隨從して熊本に至り、俸祿二百石を受けて仕へ居た。然るに慶長十六年六月二十四日、清正の薨去するや、最早一日片時も此世に居るべからずとて、遂に割腹するに至つたのである。『續撰清正記』に云ふ

金宦と云ふ朝鮮人は、同二十四日に切腹せんと致すを、兩人の子ども是れを見、脇指をとり、色々教訓しとどめ、脇指をかくして丸腰にして置けるに、十四五日も過ぐる故、思ひとゞまりたるものと子供も思ひ、油斷したる時分、たがかけをよび入、古桶共の輪を懸させて見居たるが、人のなき時、たがかけの鉈を取て、腹十文字にかき切つて死したりけり。是を以て見れば、高麗人も純柔純弱兵と計りは又申しがたき事也。

實に死を以て恩に報ゆ、士氣を興すの模範である。されば又、同書に「清正葬禮の事、附廟所の事」と題して

葬禮は十月十三日に、西光寺原におゐておこなひ、京都本國寺の住持日桓上人の引導也。追腹きりたる大木



土佐・金宦が棺も、清正龕の跡に續て與せ、同く宮籬の内に左右に双をきて、同日桓上人の引導なり。廟所は本書の通、中尾山に建也、右の兩人の者共の廟も日乘大居士(正清)の廟の左右の脇にならべて立置也。扱本妙寺は元熊本に有たるを引て中尾山の麓にたてたる也。

とある如うに、主公清正と同じく、當時の名僧日遙上人の引導を受け、戒名を法圓日融と授けられ、最も崇嚴なる儀式を以て埋葬された、寔に名譽の殉死である。同時の殉死者大木土佐の事蹟は茲に省略するが、現に清正廟の左側(向つて右)に土佐の墓があり、右側(向つて左)に朝鮮人金宦墓と刻されたのが建て、ある、彼れの遺子は、清正の嗣たる忠廣の除封せらるゝと共に、流浪の身となりたるが、細川忠利肥後の領主となるに及び深く之を憐み、俸祿を與へて仕へしめた。金宦の義烈は今尚ほ熊本人士の傳ふる所であつて、常に墓前に香を焚き花を供する人の絶え間なしとの事であるが、死後已に三百十有餘年を経るも、彼れの忠魂毅魄が世を感動しつゝ、あるを知るに足りる。

(大正十四年十一月稿)

## 人見鶴山と洪滄浪

〔一〕 人見鶴山の略歴——鶴山と木下俊長——洪滄浪の略歴〔二〕 鶴山と滄浪の訂交——鶴山筆談と  
〔天和來聘韓客手口録〕——滄浪の歸國〔三〕 李東郭——滄浪より鶴山に寄するの書——鶴山の子桃源よ  
り滄浪への返簡——鶴山と足利學校との關係

〔一〕

白鶴翩翩、蓬萊の山高き處に舞ひ、紅旭囀囀、滄浪の水清き邊に映するの畫は、古來吾國の習風として、新年家々の床間に揚げらるゝ。斯く天空海濶、何等障碍なき光景を尊ぶは、乃ち是れ平和を愛する大和民族の理想の表現に外ならぬ、茲に此の光景の雅號の持主、人見鶴山と洪滄浪との和氣欽すべき事蹟を回憶して新年の初頭に紹介する。

豊太閤の征役以來、朝鮮との國交斷絶せるを相互の不利として、平和回復を圖りしは徳川家康であつた、朝鮮も亦た之に共鳴し、慶長十二年(宣祖四十一年丁未)より文化八年(純祖十一年辛未)に至る約二百五年間、通信使なる者を送る事十二回に及んだ。併し儀禮の虚飾を誇りとする習風は、毎回四百内外の多人數で、天文・地理・醫相より・曲馬・酒豪・博徒まで・苟も藝を以て名ある者を従はしめ、殊に文詞自慢の事として、必ず之に長せし數人を擇び入れた。此等の人々の唱酬は、日本に於て珍重し、當時直ちに刊行して弘く國內に播布した。今尚ほ存する其等の書を讀むに、巧みに筆を弄し、親交の情を述べ欣慕の意を表してゐる。然るに其の白國に刊行したる彼等



が當時の紀行や遺稿等を見ると、日本に遺されしものは相反し、蠻夷と呼び文言と嘲り、冷笑の言、猜疑の辭を吐いてゐるのが尠く無い。又日本に於て作りし詩文等は全然遺稿に載せて居らぬ者さへある。之を日本が其の唱酬の詩文、筆談等を、悉く公然刊行して敬意を表したのに較ぶると、寔に霄壤の相違である。併し二百五年間十二回に亘る多くの文士であつた故、其の中には衷心日本を親愛し、個人間の交誼に於ても永く美談を留めた者が無いでも無い。乃ち茲に紹介するのは其の一例であるが、先づ鶴山と滄浪の略歴より叙述する。

人見鶴山、別に竹洞。龜山・北山と號し、名は友元、一に節と云ふ。字は宜卿、通稱又七郎。其の本姓小野氏なるが故に、時に或は野鶴山とも署した。寛永十四年乙亥(仁祖十五年)十二月、京都に於ての生れである。父の名は玄徳(又賢知と云ふ)醫を以て幕府に仕へ、法印に叙せられ。伯父人見道生、卜幽軒と號し、水戸侯徳川光圀の侍講であつた。鶴山資性穎悟、人稱するに麒麟兒を以てした。其の名、將軍徳川家光の聽に入り、正保二年齡九歳にして謁を賜ひ、世子家綱の近侍に擧げられた。彼れ幼より當代の儒宗、林羅山の門に學び、羅山も亦た誠を盡して薫陶した。されば羅山の子、春齋(又號鷲峰名は春勝)が編したる『羅山先生詩集』にも、「幼より業を先生に受く、先生晩年の親灸此の倫無し」と云うて居る。而して鶴山は春齋より齡に於て十九歳の弟であり其の子鳳岡(又號整字名は信篤)より八歳の兄であつたので、羅山は子の如く孫の如く愛したのである。

鶴山は林門の秀才を以て博く經史に涉り、具さに物理を究め、旁ら筆道に妙を得て最も楷書を善くした。寛文元年二十五歳、幕府の命を受けて傳家の醫業を改め、儒者に列して經筵に侍講し、年俸三百俵を給つた。而して春齋の大事業たりし『本朝通鑑』の編修には、首として之に當り、就中、保元元年より弘安十年まで、百三十二年に亘る五十五卷は、彼れが自ら草したものである。現に此の草本は下野の足利學校に貴重書として保存されてゐる。實に『本朝通鑑』三百十卷の編修は、林氏の大事業であり、幕府に於ても亦た重視して、成功の際にも多くの特典を與へた。

寛文十年『本朝通鑑』成り、六月十二日官に上つる。同十九日、弘文院林學士春齋に秩二百石を賜りて之を賞す(是に至つて秩千二百石)。伊賀守永井某、其の事を掌るを以て、延壽國資造る所の御刀及び黄金二十錠を賜ひ。林春常(鳳岡の別號)に白金百錠、時服三領、人見友元に白金百錠、時服三領。坂井伯元に白金百錠。林春東に時服三領・外套衣。上左兵衛に白金五十錠を賜ひ。林門諸生其の事に與かる者十二人に白金百錠を配ち賜ふ云々。(蜀山人全集、一話一言)

之を觀ても鶴山が努力せし一斑を窺ひ知らる。而して彼れが昌平疊に出で、書を講ずる毎に、聽く者宛も堵の如く、其齡未だ四十ならずして、自ら一家を成し、世に人見氏の學と稱せられ、且つ人と爲り濃厚誠實、父母に事へて孝に、朋友と交りて信なりし爲め、其の門に學ぶの徒尤も衆きに至つた。延寶元年。父の玄徳死せるを以て、其の食邑(下野國足利郡西場、武藏國足立郡大久保)をも賜はり五百石を領し、同八年、將軍綱吉立つに及び、待遇益々厚きに至つた。又彼れは幕府の儒官りたしのみでなく、豊後日出侯木下俊長に聘せられ、其の學政を革新した。

俊長は大年と號し、天資聰明、自ら庶政を聽斷し、特に儒教を尊崇したる旁ら、畫を狩野常信に學びて出藍の譽を博し、當時の諸侯中、罕に見るの傑物であつた。言ふまでもなく、日出は九州での小藩であるが、文教は他の大藩を凌駕した。併し同地より碩儒帆足萬里が出でし爲め、多くは其の感化の如く認めるも、萬里より以前に、鶴山が素地を成せし事は、萬里の姪にして學者たりし松田青溪(名は猷、百出藩老)の『萬里傳』中に



柱峰侯(俊長を云ふ)大に學を好み竹洞先生を聘し學を講じ、藩の子弟を教育す。元和偃武を距ること久遠ならざるに依り、教育の法立たず、人、學問の以て何たるを知らざるものありしが、公、學を講じ子弟を教育せられしより、藩靡然として學の以て爲さざる可からざるを知るに至りし。

と書けるにても明かである。俊長は竹洞即ち鶴山を信ずる事深かつた。予は去る七月、日出に遊び、同地に存する鶴山の遺墨を見たるが。其の重なるものは、横津神社の奥殿に在る「木下内藏頭豊臣俊長墓」と書せる碑面の大字でこれは俊長が生前鶴山に筆せしめたものと傳へられてゐる、又舊城内(現今小學校所在地)に在る巨鐘の銘があつた。

豊後國日出城主從五位下行木下氏右金吾校尉豊臣俊長新鑄鐘懸之城十二支撞之以爲管内之用銘曰  
撞之不撞。萬古聲洪。授民以時。年與國豊。且夕發省。秋月春風。名器久存。遐福無窮。

元祿八年乙亥十月二十三日

竹洞野宜卿識

日出舊藩士中には、書幅扁額等を藏する人も亦た鮮くない。多くは竹洞と落款してある。彼れは元祿九年(肅宗十二年)正月十四日、病を以て江戸牛島の別荘に歿した、時に享年六十歳である。弟の必大は正竹と號し、亦た幕府の儒官に列し、殊に従弟人見懋齋(名は道設道生の子)は水戸彰考館總裁として『大日本史』の編修を監督した。鶴山の『本朝通監』編修と共に、吾國の歴史家は、此の兩人見氏を忘却してはならぬ。

洪滄浪、別に玄冥子と號し、字を道長と稱した。本籍は南陽、父を翊夏と云ひ、孝宗四年癸巳(日本承應二年)京城の生れである。彼れ自ら「余生れて五歳、即ち書を讀むことを知る、稍長じて人に從つて學を受くるも僅に數

卷のみ、經書に至つては皆自ら讀みて微辭奧旨暗に心に解する者有るがごときに似たり。而かも家素と貧賤衣食に急に、未だ大志業を爲すに違あらず。其中歳に及んでは屯難厄窮、東西に悚迫し學を廢するを免れず、而して牢愁感憤あるに遇へば、鬱悒不平の氣、則ち獨り詩に於て之を發す、人の見る者、皆之を能と謂ひ、輒ち詩人を以て之を目すと云ふて居る如く、科擧に登第したのではないが、其の交はる所は、申長(號汾)・金昌協(號農)・金昌翁(號三淵)・崔昌大(號昆)・申靖夏(號愨)・鄭來僑(號澆)の如き博文篤行當時知名の士のみであつた。京城白蓮峰(白岳の別名)の麓なる三清洞に住し、書室を柳下亭と名づけ常に風流徵逐を事とした。天性耿介、俗と伍するを好まず、官職としても、槐院製述官・通禮院引儀・西部主簿兼纂修郎を歴て蔚山監牧官と爲りしに止まつた。後年副提學の顯位を占めたる崔昌大の『昆侖集』に彼れを評して

之子詞華盛。而余仰典刑。篇章潤金璧。飛動挾仙靈。哲匠俱推轂。高名日滿聽。才全仍蹇產。身厄竟芳馨。舌故張儀在。車從郭解停。居常潛著論。狂即哭無醒。與我曾投分。相看各忘形。良工遺杞梓。窮谷惜娉婷。と云ふてゐるなども、其の人物性格が想はるゝのである。彼れに嗣子無く、女は他に嫁つぎ實に寂寞たる老境を送つて、英祖元年乙巳(享保十年)七十三歳にて歿し、楊州荊菜山の神穴里に葬られた。碑銘は親友なる鄭來僑

が書いてゐる。其の中に「神姿手秀。眉目疏朗」と云ひ、又「鬚髮蒼然。顏如紅玉。余因疑其神仙中之人」とある如き、其の風采が偲ばれる。遺稿として上刊せられたものに、『柳下集』六冊がある。其の文には、肅宗三十八年、烏喇總管穆克登と、國界査定の爲め、白頭山に登りし金慶門に代つて作りたる「白頭山記」の如き攷證上大に價値あるものもある。又彼れは、古來薄倖窮貧の詩人にして、其の心血を注ぎし作も、梓に上ぼす



を得ず、僅に閭巷に傳はるも、それさへ遂に泯滅すべきを憂ひ、十有餘年を費して、四十八人、二百三十餘首を得、『海東遺珠』と題して出版した、洵に奇特の至りである。彼れの詩として人口に膾炙するものは、其の秋興の作

野人籬落過重陽。滿地寒花寂寞香。何限秋光渾不管。獨留蟲語五更霜。

と云うのであるが、彼れが寒微の境涯と潔清なる性格とを併せ看る如き心地がする。

〔一一〕

滄浪が日本に行いたのは、天和二年壬戌(肅宗八年)で、其の一行は、正使尹趾完(號東山)・副使李彥綱(號鶯湖)・從事官朴慶後(號竹庵)を首めとし、總數四百七十三人であつた。是れ徳川綱吉の將軍職を襲ぎしを賀するが爲めの使であつて、徳川幕府時代通信使の第七回目<sup>(一)</sup>に相當する。而して日本が通信使の到る毎に、餘りに手厚き待遇を爲したので、朝鮮人は益々侮慢の態度を増し、禮儀の國と自負しながら、亂暴極まる舉動が多かつた。それが爲め、這回の一行に對しては、對馬の宗氏より、豫め次の如き注意を禮曹判書に送りし事は、朝鮮の『同文彙考』等に載せてある。

今番の一行、上官より以下、須らく整齊謹懿なるを要す。癸未(仁祖二十一年、尹順之等の一行を指す)・乙未(孝宗六年、趙珩等の一行を指す)の年、各處の支持、酣飲爛醉の致す所、或は杯盤を狼藉たらしめ、或は漫りに戸楹を刻づり、席を割き、壁に書し、或は堂壁に涕唾し、或は階除に遺尿し、竟には騎る所の馬を走らすありて、倒されて斃死せしもの

あり。我が國人士、蟻のごとく聚り、麋のごとく至り、觀る者堵の如し、而して其の牧圉廝養も亦に刀を佩びざる者なく、其の俗果敢にして絶えて裕柔の氣象なし。若し馬に跨りて校を蹴り、或は婦女の來り觀る者に唾するときあらば極めて寒心と爲す云々。(原漢文)

斯る警告に接したので、朝鮮に於ては一行の人物を嚴重に選擇した。滄浪は現に微寒なる文官であつたが、性格の耿介と詞藻の富贍とを以て、夙に時の元老たる金錫胃(號息庵)に知られて居つたので、乃ち其の推薦に遇ひ且つ副使李彥綱と同學にして、親交ありし情誼に強ひられて、遂に子弟軍官の名を以て此行に従ふ事と爲つた。

此の一行は五月八日京城を發し、十一月十六日復命した。往路六十六日(陸行朝鮮内十九日、日本内二十日、舟行二十七日)。歸路四十六日(陸行日本内十六日、朝鮮内十三日、舟行十七日)。其の他は對馬・大阪・京都・江戸に滯留し、都合百九十日を要してゐる。江戸には八月二十一日到着し、留まる事二十日にして、九月十二日歸途に上ぼつたのである。

彼等江戸滯留中の賓館は本誓寺(日本橋馬喰町)であつた。當時日本は朝鮮を以て文教の先進國と信じ過ぎ、諸處の學者は禮を厚うして一行に接し、經史の質問、詩賦の唱酬等を爲すを名譽とし、且つ朝鮮人と言へば文字ある者と思ひ、争つて其の揮毫を求めたものであつた。此の行の譯官なる金起南の『東槎日録』に

我が國文獻の名、素より日東人の耳目に飽く、詩を求め墨を求むるの請、路次に在りて已に堪ゆ可からず、舍館に到るに及びては、館伴より其の國政を執る者と以て廝養の倭及び儒釋好事の輩に至るまで、紙硯墨を張り、日々に來つて求むること懇ろなり、而かも余詩に於て尤も昧々なり愧心の發する以て辭を爲す無く、必ず洪道長・成伯圭に委ぬ。夫の筆札のときは、則ち余に臨池の學無しと雖、好紙精練、眼前に堆積し、來る者雜遝、之を揮へども去らず、始めて恥を忘れて揮洒を試み、終に一の苦役を成す、矢絃上に在り發たざるを得ずと云ふ者、豈に此れを謂ふ耶。(原漢文)



とあるにても想像せらるゝ。文中の洪道長は即ち滄浪、成伯圭は翠虛と號し、此の行の製述官であつた。

此の一行の江戸滯在中學者文士との應接は最も頻繁を極めた。而して幕府最高の學官として文教の權を握り夙に朝鮮王廷との往復文書を掌りたる林氏の一門は其の間に在つて款待の任に當つた。殊に鶴山は林門の先輩たるの故を以て當主春齋を助け、木下順庵と共に、始終彼等の賓館に出入し、斡旋の勞を取り亦た唱酬の樂を同うした。尤も此の一行より二十七年前、乃ち明曆元年(孝宗六年乙未)の通信使從事官南壺(名は龍翼)の『扶桑錄』に當時稱して文士と爲す者八人として評せる中に、次の如くに書いてある故、彼等も人見友元即ち鶴山と對面を期して來たものと思はる。

林道春 一名忠、字は可信、羅山と號し、或は羅浮子と稱す。年七十を過ぐ。位民部卿に至り、亦た法印と稱す。文を以て一國に鳴る、

製撰の文書皆其の手に出づ。且つ著述多く神社考等の書あり。其の爲くる所の詩文を觀るに、則ち該博富瞻、多く古書を讀む。而かも詩は則ち全く調格無く、文も亦た猶ほ蹊徑に味きがごとし。若し鍊琢隱括を加ふれば則ち頗る觀るべき者有らん。

林恕 字は之道、春齋と號す。道春の子、能く家業を繼ぎ稍詩文を解す。性質冥頑、舉止僂侮。

林端 字は彦復、號は函三、又讀耕齋と號す、恕の弟なり。顔面豐厚、性質純眞、言語文字厥の兄に比すれば頗る優れり。

林春信 恕の子、年十六、眉宇妍秀、亦た能く字を寫し句を綴る。

人見友元 年纔に二十餘、姿狀清明、應對恭謹、其の才亦た以て書辭に通じ詩律を製するに足る蓋し林氏に従つて業を受くる者なり  
(以上、原漢文)

壺谷は學識該博、性行純眞、肅宗朝に大提學と爲り文衡を執りし人であるだけ、此の月旦は概して穩妥と言うて宜い。但、鶴山が壺谷と接した當時は其の齡十九であつた。それを年纔に二十餘としてあるのは、應對の

恭謹、才學の敏俊は自然外客をして年上に感せしめたものかとも想はるゝ。

鶴山が通信使の賓館に出入して、應接したる事實を自ら記したる『鶴山筆談』と云ふ書は大に興味深きものである。今其中より彼れが最も親みを交へた滄浪に關するもの、幾分を抄録する

○仲秋二十三日、初めて本誓寺に至る。朝鮮國成均館進士成琬、字は伯圭、號は翠虛。進士李聘齡、字は耳老、號は鵬溟。裨將洪世泰、字は來叔、號は滄浪。三人中堂に來り相會す。整字先づ筆語す、而して後、整字・鷄峰・春庵・伯立等、各々詩を以て唱酬す、翠虛諸客に呈し、鵬溟も亦た整字及び余に呈す、即ち之に和す云々。

此日は初對面でもあり、殊に席上には、岡崎城主水野忠春・郡内城主秋元喬朝・房州領主酒井忠國等が居つたので、閑談には及ばなかつたやうである。

○二十四日、夕に及び滄浪中堂に在り、余之をを導き外堂の南廂に至り、使を馳せて朝三(通譯に當りし對州の人)を呼ぶ、未だ來らず、指を以て地に書し語ること少焉なり、翠虛及び鵬溟亦た來る、通事をして言はしめて相語る、朝三亦た至る。

余問、足下の年幾何か。滄浪答、三十、足下の歲幾ばく乎。

余答、四十六、問足下生るゝ所、何處か、既に高科に登る乎。滄浪曰、貴容太だ少かし、齡と相應はず、僕は漢陽の人、庚申の歲喪に居り、今春喪を除かる、命を承けて、信使に従つて來る、故に未だ科擧の事に預からず。



余曰、今何の職に居る乎。滄浪曰、本翰の士なり、故に未だ弓を腰にするを爲さず、偶ま副使老爺の裨將と爲つて來る、副司果と稱す。

余曰、副使老爺、何處の人乎。滄浪曰、漢陽の人、少年より僕と同學、故に其の懇遇を受く。

余曰、足下客中、想ふに書に乏しき乎、囊中何書を佩ぶる乎。滄浪曰、行旅書に乏し、僕柳子厚の詩を好む、故に纔に此等の書を帶ぶるのみ。

滄浪、箱根・駿州道中の數詩を書し、余に示して曰く、此れ途中の作る所也と。

余、之を吟じて曰く、風物景致、隨つて其れを行くが如し、今夕皆和して之を呈せんと欲するも、筆語を妨ぐるあり、明朝和して之を呈す可し

と云うて翌日之を贈つてゐる。此夜は滄浪が「即席走呈」として

己識人同氣。休嗟語異音。青燈一點影。照我百年心。

と賦して示せるに對し、鶴山は左の次韻を成し、尙ほ夜の閑なるまで筆談に耽つた。

良宵歡邂逅。遞筆問清音。月霽秋風爽。玉壺一片心。

○二十六日、午に近く本誓寺に到る、平田氏に遇ひ相語りて外堂に到れば、順庵(木下)南廂に在りて翠虛・滄浪と相酬和す、余至り翠虛、滄浪と相揖し、順庵と相語り、而して中堂に入り朴同知に遇ひ、暫く朝鮮の事を語り、裨將の房に到る云々。

此日は順庵の歸つた後も、鶴山は翠虛・滄浪及び他の書生と時の移るを忘るゝまで唱酬した。

○九月二日、馬島太守の別館、願行寺に會す。

余、書して示して曰く、昨は芳簡を賜ふ、偶ま官事多く未だ報を作さず、就いて言ふ、昨日二兒、任處士に隨つて賓館に至り、謝する所多かりしに、然も座客多くして、足下筆力を用ゆるも亦た多し、故に他日を期せり。

滄浪曰、二郎君、極めて佳、大に鶴山の風度有り、異日必ず能く家聲を繼がん、鶴山其れ福人なるかな。

余曰、昨は副使老爺、筆墨を二兒に賜ふ、多謝、足下僕の爲に謝せらるれば幸甚。

滄浪曰、老爺、二郎君を見て極めて嘆美し、之を目するに鸞鳳の雛を以てす、足下子を生む何んぞ其れかくのごときの奇なるか、僕纔に一子あり、健羨の至りに勝へず。

こゝに鶴山の子の二郎と云うてゐるのは、他日幕府の儒官として家を成したる、名は沂、號は桃源のこと、時に其齡十三歳であつた。此日鶴山は狩野常信に畫かしたる「釣雪圖」を滄浪に贈り、添ふるに左の詩を以てした。

請看萬里滄浪子。我是清江釣雪翁。歸國濯纓蒼海外。登科簪筆玉堂中。相思夢到一窓月。遠別心通千古風。他日若傳來雁信。五雲深處翰林公。

『鶴山筆談』の抜抄はこれにて止むるが、別に鶴山の筆に成つた『天和來聘韓客手口録』といふのがある。それには滄浪と別離當時の有様を委しく書いてある故、次に摘載する。

○十一日午前、本誓寺に到り、洪滄浪と外堂の南廂に會す。



○余曰、(前略)僕既に贈行の拙詩を作る、今朝官事多くして未だ之を淨書せず。

滄浪曰、多謝す多謝す、今日の内に書き送らば、則ち忽卒の中と雖も、和して以て之を呈せん耳。

余曰、僕請ふ所のものあり、足下、慈母及び幼令男、故里に在りと、今二物を以て各々之を呈せんと欲す。必しも辭する勿れ、乃ち僕の志なり、惟れ希ふ。答、古の人、行を贖るの送あり、足下且つ歸りて母に奉つるを以て辭と爲す、茲に敢て辭せずと。

余是に於て辭し去り、館伴内藤義概の宅に到り、三使に呈する詩及び滄浪に送る古風二章を書す。銀朱扇墨を三使に贈らんとし、以て任處士をして持ち去つて之を贈らしむ。哺に及んで又内堂の北廂に至り滄浪に遇ふて別を叙す。

滄浪書主示して曰、諸作儘是れ佳絶なり、僕に贈るの詩尤も奇なり、是れ情多く語切にして然るを覺ゆる也。

余曰、若し高和あらば途中よりして之を送らるべし、平田直に達せば則ち送り來るべきのみ。

滄浪曰、吾が儕等相逢ふ天堂之を爲す、新知の樂未だ洽からず、遽かに一生の別を作す、何ぞ其れ悲哉、答、噲す所のもの然り、千里一別眞に再會無し、然れども、他後信使の來るあらば、則ち足下正使と爲り來らんも亦た此を知るべからず。若し然らば則ち大歡勝て言ふべけんや。

滄浪曰、僕筆墨少許あり、寸衷を表せんと欲する而かも物薄うして甚だ愧ぢ、敢て手を出さず未だ如何を知らず。余即ち受け謝して曰、固是れ深意より出づ、何んぞ敢て之を辭することを爲さん。(中)前頃、兒輩

に筆墨を賜ふ、多幸々々、艸々にして未だ之を謝せず。

滄浪曰、ちきに副使老爺、筆墨紙若干の物を足下に呈す。其れ己に傳致するや否や。答、未だ達せず、料り知る定めて達すべきのみ。

余曰、僕、剪刀あり、其の柄妙工之を刻し、四勿の意を寓す。以て老爺(副使を指す)に呈し途中の慰觀と爲さんと欲す如何。滄浪之を受けて曰く、即ち之を達す可し。

滄浪又精心丸・蘇香丸を囊中より出し余に贈つて曰、此の兩藥は乃ち上熱・痰熱・氣厥等を治すの良藥なり、僕足下を愛敬する意窮り無し、故に此れを以て之を奉せん、笑領するや如何。

余曰、多謝す多謝す、懇々の情何を以てか之を報んや、就ち問ふ、老爺(副使を指す)印石を求ることを聞きぬ、僕多く之を貯ふ、大さ幾寸にして可ならん乎。答、老爺果して之を得んと欲せば、石様は則ち得る所に隨つて可なり。

余曰、他日對馬太守の便風にて之を傳送せん。前年信使來聘する、歸に臨みで便風す、或は箱崎よりし、或は西京よりし、或は大坂よりし、或は長門下關よりし、或は馬嶋よりす、皆能く之を達す、今回も亦た便風に倚て一封を送らば皆達せんのみ。

滄浪曰、本國釜山より馬嶋に往來するの便あり、僕、書を修め以て朝三に附して則ち足下に傳達すべきや、答、若くは朝三、若くは平田直なる者は、馬嶋の家臣、長者と稱ゆるものなり。

是に於て夕陽ならんとす、余悵然として別れ去るに忍びず、然れども整裝紛々として穩坐すること能はず



して辭し去る。滄浪惻々として顔ばせ赤し、亦之を勤めて曰く、山海數千里、其れ能く保畜し、則ち忠孝  
雙び全ふするに在るのみ、足下懋めよやと。滄浪揖して之を謝す、是に於て手を握りて相別る。

讀み來り眞摯の情實に人を感動せしむる、尙ほ彼れが遺稿たる『竹洞詩文集』には「天和壬戌錄」、「壬戌朝  
鮮來聘、竹洞承大命預其事、日記以傳」など、題し、當時歡迎の實際を書いたものもあり、殊に滄浪の人物に  
就ては、「淨庵記」なる文中に「博學善文、氣象雄偉、聰明群に超え志操凡ならず」と言つてゐるにても、鶴山  
が彼れを私淑した事の大なるを窺はれる。今茲には煩を避けて、單に滄浪の歸國に當りての唱和を少しく採録  
する。

留贈鶴山詞伯案下

滄浪

皎潔青霞志。清曜野鶴姿。相逢宛舊識。一語托深知。滄海乘槎日。東都返旆時。此生難重會。臨別贈新  
詩。

古人有一言而定百年之交者。僕與鶴山之謂也。鶴山文學士。爲東都士林之領袖。名聲藹然鬱。一見  
許我以知己。接我以談笑。何其幸矣。誰料萬里海外得此良友也。第交歡未久。作別在邇。參商一隔  
前期杳茫(中略)茲賦短律以掃眷々之懷云。

奉和滄浪詞伯留贈之芳韻

鶴山

異域共同氣。先看英傑姿。水雲雖遠隔。風月自相知。燈下舉觴處。臺端代語時。悠悠千里別。渾在五言  
詩。

朝鮮國滄浪詞伯。從星使來於江都。歸期既在明日。乃自卸鞍之時。一面而如數十載之親交。  
可謂異域同志。因惜別。作古風二章。以爲他日相思之信云。

鶴山

遠帆來處黃梅雨。榮錦歸時紅葉霜。別恨明朝更沾袂。交情今日共酬觴。漢陽之廣不可泳。江戶之長不可  
方。壽域慈親倚閭立。故園稚子埃門望。一年歸思幾多喜。萬里同心何日忘。漢陽之廣不可泳。江戶之長不可  
方。

奉次鶴山詞伯贈別古風二章韻

滄浪

海山九月秋葉黃。白露夜零結爲霜。歲暮游子懷故鄉。憂來誰與共啣觴。臨風惆悵空彷徨。我所思今天一  
方。傾蓋新知樂未央。參商一別遙相望。別時贈我瓊琚章。中心藏之不能忘。臨風惆悵空斷腸。我所思今天一  
方。

實に鶴山と滄浪とは相見たる初めより意氣投合し、別れに際しては膠漆離れ難きの情ありしは、詩句の上にも  
露はれてゐる。斯くて滄浪は、歸國の途上、箱根より先づ詩を寄せた。鶴山は次韻して急使を馳せて後を追  
はしめた。

相思唯在夢魂間。珍重征鞍故里還。面接從前知信美。官遊何事得清閑。碧雲回頭箱根嶺。白雪馳心玉屹



山。吾亦慙勤爲君喜。北堂須舞老萊斑。

別離腸斷古今間。況又仙鄉去不還。報我厚情隨筆切。思君長夜對燈閑。大鵬杳々凌南海。萬馬駸々嘶北山。惆悵何時期再會。裁書徒寄淚痕斑。

滄浪から更に濱松よりも、大阪よりも、亦た赤間關よりも信書を寄せ來つたが、鶴山は最早道程遠くして、之に酬ゆるも追ひ及ばずと諦め、翌年癸亥、五言三十韻の長詩を賦し、之を京城なる滄浪に送るべく對馬の便に托した。然し雲濤遙に隔たり、且つ邦域相異なるを以て、其の着否さへ知るに由なき裡に、星霜を経ること十餘年、鶴山は終に黃泉の客となつたのである。

滄浪は故國京城に歸りし後も、事に觸れ物に感じて、鶴山を懷ひ出した。其の『柳下集』の中に「寒江釣雪圖」と題する左の詩があるにても推測される。此の圖は前に述べた如く、鶴山が贈つた物である。

憶昔日本野鶴山。贈我寒江釣雪圖。云此常信之老筆。新詩妙絕三美俱。燈前一見三歎息。萬里輕齋越橐無。鯨波百恠不敢逼。玉龍掣斷風帆徂。歸來十襲藏篋裏。寶玩不翅千金珠。六月火雲天地赤。試拂今朝掛素壁。江天漠々飛鳥絕。雪滿千山萬山白。老翁一竿垂滄浪。小艇倚著蘆碕傍。暝裏不知簑笠重。意定神閑坐杳茫。高堂忽覺風浪動。灑氣蕭々吹巾裳。坐令火宅開雪山。恍然置我苕霅間。誰知東海釣鰲客。面髮尙帶扶桑色。回頭欲問畫中人。陽谷三山亦陳跡。

又滄浪と親友で、詩名高き金昌翁の『三淵集』に「題洪世泰日本所得獨釣寒江雪圖」といふ作あるを觀ても、滄浪は如何に此圖を珍とし、又如何に人に誇りしかをも窺はれる。序でに『柳下集』より日本遊中の詩を

少しく摘録する。

天外人烟落島中。斷開岑嶠結爲宮。城根半挿龍鼉窟。市陌交穿橘柚叢。頗恠山川移嶽色。尙看民俗帶秦風。客心懸彼孤帆影。更與溟流日夜東。對馬島

片帆東去浩無依。雲海冥茫接四圍。日月每看從底出。鷗鵬不礙上天飛。張鷟使節何超忽。徐市樓船有是非。却恐舟中皆羽化。一時相與御風歸。上關

石浦東穿入大河。舟行漸喜少風波。中流彩鷁牙橋動。兩岸朱樓橘樹多。物色艷於荆楚俗。謳吟哀似竹枝歌。平湖十里青絲纜。倚棹徐從鏡裏過。大阪河口

倭京都會最繁華。城郭人烟十萬家。日出樓臺迎使節。路窮滄海駐仙槎。少年寶劍霜爲鏢。游女輕衫繡作花。自笑風流非衛玠。市門投果溢行車。倭京

落日光垂盡。蒼茫海上天。驛程遵渚去。羈思逐旌懸。大澤蛟龍雨。孤村橘柚烟。棲々遠遊子。歎息此山川。琵琶湖

茲山標日域。嶺兀聳奇峰。迴擢鴻濛色。冥棲神聖蹤。四時留白雪。八葉列芙蓉。時有五雲起。去從東海龍。富士山

〔三二〕

滄浪が隨行したる肅宗八年の通信使以來、日本との間は久しく事無くして歳月を經過した。然るに偶ま徳川



綱吉薨じ。同家宣將軍職を襲ぎたる報が王廷に傳へられたので、之を賀すべく、正使趙泰億(號平泉又謙齋)・副使任守幹(號靖庵青坪又遜窩)・從事官李邦彦(號南岡)等の一行四百九十四人を遣はす事となつた。時維れ肅宗三十七年辛卯(正徳元年)、滄浪が曾て日本に往復せしより正に三十年に相當する。彼れは懷舊の情に堪へず、知己なる正使趙泰億に贈るに左の詩(原十六首、茲に八首を録す)を以てした。

雲帆初發永嘉臺。日湧扶桑曙色開。天外有山青半出。勢如飛鳥踏空來。

一岐東連藍島長。赤間關下住飛艦。雲愁海思天皇廟。畫壁中開古戰場。

大洋舟過赤間關。千里帆風滅沒間。四面向來唯有海。一邊從此始看山。

金欄漆舫上層樓。哀唱黃衣立兩頭。夾岸爭觀人似束。半騎墻壁半乘舟。

琵琶湖水學琵琶。上有西風黃菊花。白雁北來渠亦客。海濱隨處宿蠻沙。

江戸城高欲到天。引河爲帶四通船。市門白日穿人海。鼓吹雙行使節前。

蓬萊何在海中央。不老曾聞異草香。今日吾王方有疾。探歸先與太醫嘗。

君欲行時我欲留。驪歌一曲漢南舟。此心却與江流去。東繞扶桑六十州。

之を讀むも、滄浪が日本を忘れ得ざりし切なる情を窺はるゝのみでなく、宛も東道の主たるが如き得意を示してゐるの觀がある。而して同時に滄浪と莫逆の交ある崔昆命も亦た泰億に送るに一文章を以てした、其中に

竊かに廟朝の謨畫を聞くに、士夫の言論、其の人を鄙しみ斥くること殆んど蛇蝎狐鼠のごとく然り、之を

命づけて狡倭と曰ふ也、醜種と曰ふ也、使を奉じて其の國に至るや、則ち或は文詞武勇を以て相高うし、

或は陰事をウカカ誦ひ得るを以て誇りと爲し、徳を以て人を服するの圖を爲さず、夫れ是くの如くにして其の欽

悦して化に従ふを幾ふ可きか。(原文、漢文)

とある如き、確に日本最負なる滄浪に共鳴したものと。看做さるゝ、而して此の行の製述官としては、滄浪の最も昵近なる東郭李嶺(字は重叔)が當つた、滄浪は之を送るに序文を以てし、中に左の言を爲してゐる。

夫れ日本、數千里の地を以てして豈に人無からんや、余故に嘗て同行唱酬の際、誕率の語を爲し以て笑ひを遠人に取り可からざるを飭む。彼れの我れに接するや、外敬謹のごとく、内は則ち深察す、使の歸るに及び、文の佳惡、人の長短、評論せざる無く、書を爲くりて其れを國中に傳布す。余が不敏を以てし誠に其の免れざるを恐る、今に至つて之を思ふ、未だ嘗て汗の出でざるはあらざる也。(原文、漢文)

滄浪は謙遜にして自己を反省し、明敏にして日本を理解し、胸中極めて瀟洒たる者であつた、殊に彼れは東郭に托するに、三十年前の海外の知己、人見鶴山に寄する一封の書を以てした。是れ別後未だ曾て消息を通せざりし彼れは、鶴山の死を知るべき由も無く、日本の文士中、重きを爲せる鶴山は、當然東郭等を迎へて唱酬を共にすべしと信じた故である。

斯くて通信使趙泰億等の一行は、五月十五日京城を發し、七月五日釜山より乗船、十月十八日江戸に到着、十一月十九日同地を發し、翌年二月二十五日釜山上陸、三月九日京城に復命した。是れ迄通信使の江戸の賓館は日本橋の本誓寺であつたが、此の行よりは淺草の本願寺に變更された。又幕府に於ける文教の權を握り、朝



鮮王廷との文書往復を掌りたる林氏は、威望父祖に勝される三代の鳳岡、林門の重鎮とも云ふべき人見氏も亦た亡父鶴山の名を墜さざる桃源が益々斯道に奮勵してゐた時で、舊例に依り通信使の賓館に出入し、慰藉の任に當つた。

滄浪より鶴山に贈る書翰を托されたる東郭は、尙ほ傳言もあつたらうから、心私かに鶴山に面接するのを樂みとして來たのは言ふまでもあるまい。豈圖らんや其の人已に此の世に在らずと聞きては、彼れが落膽は想像に餘りある。然し接待の儒官中に鶴山の子なる桃源の在りしも亦意外の事で、其の奇縁に驚いたに相違ない。乃ち東郭は滄浪の書翰を桃源に與へ、亡父に代つて聞かした、其の文に曰ふ。

僕、足下と別れてより、今にいたる三十年矣、未だ知らず足下恙無しや否や。僕亦た世間に在れども而かも齒髮衰謝、殊に昔年相見るの人に非ず憐む可き也。毎に念ふ、本誓寺中に在つて、日に足下と唱酬し、其の言笑の樂、情志の孚、實に向産紆縞の義に愧づること無きを。今其の詩什藏めて筐底に在り、時有りて披覽し慨然として懷を興し、低回する者之を久うす。想ふに足下も亦た當さに然るべし。嗚呼僕、足下と世に生れ國を異にす、相去ること萬里、山海之を問たつ、唯是れ風馬牛の相及ばずして相往來する者は此の心のみ。記す癸亥の秋、足下の三十韻の詩を馬島より傳へ來るを得、其の文辭瞻博誠意懇篤を觀る、同志多修契。歸仁爭寫眞の句有るに至り、下註して別後諸人屢々公の像を畫き僕をして贊語を作らしむと云ふ。何んぞ足下僕を愛するの深き、而して諸子倦々として意に忘れざることも亦た見るべし宜しく即ち

還答して用つて高義を謝すべし。而るに春秋の義、太夫外交無し、故に敢て識つて以て禮を越へ義を冒さず、罪を聖人に得んことを是れ懼る、敢て足下を忘るゝに非ざる也。然れども中心感愧自ら釋てず。今者兩國無事、式つて舊好を修す、使者東に出で疆域通すること有り。乃ち敢て書を附して以て往りて足下の爲に謝す。而して繼ぐに三絶句を以てす、後に在り、一覽して之を和せば幸也。製述官東郭李重叔、吾が友也。其の人仁厚の長者、極めて文章有り、善く之を遇す可し。足下僕に於て見て之を愛すること此の如し、而して見ることを得ざるときは、則ち吾が重叔を見ること當さに僕を見るが如くすべき也。足下の書中に謂ふ所の僕が寫眞、今に至つて藏弃する有らば、重叔還るとき之を付す可し。僕今已に老いたり、竊かに之を致して家人兒女輩をして以て夫の少壯の顔面を識らしめんと欲する也。各々天の一涯參商相望む、此の書の後、恐らく復た書有る難し。書に臨んで悵惘懷を爲すこと能はず、千萬惟冀くは保齋せよ。以て翹想を慰せん不宣(原文漢文)

蓬海仙槎一夢還。日東消息杳茫間。不知萬里今何似。三十年來野鶴山。

東使今年又聘隣。試看東海未生塵。白鬚丹頰洪厓子。畫裏曾爲少壯人。

一別音信不復通。此生無那馬牛風。相思却似扶桑日。纔落西來復出東。

此の書翰を桃源が東郭より受けた時は、弟にして同じく幕府の儒官たる香山(名は浩、通稱七郎左衛門)と、子なる當時二十五歳の雪江(名は活、通稱帶刀、貞享四年生、寶曆九年歿、年七十三)も亦た同行し、席上各々詩を作つて東郭其の他に贈つた、彼れ等も亦た



和する所があつた。次に此等を探録するが中にも嚴龍湖が桃源に和した作の如きは、能く實を叙して居る。

世々隣交自有因。餘香滿座憶相親。江山爲盡文章美。異域風雲第一人。呈東郭李學士 桃源  
我有仙區未了因。相逢興味自相親。武都文教從今始。翰墨奇才擅幾人。次奉桃源詞伯韻 東郭  
天外星槎萬里餘。無端邂逅結騷盟。殊邦開示龍文象。笔下雲煙燻地生。兼示嚴龍湖南泛叟二書記 桃源  
鶴山。文藝擅東瀛。其胤詞章又主盟。却喜家聲能不墜。珠璣燦々筆端生。次奉桃源詞伯韻 龍湖  
星槎八月泛東瀛。萬里殊邦繼舊盟。十九人中才碌々。囊中穎脫愧毛生。次奉桃源詞伯韻 泛叟  
海外文章千里從。揮毫落紙勢如龍。鞍頭賦去日東曲。面接青天雪一峰。奉呈東郭李學士 香山  
渺矣吾行海上從。相逢意氣合雲龍。看君傑句誰堪比。富士高撐白雪峰。敬次香山詞伯韻 東郭  
萍水相逢難盡情。白雲天末忽歸程。三千里路莫煩遠。夫子曾言浮海行。奉呈嚴龍湖南泛叟二詞宗 香山  
異域相逢慰客情。却忘滄海杳修程。桑蓬自是男兒志。肯憚浮槎萬里行。奉次香山詞伯韻 龍湖  
平生放浪抱閑情。不憚重溟萬里程。倘使仙緣於我薄。此身何得此同行。奉次香山示韻 泛叟  
飛過關山超海峴。胸中萬卷氣清真。東遊唯不遠千里。兩地交情德有鄰。呈李學士 雪江  
瀛海迢々地一垠。此來何幸接仙眞。詩家自有雲龍氣。莫惜餘波德照隣。次奉雪江詞伯韻 東郭  
異境風波海舶遐。永修隣好各天涯。江山千里春雖小。香靄先開筆下花。呈嚴南二書記 雪江  
絕域休言壤地遐。眼中詩料浩無涯。甞關幸遇文章客。笔下天葩映彩花。奉和雪江詞伯韻 龍湖  
信義孚來地不遐。相逢今日海之涯。座中詩卷紛々落。却邪諸天散彩花。奉和雪江詞伯韻 泛叟

龍湖の名は漢重、泛叟の名は聖重で、東郭及び洪鏡湖(名は舜行)と共に、此の行中に文筆を以て重きを爲してゐた。殊に泛叟は、明暦元年の通信使従事官たりし南壺谷の子であつて、父が五十七年前の題壁や、帖幅の墨蹟に對し、尠からざる感興を起し、又其の家に、羅山・春齋等の詩篇を珍藏するを語りし雅話もあるが、茲には之を省略する。今回の通信使は、新井白石の建議に係る接待法の革新、國書上の字句改正等に關する論議に日を費して、江戸滞在も久しきに及んだが、愈々歸國の事となるや、桃源は滄浪に答書を作り、之を東郭に托した。

壬戌の秋、僕弱冠にして識荆須臾、一別是に三十年、瞻望すれども及ばず、相思ふこと多年。今茲貴邦、好隣を修し聘禮を致す。三官使江都に來り、製述官李重叔其の行に従つて役を祇む。一日僕長子活を携へて本願寺の旅館を訪ひ、製述官と邂逅唱酬す、其の人と爲りや、濃厚朴實強記多才、動作章を成し懇遇愛す可し。乃ち一封を傳ふ、謝して之を閱すれば則ち僕が老爺に寄するの書也。情狀顯然、一歡一悲爲さん所を知らず。僕が翁世を辭してより以降十六年、代つて其の封を開けば、則ち懇篤叮嚀、墨痕滑美、翁亦た靈あらば點頭怡悅せん。就て審にす足下齒髮衰謝すと雖、矍鑠壯健なるを、欣拊至祝す、指を屈して極めて知る稍々耳順に過ぐることを。相別れての後、僕が翁や平日動もすれば足下の爲に背語す。癸亥の秋、偶々對馬島の便風に附して詩を寄せて消息す、嘗て嘆ず相轉致すること無きかを。今歲幸に一封を投ずるときは則ち世間に在らず、嗚呼黃泉呼び起し難し、徒に僕等兄弟をして追懷を増さしむるのみ。往歲の詩中寫眞の事、其の言違はず、吾が邦の妙手、古川狩野常信以て之を圖し、僕が翁贊語を爲す者三四幅、或



は災に罹りて存せず、或は遠邦に在りて以て轉漕を缺く、法印常信齡古稀を超え幸に世に存す、新たに之をして畫かしめ、僕が翁の遺集より其の賛語を寫して翁に代つて書す。且つ三絶句を和して以て潮信に附す、其の事異なりと雖、理は則ち當さに然るべし、畫く所の顔貌昔在來聘の日と孰與れなるや、家人兒輩之を如何と謂はん。僕も亦た壯歳を超ふ、生平多病、齡未だ半百ならず、髮惟れ半ば白し、若し萍蓬を得るとも敢て昔年相見るの人に非ず、舉げて嘆ず可き哉、域殊に海濶く、書信又し難し、筆を拵つて悵然として思ひを復水重山に馳するのみ、亮昭不悉(原、漢文)

此去佳人歸不還。西邊望斷有無間。欲憑飛夢超千里。滄海隔雲雲隔山。

渭樹江雲難結隣。昔年一別只望塵。謝君馳意老吾老。壬戌來賓知幾人。

情實殊從使舶通。一封書信託悲風。可憐白鶴山房夢。孤月空懸日本東。

實に能く文字の上に情を盡くしてゐる。此れを滄浪の書翰に對照するに、共に尊き熱血が傾注され、遠く雲濤を隔て、國を異にしたる人の往復書とは思はれぬ程の親みが見える。殊に東郭の旅行は一箇年の久しきに亘つた、滄浪は如何に返書を待ちこがれたであらう。而して此の書翰を東郭より受取りし時、圖らずも鶴山の死を聞いて、彼れは六十一の老眼に露なす哀涙を浮べたに相違ない。併し三十年前、彼れが「大に鶴山の風度有り、異日必ず能く家聲を繼がん」と賞め稱へたる當時十三歳なりし可憐の小童、名は二郎、即ち今は桃源と號し、父鶴山の箕裘を繼ぎ、幕府の儒官として名譽の地位を占め居れるが、父に代りて斯くも懇篤なる返書を寄

せたるについては、大に吾が眼識の炯かなりしを頗笑むと同時に、副使李彥綱が二郎を目して「鸞鳳の雛」なりと云ひし事をも亦た憶ひ出したであらう。彼れは此の返書を得て深く情誼に感じ、五律一首を賦し、且つ小序を作りて今昔の概要を叙したのは、彼れが遺稿『柳下集』に載せてある。即ち

壬戌余從通信使赴日本。在館中日。與野鶴山唱酬。有畫師常信在傍。酒酣於燈下墨筆畫余小

像。余遂持歸。越明年秋。鶴山寄余三十韻詩。有同志多修契。歸仁爭寫真之句。下註曰。別後

諸人屢畫公像。使僕作賛語故云。至辛卯。日本復請我使。槎路載通。余乃爲書寄鶴山。以謝前

詩之意。而仍求其所畫像一本。則鶴山已死。其子沂答書曰。父嘗使常信爲公寫真四五幅。今見

災不存。或在遠方急難取來。常信老無恙在。即使之更寫一大幅。而賛語則從遺集中得之。代筆

其傍云。賛語即五言短律。輒次其韻仍以記之。

不必論前後。分明只此人。別來猶記面。照處即傳神。夢去三山月。書回萬里春。丈夫心似日。胡越亦交親。

と云ふのである、彼れが鶴山に寄せた書翰も亦た『柳下集』に「與日本野鶴山書」と題して載せてゐる。此の『柳下集』は、彼れが死する前年、病床に在つて、一生涯に於ける多數の詩文中より、得意の作だけを精選したものであるが、他の人々が日本に行きし事さへ有耶無耶に附して居るのとは違ひ、何の忌憚も無く、鶴山に寄せたる書翰や、桃源よりの返書等を公にしたのは、前の詩に謂ふ所の「丈夫心似日」で、彼れが日本に對する交情は、至誠を以て始終を一貫した。而して一方、日本に於ては、正徳二年五月、即ち東郭等が日本より京城に歸着したる翌々月、早くも『鷄林唱和集』、『朝鮮人筆談』等を出版し、之に滄浪の「奉日本國野鶴山書」



と、桃源の「復朝鮮國滄浪洪老先生書」とを載せた程で、既に今より二百十餘年前、珍らしく亦慕はしき美談として、江湖に喧傳せられたものであつた。現に今日に於て之を見るも、實に内鮮融和上の模範と爲すべき美談である。融和と云ひ。親善と云ふも畢竟相互間に於ける至誠の誘徹に外ならぬ。言に表裏あり、行に陰陽ありて融和の出来べき筈は無い。滄浪の文名は朝鮮の多くの人に知られてゐる、然し其の美なる行爲を知る人は尠ない。これ此稿を草した所以である。

以下、鶴山に就て少しく附言する。彼れの本姓小野なるに因つて、自ら野鶴山と署したることを前に一言したが、彼れが其の伯父道生の事蹟を書きたる中に

人見氏の裔、參議小野篁に出づ。篁博學多才、當世に名あり、遣唐副使に充てらる。後ち事に忤らひ、數々貶せられ、下野足利邑に居る。故に其の子孫東國に蔓衍す。武藏國人見邑、其の末裔あり、邑を以て氏と爲す。

とあるを見ても、本姓小野、後ち人見と稱せし理由が明かである。尙ほ彼れは徳川時代の藏書家としても名を知られて居り、其の藏書の卷首には、何づれも、「小野節家藏書」及び「宜爾子孫」の二印を叮嚀に捺したといふ事は今も美談として傳はつてゐる。彼れが『本朝通鑑』の草本に就ては、近頃發刊された『足利學校貴重目書録』に詳記されてあるが、今より八十三年前、即ち天保十四年、廣瀬旭窓が足利に遊びたる紀行の中にも

續本朝通鑑草本横卷數十幅。字大七八分。林春齋門人。人見友元手書一百十卷。末有春齋跋曰。右自保元元至弘安十年。總五十五卷。令野友元草之。以後遂周覽。或以改正之。或以加補之。漸得成編。然猶不免闕疑焉。寛文戊申之夏。弘文院學士林恕以上六十一字。中略。横卷不便開閱。故久無披者。蠹囊堆粘。其所糊合。糊氣既盡。片片斷零。隨披隨散。余披之。璞助・龍太郎・一敬。弘原卷之。然前後易淆。殆不能給披。至二十四五幅。四子力竭發怨言。乃止。又人見氏所寄附。名臣言行錄。卷懷隨筆等十二種猶在焉。其他慶長元和以後諸侯及諸儒所寄進。數十百種。庫中所藏凡數千卷云々。

と云ふてゐる。現に朝鮮版として珍重せらるゝ同校の『名臣言行錄』は、鶴山が寄附したものであるまいか。由來同校は、鶴山の遠祖小野篁の創立と傳へられ、且つ彼れの食邑富田村西場も程近かつたので、同校とは大に關係を有つてゐた。而して彼れの遺物は曾孫求（雪江派の子）の時代となり、同校と西場の雲龍寺に寄附したとの事で、現に存すものは、學校に唐製の琴・朱舜水愛用の机・竹洞詩集・本朝通鑑の草本等、雲龍寺には人見氏傳（系圖入、六十八枚。綴一冊、求の編述）・竹洞詩文集二十二冊・桃源詩文集十二冊・雪江詩文集七冊・計四十一冊及び小野篁の眞蹟、徳川光圀より鶴山及び桃源に贈りし書狀があり殊に珍とすべきは門人であつた日出侯木下俊長の畫いた鶴山の肖像と、同じく佐賀侯鍋島綱茂の書いた詩箋が澤山藏せらるゝことである。同寺は人見氏歴代の招提所で、鶴山も亦た此處に葬られた。鶴山が幼より江戸城奥に入り、將軍の世子に近侍し、長じては林氏三代の業を翼けて幕府の文教に貢献し、其の名聲遠く朝鮮にまで傳播せしは既に叙上の如くであるが、鶴山と由緒深き此の富田村は、現に令名ある關屋（名は貞三郎）宮内次官の郷里たりと聞きて大に興味を感じたのである。次官は曾て朝鮮總督府學務局長として、新封土の文教上、顯著の功績を奏したのであつた。想ふに鶴山は吾が郷、人ありと地下に莞爾たるであらう。

鶴山の子孫は世々幕府の儒官と爲つたが、其の門弟にして最も名の顯はれてゐるのは、梁田蛻巖（名は邦美、字は景鸞）である。彼れは才識高遠、殊に詩を巧にし、新井白石、祇園南海等と交を結び、明石侯松平氏の學館を掌り、烈丈夫の風氣を有して世に覇儒と稱せられた。攝播地方に朱子學が盛んに行はれたのは斯人の功を多とすると共に、鶴山を忘れてはならぬ。



又前に述べた如く、鶴山は林氏と縁故最も深き者であるが、其の春齋が編したる『羅山先生詩集』の目次に、鶴山の一氏を金なりと下註し。詩中に『丙申孟陬十二日雨降、冠者金節友元來問及夜。春齋取其姓名。辨諸句頭。作絕句以戲謔之。友元次其韻報焉。函三亦同韻綴二章以示之。余亦賡載之。但改人見爲金節云爾』と題して

金蘭接與淡燈親。節似蒼筠受雪臻。友以文逢是高會。元由陽德有芳鄰。

と賦してゐるのを觀ると、彼れは一に姓を金と稱せし事が明かである。朝鮮の人と親んだなども此等に因るのではあるまいか、いづれにしても、其の一姓、金なる理由を調査したのであるが、未だ何等證據と爲すべき文書を發見せざるは遺憾の至りである。

尙ほ鶴山の爲に遺憾なるは、彼れが本姓小野にして、また野鶴山と稱せしより、彼れと時代を異にする小野鶴山と誤まれ、甚しきに至りては、輒近の刊行に係る儒學・哲學等の諸書に、後ちの小野鶴山のみを記して、彼れを没却してゐる事である。此の鶴山は、名は道熙、通稱平藏、又忠一郎、始め文關と號して。若林強齋の女婿(又姪とも云ふ)である。享保八年強齋の歿後、代りて京都なる望楠書院に徒を教へ、更に之を西依成齋に譲りて、寛保三年若狹小濱侯酒井氏の儒官と爲つた。殊に諸書に彼れを豊後日出の人と記してあり、人見鶴山も亦た日出侯と關係ある所から、一層誤られたものと想ふ。併し予は日出に就て親しく調べたが、遂に同地には斯る人の無かつた事を確め得た。(大正十四年十一月稿)

附言、本稿人見鶴山に關する調査に就ては、立川文友(豊後日出)・山口甚四郎(下野足利)・高山英明(豊後大分)・安東貞一郎(京諸氏)の援助を蒙りし事多し、茲に録して感謝の意を表す。

## 朝鮮人を祖先とせる

### 熊本の碩學高本紫溟

『天地正大の氣、粹然として神州に鍾まり、發して萬朶の櫻と爲り、衆芳與に儔し難し』と藤田東湖は歌ひ。

『東方の各種世皆推す、海外何ぞ曾て一枝を見ん、我邦人品の美を知らんと欲せば、溫而玉の如し此花の姿』と關雪江が吟せし如く我が日本は昔より櫻を國の精華としたる故之を題詠して、感興を寄せたる和歌の數は幾億萬首あるか到底知り得ることも出来ない。其の秀逸の作として世に傳誦せらるゝものゝみにても亦た甚だ夥しい。中に就て或學者は左の二首を擧げて最も傑出せしものとしてゐるが、予は大に之を贊同する。

敷しまのやまとごころを人とはばあさひに匂ふやまさくらばな

もろこしも東風吹くたびに匂ふらしやまと島根の花のさかりは

扱、此の二首を對照するに、前者は日本人の樂天的性質をあらはしたもので、消極的なる退守の節概があり。後者は之に反し、積極的にして勇往邁進、嚮ふ所敵なきが如きの氣勢を示して居り、又遠く廣く域外までも渾然融和すべき意も含んでゐる。而して前者は本居宣長の詠として人口に膾炙せるものたるは言ふまでも無く、後者は肥後熊本の大儒にして且つ國學者たりし高本紫溟、一に李順と稱せし人の作であるが、前者程世に知られて居らぬのは寔に遺憾とせねばならぬ。今や我が皇威八紘に輝き、益々萬邦の景仰を受くる所となつた、紫溟が僅々三十一の假名文字上に、斯くも雄大に進取の氣象を言明したるは、實に卓見にして、其の偉人たり



しは想像に難くない。而して其の姓名高本紫溟といへば日本人であり、一に李順と稱せしよりすれば朝鮮人の如くにも亦た看らるゝが此れは祖先崇拜の至誠より出でたるもので、次に述ぶる家系を觀れば明かである。

今を距る三百三十餘年前、文祿の壬辰、豊太閤の朝鮮役に、一方の重鎮たりし、細川忠興は大軍を率ゐて處々に轉戦したるが、其の部將なる南條元宅が、捕虜として日本に連れ歸りし中に、慶尙道仁同縣監李宗閑と云ふ人があつた。熊本に於ける舊記に、其の系は碧珍將軍李聽元に出づとせられてあるが、恐らく其の音韻を同くする李念言の事かと想ふ。『萬姓始祖編』に、碧珍(星州別號)李氏、始祖念言。新羅碧珍將軍、麗祖統合の時、其の子永を遣はし、率先して歸附す』といひ、『東國輿地勝覽』星州の名官の部に「(高麗)李念言。太祖の初、本府將軍と爲り、本城を守る。上、手詔を以て約し、金石の交を爲して曰く、百子千孫、此の心を改めざれと、念言、終始節を一にす。上命じて旁邑民口を賜ひ、以て其の丁口を添ひ、又鹽穀四千餘斛を賜はり以て之を賞す」とあるもの乃ち是れである。宗閑は細川氏の領地たる小倉に來りし以來、忠興の子なる忠利に優遇せられ、遂に其の恩に感じて、子慶宅を侯の家臣として徴に應せしめた、慶宅時に年八歳、侯は乃ち高麗、日本二邦の名を取りて、氏を高本と命じ、醫業を學ばしめ、年十二の時祿百石を賜ひ、其の後細川氏の肥後に移封せらるゝや、熊本城の二の丸に邸宅を賜はつた。今尙ほ大手南坂の西に慶宅坂と稱する處は、其の邸前なりと傳へらる。慶宅二十三歳、天草亂鎮撫の役に從つて負傷し、功に依りて祿を増され三百石を賜はり、遂に待醫と爲り、寛文五年病を以て歿した。其の子幸宅(後慶宅と改名)時に年十一で家を繼ぎ、元祿十四年、祿百石の増加あり、其の歿する時、子無かりし故、門弟京都の人加藤司權兵衛の子玄常をして其の家を嗣がしめ食祿二百石を賜

ひ、外様醫師を命せらる。玄常の子を玄碩と云つた。玄碩も亦た子無く、藩醫原田宗昆の六男を養つて其の嗣と爲した。是れ即ち紫溟である。

紫溟、名は順、字は子友、幼名傳八、後ち慶順と改め、又慶藏と云ひ晩年に至り敬藏と稱した。元文三年の生れである。其の實父原田宗昆は非凡の人であつた、池邊匡卿の筆に成る碑文の中に曰ふ

宗昆人と爲り溫雅にして、古聖賢の書を尊び、官暇また詩を賦し、琅々然として誦すべきものあり。其の祖先を祭るに至誠を盡し、其の子姪を誨るに懇到なり。上に事ふるには其の身を愛せず、下を使ふには甚だ嚴正なりき、弟子の就きて業を受くる者常に輻輳し、大名隆に興り、其の東都に往けば、東都の人請じて賓となし、また西都に至れば西都の人之を請じぬ云々。

紫溟は斯の如き家庭に生長した、幼時の教養も亦想ひ知るべきである。年十三にして高本氏に養はれた。熊本藩學の教授秋山玉山、常に彼れを愛して、火國一偉才を獲たりと誇稱した。一日玉山野遊を勧めしに、其の年極めて凶作で、庶民殆んど食物さへ無き時なれば、紫溟は之を辭するに和歌を以てした。

葛根ほる岡のおきなのくるしみも知らずや人のあそびゆくらん。

玉山之を見て黯然涙を催ふし、遂に其の遊行を止めたとの事である、紫溟時に年十六であつた。

紫溟夙に城市の喧噪を厭ひ、山林の靜寂を愛し、年二十五六の時、遂に熊本を距る東方十餘里の阿蘇山中に隱遯した。大宮司惟典、素より其の名を知りし爲め、喜び迎へて賓師となした。紫溟乃ち阿蘇氏に乞ひて茅屋を結び、萬松廬と名づけ、獨り木石と伍し、書卷を繙き、刻苦精勵、大に造詣する所があつた。明和四年、養

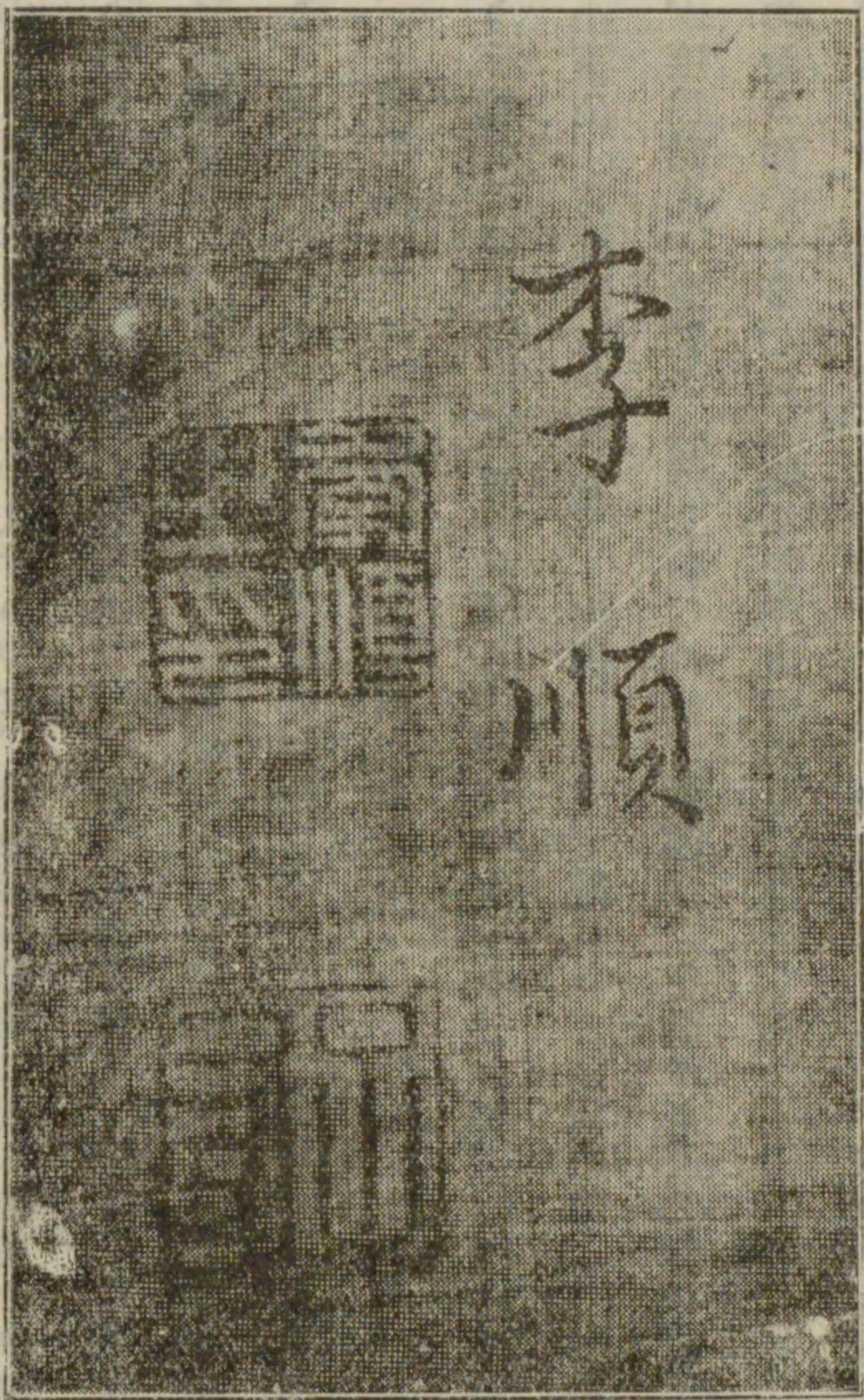


父を碩歿せしを以て、熊本に出で、家を襲ぎ、外様醫師となり、祿二百石を承けたるも、厭世の念は熄むに至らず、再び山中に返り來りて廬に居ること數年に及んだ。

然るに紫溟をして長く山中に隱遯するを容さなかつたのは、細川氏中興の名君として譽高き重賢であつた。侯、英明の資、

銳意治を圖り、有司其人を得て徳政を施かんとし、爲に野に遺賢無きまでに至り、紫溟も亦た其の召に應じて熊本に入

欲して職に就き、風儀規律を革正し、居ること二年、衆生をして其の徳に服せしむるに至つた。遂に擇ばれて世子治年の近習監と爲り、江戸に上り、又二年にして歸國し館の訓導に復し、天明八年八月には助教と爲り、同十月教授に榮進し、祿を増されて三百石を食むに至る、時に其齡五十有二であつた。由來、熊本の時習館



紫溟の遠縁の自署と印影  
(紫溟の遠縁の自署と印影、直堀京在な縁遠の溟紫、す影撮りよ幅書藏所氏喜)

つた。侯は即ち彼れが醫を改めて儒者に列し、藩學時習館の訓導を命せられた。彼れ是に於て乎飄然舊志を抛ち、一意教化を稗けむと

は、九州に於ける藩學の嚆矢で、文教の中心である。其の初代の教授秋山玉山、二代の教授藪孤山は、共に名聲天下に噴々たるものであつた。紫溟は乃ち三代の教授として其の重任に就く、實に盛譽と謂はざるを得ぬ。爾來彼れは學館に盡瘁し、且又藩政を啓沃し、藩主の禮遇益々厚く、祿六百石を賜はるに至り、老衰に及びて、幾たびか、職を辭せんと欲せしも允されず、文化十年十二月享年七十六を以て歿し、熊本本妙寺の塋域に葬むられた。

肥後に於ける諸種の文獻を観るに、彼れを尊稱して、いづれも李先生と云うてゐる彼れ自身も亦た紫溟と書さしは少れであつて、多くは李順と署してゐる。是れ言ふまでもなく、祖先崇拜の至誠より出でたるもので、之を畏敬し、之を仰慕し、而して系圖を絶やさず、祭祀を續けると云ふ念慮が無ければ李氏を稱する理由はない。それも我が生家にあらずして養家、養家としても

祖先朝鮮國李宗閑高本氏と稱す——一代慶宅後慶宅と改む(以上朝鮮の血統)——三代玄常實加藤司權兵衛男——四代玄碩——五代順實田原宗昆六男

の如く、家名こそ繼ぎたれ、全く血縁の繋からざる彼れが、朝鮮人たる祖先の姓李氏を稱せし事は、洵に奇特の志であつて千古の美談と謂はねばならぬ。然るに或人は、彼れが李氏と稱せしことに就て曰ふ、當時日本の儒者は、支那や朝鮮を文教の先進國として畏敬した、故に彼れは李氏の姓を假りて名を博せんとせしにはあらざるやと、此れ大なる誤りである。彼れは識見高明、學問醇正、行爲最も謹嚴を極めた、其の著たる『銀臺遺事』に



朝鮮のもの、我朝に聘使たらん用意どもを書きたる、『日觀要考』といふものに、我國の事を評して、「庠序もなく四禮もなし、良智有りてもいかで道をもわきまへしらん。兵農工商の外は醫を上とす、僧これに次ぐ儒を末とす」などあくまであざみたるは、我朝の風をしらぬえびすども、おのが國に引くらべて、口まかせて荒涼いひちらすとは思ふものから、さもいはぐいひぬべきふしなきにしもあらざるべし。然るに當國には學館を建て給ひける事は、さきに申したるが如し、前教授秋山定政、一名儀、字子羽、玉山と號す、高名の者也。(略中)寶曆十三年身まかりにければ、藪茂次郎といふものを教授となし給ふ、茂次郎名は愨、字は子原、朝陽・孤山など、號す。(略中)父を久左衛弘篤、號を慎庵といひし。同時に大塚丹左衛久成、號は孚齋、致仕して退野と云ひしもの有り。此二人を合せて程朱の學を研究し、すこぶる精奥を極めたり。(略中)今の世の習はし、儒者を家業として藥師・茶道にたぐへたるものとすれば、此國もしかなりけるを、儒の道なり、何條かたへの家業と定むる法有るべきとて、武士も文任になし、文儒も武儒に通じて用ひ給ふ。斯くいへば、をこがましきなれども僅に一國の家中に、かばかり儒道をもてなし給ひたる事を、朝鮮のゑびすどもにいらせてひげ口ふたがまほし。

とあるにても、朝鮮の人なりとして何等差別なく畏敬したのでは無い。彼れの李氏を稱とせしは全く祖先崇拜の意に外ならぬのであつた。而して其の時代の朝鮮は、日本を呼びて蠻夷と爲し、文學なく禮儀なきものとして輕侮せしことは確に彼れが言の如くである。之に對して喝破したのは當然と云はねばならぬ。又此の文に由て、肥後の學政が、如何に隆盛に、如何に整備せしものでありしかも窺はれる。

紫溟の人と爲りに就ては、角田九華の『續近世叢語』に能く之を言ひ盡してゐる故、左に抄録する。

紫溟詩律に精し、子弟の學或は固陋に陥らむことを憂ひ、之に詩を作るを教ふ。之に於て、一時後進、大に詩に興る者有り、數年にして助教と爲り、遂に藪孤山に代つて教授に昇る。時に紫溟年五十有餘、精力絶倫、尙猶ほ學に勉め、日に學館に赴き、諸生と對し講習し、多く昏暮に至るも、少しも倦色なし。(略中)晩に愈々伊洛の學を研究し、其の精蘊を極む、人と爲り沈毅溫恭、誨ふるに、雅筋を尙び、務めて過高を抑ふ。國を憂ふること家の如く、家を治むること儉素にして、人の急を救ふに、己れの有亡を問はず。進士の類を獎まし、人の美を成すを好む。家老諮詢する所あれば、則ち知りて言はざるは無し。國に災祥有れば、則ち其の當さに恐懼修省すべきを上言して曰く、我が職當さに此の如くなすべきなりと云々。彼れは、儒を以て一代の泰斗と仰がれ殊に朝鮮李退溪の學を尊信したる藪孤山の後を襲ぎて教授と爲り、其の德望甚だ大なりしを以て觀れば、漢學の造詣宏博なりしは勿論であるが、漢學隆盛の餘弊として、國典舊記の措いて顧みられず、遂には國體の尊嚴を忘れて、外慕自屈の陋習に陥る者あらむを憂ひ、漢學を専らとして教授したる時習館の課程中に、國學の講座を設けむことを建議すること屢々であつた。併し當時の有司は其の議を容れなかつたので、已むを得ず、課程講習後、其の教室に有志の徒を集めて、古事記・日本記・律令等の書を講じ、以て尊王の説を鼓吹した。之より推しても亦た、紫溟が李氏を稱としたのは、朝鮮人なる故ではなく、祖先崇拜であることが證せられる。

紫溟が國體の尊嚴と皇道の正大なるを鼓吹するの意は、斯くも切なる上よりして、大に伊勢なる本居宣長の



學風を慕ひ、之に就て斯道に心を致さむと思ひしも、身は藩學の教授として學政を掌り、國を離るゝ能はざる爲め、乃ち門下の高足たる長瀬眞幸を奨勵して伊勢に遊學せしめた。眞幸は寛政五年と八年とに同地に至り、皇朝古典の正説を聴き大に發明する所があつた。其の二度目の行を送りし紫溟の文は、義理公明、詞章溫雅、痛く時弊を論究したものであつた。其の中に

掛卷くもかしこく御代々々の 天皇、神ながら其の同じきを知ろし召して、外國の事をも、執るべきを取り給ひ、又其の異なるを知ろし召して、こゝには用ゐまじきをば用ゐ給はざりき。しかれこそ、天津空の隔てなきがごと、下つ國の境分れしごと、かたつかたつならず、わいだめなきにしもあらずして、千足の名に負ひ、萬つ満ち足らはして、めでたしともめでたき御國にはあなれ。然れば物學びせむ輩、唐の文を讀みては、同じき道の理を深く極め、御國の書を見ては、異なる形と物とをつばらに考へぬべきものになん。大御國のふみの内にしも、古事記らを見ては、いにしへの代のかたちを知り。(古事記、日本紀のたくひをいふ。からの書經、春秋などのこと。)歌をあつめたるを見ては、其の世の人の心ことばを知り、(萬葉集のたくひ、か) 律令格式などを見ては、おほやけのみさだめを知り。(からの三禮などと) ぞをもとにして、國の政をも家のわざをも、とりおこなふべきものになん。からの古へ、孔子の言葉にも、吾れは周に従ふとぞあなる、からは主定まらず、夏・殷・周などとして、しばしかはれり、其れすら國內の人は、かにもかくにも世のさたに従ふならひなれば、孔子も周の代の人なるからに、夏・殷の禮をも學び知れるども、そは用ゐずして、周の禮にしたがふとなむ。

抑も大御國は、天津日嗣のみさかえ、天地と共に窮りなくましゝて、ときはにかきはに、つがの木いやつぎしにきこしをす、大御國にしあれば、大御門のみたをば、天雲のむかふす極み、青人草のあらんかぎり、畏こみつゝし守らざらめや、物學びするともがら、そをしもいかで考へざらむ。

と云うてあるのを觀ても、全文の如何を窺ひ得らるゝ。眞幸は途を京都に取り、留まること數旬であつたが、掖庭に出入する親知の人を経て、秋宮の御覽に供し奉りしを、一日 天皇掖庭に入らせ給ひ、此文を觀覽ありて、感賞ありし事に就いては、『續近世叢語』にも次の如く書いてある。

李紫溟、國文及び歌を善くす、寛政中、其の作る所の國文、傳りて禁掖に入る。天皇顧みて侍臣に謂て曰く、圖らざりき、田舎能く斯の珍を出す。肥人以て榮と爲す。紫溟因つて自ら田舎珍夫と號すと云ふ。寛政九年の春、紫溟年方さに六十、眞幸を伴ひ京畿を巡遊し、遂に伊勢に至り、本居宣長を訪ひ、師弟の約を結んだ、宣長は時に六十八歳であつた。

是より先き、寛政四年、勤王の士、高山彦九郎正之西遊して熊本に来るや、紫溟は之を迎へて大に喜び、常に其の家に宿せしめたる事は、當年の彼が日記に明かである。

寛政四千子歳、自神武元年、二千四百五十三年、馬齡五十五

正月二日、高山彦九郎來宿○四日、夜過和田氏、彦九宿○五日、夜過辛島氏、彦九宿○六日、過小原氏、

彦九遊蓮臺寺、夜歸宿○七日、宴親戚于草堂、彦九與焉、是夜、彦九過佐久間角助○八日、與彦九等、遊柏

原氏別業、夜彦九來宿、彦九郎姓平、名正之、字仲繩○九日、彦九赴富田大淵○十日、彦九來、島田嘉津



次、不破萬平會之、彦九遂宿○十一日、彦九返孤山塾○十二日、節分、有風疾、彦九來宿、不復記○二月六日、高山伸繩之金海山、森周藏偕○九日、高山生還自金海山○二十三日、高山彦九郎又來、告別赴薩、送之長六橋、彦九郎詠、丈夫のたびにしあればそ、かしと思へど見ゆる人の倂○七月二十八日、高山彦九郎(正之仲繩 號赤城)自豊之岡城至、云、將觀寒火于松橋、酌未至醉而去○八月朔、朝賀、夜仲繩辭去、而之山鹿、これ彦九郎に關する記事のみを抜抄したものであるが、尙ほ傳ふる所に由れば、八月十五夜の月明に際し、彦九郎慨然として、去年の今夜、京都に於て、管絃の御宴に陪したるを懐ひ出し、頻りに落涙せしが、紫溟之を見て、

去年の今日くも井にき、し琴の音をやま松風のさぞしのぶらん  
と詠みたりしに、彦九郎は直ちに之に和して

忍ぶてふことの葉うれし筑紫にもみやこをしたふ人のありとは

と詠じたりとの事であるが、其の意氣投合、俱に皇道の不振を嘆じ、時勢を慨せしことは想像に難くない。而して彼れの日記を見て感すべきは、毎卷の上は書きに、必ず「自神武帝元年二千何百何年」と記せしことである。此等の些事にも亦た彼れが皇室を尊び、國體を重んじたる一斑を窺はれる。今日年賀狀に西曆を書して新らしがり、國體を等閑に附する者などには、此の日記の一片を煎じて飲ませたいものである。

紫溟が名望は、營に肥後藩のみに止まらなかつた、四國・中國・京・阪、又は奥羽に及び、千里を遠しとせずして其の門を叩いた者は甚だ多い。而して彼れに最も深く親灸して教を受けたるのは辛島鹽井と、和田子成

とであつた、彼れが老いて病みたる時も、常に側に在りて藥餌の勞を執つたのは此の二人である。されば彼れは喜びて、古詩一篇を作りて其芳志を謝した。

二子執古道。日夜不離傍。豈營交友誼。湯藥亦必嘗。自慚衰朽質。無以答寵光。憑君尙能起。風詠逐魯狂。

紫溟の死後、時習館四代の教授と爲つたのは此の鹽井である。鹽井の事に就き、『續近世叢語』及び山陽の父なる頼春水の『師友錄』より少しく抄録する。

辛島鹽井、名は憲、一名知雄、字は伯彝、熊本藩の人、幼にして聰悟、稍々長じて學に入る、精苦比無し。天明丙午、府學訓導に擢んでらる、時に父青溪、尙ほ強駛にして訓導たり。是に於て父子同僚、藩人艶稱す、寛政壬子、江都にゆき世子に伴讀す。享和壬戌、大府命じて經を昌平學に説かしむ、藩臣にして斯の遷に膺る者三兩輩に過ぎず、人以て榮と爲す。文化甲子助教に遷り、尋で教授に陞る。夙に程朱を確信し、又博く史乘・稗説に涉り、好んで詩を作る。風骨老蒼、晚歲名聲藉甚、來りて業を受くる者多し、

天保己亥歿す、年八十六。(續近世叢語)

辛島憲、字は伯彝、鹽井と號し、才藏と稱す、熊府嚮きに數士厚あり教授と爲る。士厚の病發するに及び、高本敬藏教授と爲り、伯彝及び大城文卿助教と爲ると云ふ。薩州赤崎彦禮、嘗て熊本に遊び、雅に伯彝を識れり、云く、才藏の才、其の名に負むかすと、余同じく江戸に祇役すること兩三次、交道最も密な

り(師友錄)



予は昨年六月、熊本に遊び、本妙寺境内なる紫溟の墓を弔つた。墓は清正公廟に上る俗稱胸突石段ムネツキイシノセの下より右に折れ、上人墓と云ふ所に向ふ中途に在つて、墓石には『府學教授紫溟先生李君之墓』の一行十二字の外には一字の彫刻も無かつた。鹽井の作りし碑銘は肥後の文獻に残つゝあるが、墓石には刻せなかつたものと見ゆる。併し高本とせずして、李君と刻されてあるのは、彼れが朝鮮人を家祖として尊びし至誠を、不朽に傳ふる者たる事を深く感じたのであつた。況んや朝鮮人たる日遙上人の建立に係る本妙寺に、此の墓の在るのは、佛氏の所謂因縁ではないかと思つたのである。當日予は墓前に捧ぐるに一詩を以てした。

鳥語荒墳寂不譁。清涼如水綠陰遮。姓常署李尊家祖。園半栽櫻重國華。壺墅風流文藻美。松廬隱迹世情賒。焚香我自朝鮮至。往事回頭感益加。

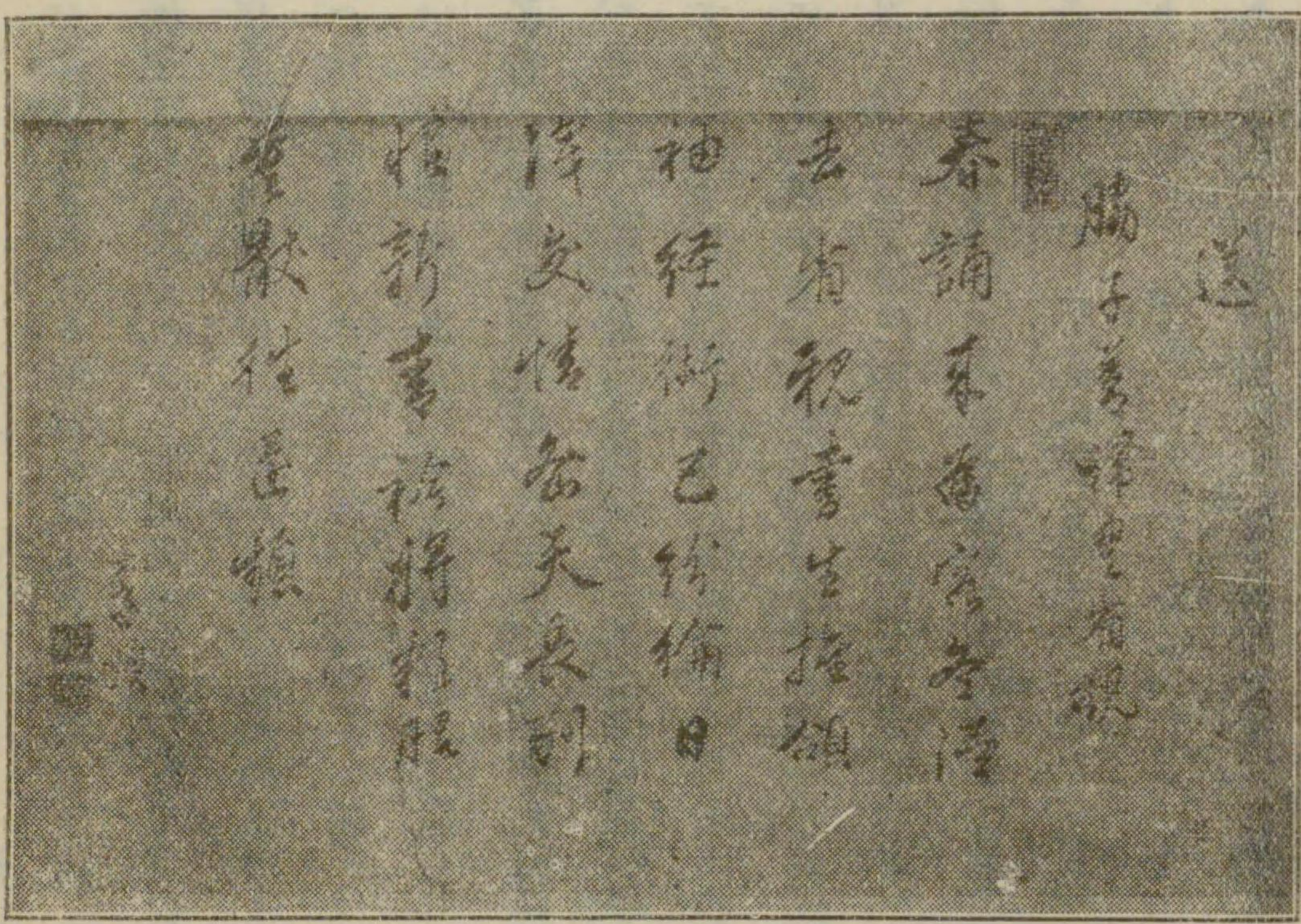
詩はもとより拙であるが、只實感を叙するを旨とした。姓常署李の句は、本稿に主として言ひ居るもので、園半栽櫻の句は、熊本の國學者として世に名を知られし、中島廣足の『檀園文集』に據つたのである。

余が里なる高本順の翁は、今は昔の人なる。其遠祖は、言さへく韓國人て、姓を李とぞいふなる。さるは豐國神、韓國をことむけまし、時。加藤清正ぬしまつろひて、はやく大御國に渡り、我が肥の道の後の國に往つきて、生の子の末々は、やがて我殿ワガタになむ仕へられける。斯くて順の翁は、若き時より書讀む事を好まれしかば、そのかみ漢學の博士トクサに任て、教授といへる職になむす、まれける。かれ其學びに秀られたる事は、更に云べくもあらず。我敷島の日本心さへ、いみじかりし人にて、なりところの庭に、あまたの櫻をうるおほして、大御國の花のうらはしきを、いたくめでよろこばれける、其心の風雅びたること、おしは

かりしるべし云々檀園文集

壺墅風流の句は、紫溟の別荘が、熊本の壺川に在つたのを指した。鹽井の後を襲ぎ、時習館五代の教授と爲りし近藤淡泉の筆に成りし、『紫溟先生遺稿序』の中に

嘗て府學に祭酒たるの日、四時の佳景、花柳雪月以て賞す可きに遇ふ毎に、館内諸儒を拉して以て壺川別業に遊ぶ、而して余も亦た隨ふ。滿座皆詩を善くし、觴を引き興に乗じ



紫溟の筆蹟

篇を連ね讀を累ぬ。風雲月露、燦爛掬す可し。最後李、子蒼、顔白髮、怡然として筆を援りて詩を書す、雄渾偉麗宏暢幽冲、其の意の向ふ所、觀る者歎服し、皆其の作を焚かんと欲す。既にして一談一笑、五更の鳴鐘を知らず、大率以て常と爲す也。とあるものが其れである。松廬隱迹の句は、阿蘇山中の萬松廬のことを云うたので茲に再説するまでも



ない。

予はなほ熊本に於て、彼れが李順と著したる筆蹟を藏する人の多きを聞き、之を覽んと欲したが、滞在僅に兩日奔走に暇無くして、遂に機を逸した。それから鹿兒島・宮崎を経て、大分に詩友高山春浦を訪ひしに、君が予の遠來を慰めんとして蒐め居られし書畫の中に、李順と著せる筆蹟ありしを見て、予は覺えず歡呼雀躍した。殊に其れは豊後の碩儒脇愚山に贈りたる詩であつた、愚山と紫溟との關係は、兩人の事蹟中、共に閑却すべからざるもので、實に此の詩幅は珍中の珍品である所から撮影を乞うて齎らし歸り茲に掲載することゝした。

脇愚山、名は長之、字は子善、豊後速見郡小浦の人。少にして學を好み、詞章を能くす。長ずるに及びて、器局沈厚、内行淳至、母に事へて孝を以て聞ゆ。三浦梅園に従ひ學ぶ。年二十一、肥後に遊び藪孤山に學ぶ。既にして又東して大阪にゆき、中井竹山の門に入る、竹山其の才器を愛し、敢て弟子を以て之を視ず、居ること一年、西に還り、帷を下して教授す、心理の學を究む、郡中稱して眞君子と曰ふ。寛政十年、肥後侯に應聘し、訓導と爲る、月俸三十口、時に年三十五、熊本、儒士を聘召する愚山を以て始めと爲す。是に由つて衆口紛紜、文を爲くりて誹議する者有るに至る。愚山之を聞き憐ばず、母も亦た郷を思ふて己まざるを以て、居ること一年にして遂に職を辭す。侯命じて鶴崎に居らしむ、鶴崎は豊後に屬し、小浦に密邇するを以てなり。

右は『續近世叢語』の中より、愚山の熊本に出入したる一節を抜抄したるに過ぎないが、此の出入に關しては、一切紫溟が斡旋したる事は、肥豊の諸文獻の證する所である。「肥後に遊び藪孤山に學ぶ」とあるも、或識者は、孤山よりも先づ紫溟に就きたりと云ひ、愚山が勤王の志を立て、高山彦九郎に交つたのも、紫溟の紹介に由ると云うて居る。而して愚山の門下に帆足萬里を出したるより見ても、愚山は實踐躬行の人であつて、偏狹固陋の道學先生で無かつたことは明かである。尙紫溟と愚山の關係に就ては書くべき事も尠くないが、茲には之を省略する。

紫溟の著書は、明治十年の役、熊本全市兵燹に罹り、高本家の什寶書籍、悉く灰燼に歸せるため、残れるものは極めて尠ないとの事である、其の最も名の顯れてゐるのは『銀臺遺事』四卷、『同附録』一卷で、藩命を受け治國の美蹟を記したものである。是れは嘗に肥後の藩政を知るの料たるのみならず、大に經國濟民の參考、修養上の模範としても讀むべきもので、其他二三を掲ぐれば次の如くである。

(宇野東風氏著「紫溟先生略傳」に據る)

席上問答一卷 人の學問するに、五倫五常の道を研究するは、徒らに空理を談じ、博學を衒ふものにあらず、實行を主とすべきを論じ、又傍ら詩文を學ばしめて、溫柔敦厚の品性を養成するの益あるを辯じたり。

字音說一卷 漢字音韻のことを辯せしものなり。

阿蘇振一卷 土地の古俗を見るべきものなり、蓋し先生退隱中の作なるべし。

鈔子考一冊 寛政中、藩廳紙幣改造の儀あり、歴代の鈔の沿革を諮問せられたるに應へられたるものにて、諸國の錢法、及び預札等を考へたるものなり、又是れに附する書一通あり、當時の紙幣粗造にして贋造者あり直ちに之れを處罰するの酷なるを論じ、天地間精英なる金銀の代用をなす紙幣なればとて、先づ



用紙の漉方を精巧にして贗作し得ざらしむることより、現行紙幣と引替方法に至るまで、詳細に論せられたるものなり、以て其の經濟の理に明らかなりしを知るべきなり。

而して其の詩集十餘卷、及び歌集一卷は共に『肥後文獻叢書』に收められてある。歌集の編者、宇野東風翁の序に『佐久間象山、あるとき櫻の賦を作りて、天覽に入るを得たり。後象山遺集成るに當りて、其の友中村敬宇これに題して、匹夫の著作にして、天覽を蒙るもの。前に佐川田の國歌あり、後に象山の此の賦あり、三百年間唯二人のみ、無上の榮と謂ふべしといへり。實に無上の光榮といふべし。されども此の榮を蒙りしもの、只此の二人のみにあらず、我が高本順大人もまた其の光榮を蒙りし人なり』と云ひ、又『さて大人の身、西陲にあり、且つその名、儒を以て顯はれ、國風は其の餘技とせられしをかば、かばかりの榮譽をも知るもの稀にして、世に埋はてにたるものならんかし、さらば彼をして唯二人のみとの語は發せしめざりしものを、大人は素より鴻儒にして國學者にあらず、されども我が熊本を中心として、皇典を究め國風を詠するもの、今猶ほ盛なるは、全く大人の誘掖によるものなり』と云ふてあるのは、實に紫溟に對する好論贊と稱すべきものである。

(大正十五年一月稿)

### 李退溪の學說を研修せる

## 薩摩の大儒赤崎海門

徳川家康、好運に乗じて天下を統一し、平和政策を以て封建制度を樹て、それが支持上、道德の力を必要と爲し、儒學の復興を圖りしより以來、子孫世々其の志を繼ぎ、儒學は益々隆盛なるに至つた。従つて諸侯も亦たその旨を體して儒學に意を注ぎ、政績の美を稱せられたるものに、水戸の義公德川光圀・岡山の烈公池田光政・會津の土津公保科正之・加賀の松雲公前田綱紀・熊本の銀臺公細川重賢・米澤の鷹山公上杉治憲等があり。又諸藩いづれも學館を建て、儒學の振興を競ふに至り、名古屋の明倫堂・水戸及び佐賀の弘道館・熊本の時習館・鹿兒島の造士館・仙臺の養賢堂・會津の日新館・萩の明倫館・津の有造館等は、其の錚々たるものであつた。殊に熊本の時習館は、武勇を以て誇りとせし九州に於ける學館の嚆矢であり、又名君としての細川重賢と碩儒としての秋山玉山との創立に係るに由り、其の名聲は四方に喧傳せられた。而して先づ之を模範として、新設せられたのは鹿兒島の造士館であつた。乃ち舊熊本藩の「學校方格帳」明和元年六月の部に次の記事がある。

- 一、學校御取建に付、薩州様御留守居より江戸御留守居へ問合に付返答之趣左に記申向候事。
- 一、於國許、文學並武藝之稽古所被申付置、士席以上之子弟罷出致稽古候事。
- 一、武藝は徒士以下家中之家來等も時刻を分ち稽古罷出候事。



一、文學は徒士以下家中之家來並町在之者たり共、拔群秀才之者は出席差免候事。

尤も薩摩は、朱熹新註の經書を始て我國に弘めたる僧桂庵の居りし所で、桂庵より月・落・一・翁・文・之・如・竹と系統を傳へ言は、我國に於ける程朱學發源の地であるが、由來武を以て風を成したる國なる故、遂に文教は振はなかつた。島津氏十九代の光久、時勢の推移に鑑み、尙武の餘弊は往々粗野と爲り殺伐と爲るを懼れ、學館建設のことを圖つたが、遂に其の志を果さずして薨じ、二十五代重豪の時に至つて漸く着手して、之が竣工を奏したのは襲封の十九年、安永二年である。

重豪は、豪邁果斷の人であつた。營に學館の創立のみでなく、古來殆んど他封人の入境を禁遏したる如き薩摩の別天地に向つて「一、言語、行跡、髮形等の儀、相直し候様に可致」。「一、御國許温泉へ他國人參候儀不苦候」。「一、諸事指南に、女にても他國より參候儀不苦候」。「一、花火、船遊等致候儀不苦候」と云ふ新令を發して、其の習俗を一變した。

造士館創立當時、其の教授(今の)を山本秋水に命せられ、補佐としての句讀師に赤崎海門が擧げられた。秋水、又小醉翁と號し、名は正誼、山田君豹に學び、程朱の學を修め、博く經史に通じ、最も春秋左氏傳に精はしく、人皆左傳々藏と呼んだ、傳藏は乃ち其の通稱である。師なる君豹、字は文蔚、月洲と號し、江戸に出て河口靜齋に學び、歸藩して重豪の侍讀と爲つた。靜齋は室鳩巢の高第であり、鳩巢は木下順庵に教を受けし程朱學の醇儒たるは言ふまでも無い。秋水の先輩たる兒玉圖南、愛甲季平も亦た鳩巢に學んだ。故に薩摩の學統は鳩巢より出でたるものと云つて宜い。次に赤崎海門の事であるが、彼れも亦た教を君豹に受けた。本稿は主として彼を述ぶるに在るを以て、先づ古賀精里の筆に成りし彼れの碑文を掲げて其の一生の梗概を知るに供する。

薩儒有伴讀。曰赤崎君諱貞幹。意忠厚而辭溫和。其於養德善政之道。所益弘多。君本谷山郷士。初讀書於本田休兵衛宅。遂從諸先輩遊。命學曆法數年。爲演武場監門。講業造士館。進爲城下士。至是專攻經術焉。請遊肥後數士厚之門。天明元年召還爲造士館助教。四年列騎士。爲世子伴讀。及世子襲封。隔歲朝東。君輒從之。後轉數職。以伴讀從如初。八年爲記錄局長。寬政五年進歩卒將領。七年爲造士館教授。十二年從在東。幕旨講書學問所。藩恩擢比近臣長。於是爲長上郎職。不復從公還矣。享和二年罹疾。幕府賜銀幣以酬其勞。公屢使問疾。又加祿秩。以八月廿九日歿於邸。春秋六十四。塋於高輪大圓寺。君字彥禮。稱源助。別號海門。考曰治助君。諱貞居。母長倉氏。娶原口氏。早死。繼娶迫田氏。原口氏生貞一、稱源太郎。君稱人之善。若恐不及、待物謙恕。莫不心醉。文思清警。極其鍛鍊。而風神若出自然。每一篇就。覽者歎伏。有文稿若干卷。貞一爲藩學句讀師。聞疾星夜來侍。君取所書戒辭於枕中。手授之。然後不復省人事矣。早知疾之不治。安命待盡。或告以尙可爲。則正色曰。何見待之淺也。方困劇猶賦詩及國雅數首。皆飄々然有騷鸞凌景之意。遺令索余文表墓。余夙辱其知。義不可辭。系曰。

緡經弄翰多文具。恃以才識際隆遇。濬源可望濯流布。洗皇琴耳奏韻護。効用未盡造物妒。語短情長銘其墓。

此碑文の如く、海門は鹿兒島城外谷山の郷土である。由來薩摩は城下と城外の士とに尊卑の差別を爲す事甚



しかつた。海門が城外の士にして斯く重用せられしは、實に異數に屬するも、亦た彼れが卓越の學、非凡の才有りしを推測される。而して造士館の學統は、其の教授等の任命より見ても、徳川幕府の主義としたる朱子學を信奉したるは云ふまでも無いが其の創立の翌年

去年聖堂創建之意趣は、人々承知之前に候。いづれ學問は究理より段々知識を開發致事に候得は、程朱の學より外無他候。然處間には偽學の者も有之由相聞得不可然候。縦合表向程朱之學講候而も、心中實に崇尊之無心得候而は、面聖堂之祿を受、孔孟程朱之祭祀に預候心底、却而聖賢を致戲弄同前に而、其異莫大に候、依之講釋人は勿論其外入學之徒、實に程朱之正學を相崇、一切異説を不可交候、左候而學徒日に相進、其内相應之人才出來候はゞ、其者之應長所、向々へ可召仕候、就中從是は、おもに記録方唐學方には、聖堂方より相選可申付候間、至而出精之者、又は學問勤行共相長候者は、吟味之上、時々可申出候、乍此上、心中偽學之者於罷居は、是亦申出候様、係りの役々へ可申渡置候。

右之通此節於江戸被仰出候間、謹而承知仕、屹度可相守旨、聖堂方係之役々へ可申渡候、至而出精之者、又は學問勤行共相長候者は可申出、此上ながら偽學之者於有之は、是亦申出候様可申渡候(棟岡雜誌)と嚴達したるに據りても明かである。併し斯の如く造士館は創立せられ、漸次子弟の薰陶に努めしも、尙ほ大に革新の必要を認め、有司相議し、句讀師たる海門を熊本の碩儒藪孤山の許に遣はして、入門せしめ、兼ねて時習館に研修し、他藩の學風を觀察せしむるに決した。保守の習俗甚しかりし薩摩としては寔に稀有の事である。蓋し藩主重豪の決斷に出でたるは言ふまで無い。斯くて海門は、造士館創立より六年目、熊本に赴きて孤

山塾中の人となつた。其の事に就いては、舊熊本藩の『學校帳頭書』に

安政七年、十月十二日 薩州御家中之侍、赤崎源助儀、藪茂次郎門人に罷成候付、時習館之出席願之事

と書いてあり、又『藪氏家記』に次の如く云うてゐる。

薩藩の赤崎彦禮、來りて弟子たるを乞ふ。彦禮、先生より少きこと四歳、先生これを諾し、則ち鞍馬に跨り、手長槍を提げ、園圃を疾馳して以て瓜類を縱く。彦禮愕然たり。先生曰ふ、武臣の學、當さに這の裏より出で來るべしと。

彦禮、先生より少きこと四歳とあるが、其の時孤山は四十四歳故、海門は乃ち四十歳に當る。當時、孤山は秋山玉山の後を襲ぎ、時習館第二代の教授として聲望隆々たるものであつた。其の學の由る所は、彼れの友なる李順即ち高本紫溟の撰せる墓誌中に詳である。

初め順歳十五六、己に君と交はる、君順より長する三歳、未だ弱冠に及ばず、辭章俊麗、文章を業とする者及び能はざるなり。是を以て聲名藉々として起る。然れども是れ緒餘のみ。實は其の家學を主とし、程朱の教に由る。其の館職と爲るや、老師宿儒、大半學を異にす。君其の間に周旋し、未だ嘗て獨操を失はず、順未だ仕へざるや、問ふて曰く、君已教職と爲る、顧ふに必ず爲さんと欲する所あらん、順不敏と雖、願くは其の志を聞かんと。君曰く、吾が先人慎庵先生、孚齋(退野の別號)大塚先生と、皆程朱の道を信ず、吾れ伯兄と竊かに謂ふ、二先生學に於て所謂等差なきものなり。是を以て俱に二先生の道を唱へ、普ねく邦内に及ばさんのみと、教授たるに及んで正學果して行ふ。



孤山は斯の如く大塚退野を重んじた。退野は初め陽明の學を信じ、後ち朱子學に轉じた人である。彼れが朱子學に轉じたる動機は、朝鮮李退溪の著書を読み、基因する。故に彼れは退溪を以て朱子の替身なりとまで尊信した。而して孤山の父慎庵も亦た退野と志を同うしたる學者であつた。孤山は乃ち此の二人の遺訓を奉じ、朱子崇拜の念は、其の平素の起居動作にまであらはれた程である。

先生、日々疊舎に赴くや、必ず騎して出づ、例に榭西を馳すること凡そ再び。其の佩刀三尺餘、夏は則ち葛衣葛袴、柿漿に染むるものなり、冬服もこれに准ず。

先生、性赤色を愛す。二妾あり緋桃と曰ひ紅梅と曰ふ。平日佩ぶる所の刀裝、及び杖皆是れ。數年使ふる所の僕の名を丹助と曰ふ。是れ朱學を尙ぶの故なり。(藪氏家記)

孤山は此の如く赤色を愛した。赤崎海門の來學も亦た大に歓迎したのであらう。海門は熊本に留まること三年、其の才學は衆に推重せられた。而して其の歲月の間、同志と共に太宰府・佐賀・福岡にも遊んだ。辛島鹽井の『南溟堂歌』と題し。

鯤魚化我後。鵬翼擊我前。一擊長風掃溟海。六月九萬里青天。南溟豪宕龜夫子。文采風流西方美。日向長風發長嘯。春雲秋月暗江水。壯哉君家百尺堂。結構層々翼斯揚。高棟飛楫白日近。豐雲肥水挿彫梁。西望茫茫天地碧。十洲三島如咫尺。長風吹送徐福舟。驕潮鞭起秦皇石。是時夫子與逾豪。是時夫子歌逾高。笑迎吾黨宴堂上。右舉大白左紫鰲。吾黨狂生伊大素。自稱磊落無所遇。與君一見一悲歌。白石淒風生海樹。旁有赤君真絕倫。蒼髯碧眼七尺身。談笑如湧詩無敵。筆端風雨驅鬼神。其餘坐客皆僮僕。詞賦鏘々金玉

響。吁吾何幸趨下風。高山景行徒忻仰。君不見南溟高館南溟濱。能攀大翼更何人。(鹽井遺稿)

と賦したのは、海門等と相携へて、福岡の龜井道載を訪ねた時の作である。道載は南溟と號し、福岡に於て徂徠派の旗幟を翻へし、雄を一方に振つて居た。賦中、吾黨狂生伊大素。自稱磊落無所遇。の句は即ち失意詩人として名を知られたる伊形靈雨の事である。旁有赤君真絕倫。より筆端風雨驅鬼神。に至る二十八字は、是れ海門を云ふたもので、其の魁偉の容貌、快濶の氣風、宛然觀るが如くである。但、彼れが席上如何なる雄篇を作りしか、之を知るに由無きは寔に遺憾と言はねばならぬ。

賴山陽の父なる春水は、後年、鹽井及び海門と親交を結んだが、其の『師友錄』に次の如く書いてある。

辛島憲、字は伯彝、鹽井と號し、才藏と稱す。肥後熊本の士人、世々儒臣たり。熊本嚮きに數士厚あり教授と爲る。士厚の病發するに及び、高本敬藏教授と爲り伯彝及び大城文卿助教と爲ると云ふ。薩州赤崎彦禮、嘗て熊本に遊び、雅に伯彝を識れり、云く才藏の才、其の名に負むかすと。余同じく江戸に祇役すること兩三次、交通最も密なり。後ち柴先生の宅、壬戌赤壁の夕、諸名士を會す、伯彝も亦たこれに與かる。白河侯之を聞き、書を寄せて鱸を先生に遣くり、座客の詩歌を索む、先生伯彝をして之が記をつくらしむ、一時傳へ寫して以て雅舉と爲す。

海門と鹽井が師事したる孤山も亦た春水とは親しき間柄であつた。乃ち春水の『在津記事』の中に

余僑居を江戸港(江戸堀を云ふ)に移す、時に三月望後、因て春水南軒と號づく。余が僑居半は水に架して、庭砌無し、船版を架する方二丈許、幅廁の際、一二尺の地有り、藤を植ゆ、陽に向つて繁衍、花を著くる最も



早し、點茶家之を識り來り乞ふ者多し、剪裁吝まず、需めに隨つて之を與ふ。西村某盆栽海棠を余に遺くる、毎に花を著くる甚だ繁し。伊丹某綵石數斗を遺くる、之を船版の上に敷き、裝點相稱はしむ。肥後數士厚來り訪ひ海棠花下挑銀燭。不識春宵數刻過」の句有り、これより藤と海棠と詩に入る甚だ多し。と書いてあつて、『孤山遺稿』には「浪華訪頼千秋、時盆栽海棠盛開」と題し、次の詩が載せてある。

把酒江亭興若何。溶溶水色透欄多。忽迎雨後孤輪月。欲漱潮流萬里波。一見誰知如舊識。三杯休怪發狂歌。海棠花下挑銀燭。不覺春宵數刻過。

相對照して大に興味を覺ゆる、時は安永四年、孤山は四十一歳、春水は三十歳、海門が熊本に來りし四年前に相當する。

海門留學の功空しからず、造詣の深奥を極む、藩主聞きて大に喜び、遂に天明元年夏を以て、彼れに鹿兒島に歸還を命じた。當時師なる孤山は、送序を作り、懇ろに彼れに諭ぐる所があつた。

朱子、道の傳ふるを叙ふるや、上は伏羲堯舜より、下は二程先生に迄るまで極くせり。而して朱子は孔子を繼ぐ者也。則ち道統の朱子に至るや、猶ほ日の再び中するがごとし、於戲盛んなる哉。朱子より以降、大儒碩學、世々人に乏しからず。而かも道統の屬する所、則ち諸老先生も尙ほ之を言ひ難し。況んや末學後進、豈に得て論定する所ならんや。朱子の學、本朝に行はるゝや久し。而して吾が肥、西海に僻在するを以て、未だ其人有らず。大塚先生有り、奮然として興起し、乃ち始めて力を朱子の學に専らにし、既にして朝鮮退溪李氏の選ぶ所朱子書節要を見て之を讀み、超然として心に得る有り、喜んで曰く、是れ朱子の心を獲

たる者なりと、遂に其の書を尊信すること神明の如しと云ふ。先子繼いで興り、大塚先生に兄事し、心を同うし徳を同くし、遂に大に斯學を啓き、我後人を惠む。蓋し二君の學、朱子を宗とし、而して李氏に得る多しと爲すなり。故に大塚先生の言に曰く、勉齋の朱子を狀する、節要の朱子を盡くすに如かざる也と、先子も亦た曰く、百世の下、紫陽の緒を繼ぐ者は退溪其の人也と。二君の李氏を稱する此の如し、其れ必ず見る所有らむ。薩人赤君彦禮、來りて予に學ぶ、予を以て先子の子と爲すを以て也。彦禮齡強く學殖む、予待つに賓友を以てす。相與に學を講ずる三年、彦禮の學大に進む。而して予も亦た因つて以て自ら勵ますを得たり。今茲彦禮將に歸らんとす、予が一言を請ふ。予贈るに大塚先生の遺編を以てし、且つ之に告げて曰く、予が平生、子に告ぐる所の者は皆父師の言なり、唯予が口耳の學、顧ふに失する所多からむ。子歸りて予の言を憶ふ有らば則ち必ず諸れを遺編に質せ、而して合はざる者は之を棄て、可なり。且つ子、試みに二君の李氏を稱する所以を思へよや。

此の文や、言を極めて退溪と退野とを稱揚してゐるが、全く孤山は其の學説を尊信して衆に及ぼした。海門が三年の留學も、其の學説の研修に努力したのは言ふまでも無い。時習館の學風は其の後多少の推移が有つたにせよ、其の主とせし所は之に外ならなかつた。されば同館掉尾の偉人にして明治聖天子の師と仰がれたる元田東野が、其の御前進講に就て次の如く云うてゐるにも明かである。

程朱の學は朝鮮の李退溪に傳はり。退野先生その所撰の朱子書節要を讀み、超然として得る所あり。吾れ今退野の學を傳へて之を今上皇帝に奉せり。



海門の歸郷に際しては、送別の詩文は頗る多かつた。今左に其の二三を載録する。

送赤彦禮歸薩州

辛 島 鹽 井 伯彜

有親倚門閭。有兒在襁褓。遊子思家常悽々。他鄉歲月令人老。昨夜江風遠鶴鳴。斷雲孤月夜淒清。鶴頭戴來千里字。促君歸駕就歸程。北學三年遷喬木。俄見青雲生滿目。南圖六月逐鯤鵬。忽見長風騰大翼。相送離亭勸君酒。燕歌楚舞秦擊缶。歡笑既夜月盈樓。山水蒼々清且秀。憶昔江山凌紫氛。西肥北筑遠從君。手掬寶滿飛來雪。足踏高羅日暮雲。西過宰府唯芳草。千載蒼松橫古道。一悲一感淚漣々。野墟山廟縱幽討。夢寢緬懷彼一時。恨殺人生會有離。西窓夜雨西窓燭。欲話會遊無復期。念之綿々傷我魂。惜別頻傾白玉尊。夜鐘殘月留不任。驪駒一曲僕在門。

送薩人赤彦禮十首抄

大 城 壺 梁 文卿

偉哉彦禮。少任任俠。日慕儒雅。乃革其習。淺彼環堵。佔嗶居業。聖賢何人。庶幾可及。塵々彦禮。求道不息。乃遊四方。以博其識。是功是酬。風氣日陟。如玉斯溫。如蘭斯馨。自子之來。四歷裘葛。仰視參商。奈此膠漆。言饒河陽。泣其啜矣。願子勿忘。俾德兮蔚。

而して此等の作者は概ね肥後藩中の人才であるが、中に他國の人にして同學たる久留米の樺島石梁が在つて、彼れを送るに一文を以てした。

薩の州は南海の濱、狐狸の居る所、豺狼の嗥る所、蓋し葦爾たる一僻邑なり。島津氏の國となりてより、其の荆棘を翦り、其狐狸豺狼を驅り、以て其の封疆を開く、薩是に於てか始めて大なり。其後雄主代る興

り、國勢漸く張る。威武の振ふ所、諸侯懼れ、琉球賓す。薩是に於てか始めて彊し。然りと雖も。當時擾々として獨り武力を争ふのみ、文は未だ聞かざる也。今侯に及んで蓋し慨然として先王の治に志あり、是に於てか始めて學校を興し、先聖を崇め、首として山・赤二君を擧げ、其をして國中に矜式せしめて以て大に文德を行ひ、闔國蓋し靡然たりと云ふ。余歎じて曰く是れあるかな薩の世々隆んなる。古昔は釋騷の世、四海鼎沸し、諸侯刀争す。斯の時に當つて孰か三軍を張皇し、封域を彊大にし、武威を天下に耀かさんと欲せざるものあらんや。而かも幾くも薩に如くものあらんや。今や四字咸寧、疆場虞れなし、斯の時に當つて孰か古道を崇尊し、士民を敦化し、文德を四境に敷かんと欲せざるものあらんや、而かも幾く薩に如くものあらんや。且つ先侯の世に當つては、剛鬪勇烈、一時に干城たるもの伊集院・新納の諸子か。今侯の世に及んで、忠信德行、一時に模楷たるものは、山・赤の二君か、昔の君や武、今の君や文、昔の臣や勇士、今の臣や君子、濟す所異りと雖も、この大名を均うす、豈に偉ならずや。(中)伏して惟るに今侯明英の資を以て、先王の治に志あり、選擇して二君を使ふ、二君たるもの其れ勉めざるべけんや。書に曰く、若し巨川を濟らば汝を用ひて舟楫となし、若し歳大旱なれば、汝を用ひて霖雨となすと。方今は舟楫霖雨の秋なり。二君既に忠信德行を以て一時に模楷たり。此に繼いて而往、蓋し其の明德を修め、協力事に従はゞ、何の巨川か之を濟るべからざらん、何の大旱が之れ救ふべからざらん。夫れ然る後ち、先侯耀武の烈益々熾んに、而して今侯右文の化益々洽ねく、則ち伊集院・新納の功も豈に亦比較するに足らんや。(下)石梁、名は勇七、字は世儀、又萬年と號した。後年藩主有馬侯卅子の侍講に擧げられ、藩學明善堂を創立し



て教授と爲り、常に勤王の士と交り、又米澤・長府・西條・徳山諸侯の賓師となりし偉人である。彼れが行蹟より推しても山本秋水と海門とを以て忠信徳行の人と爲し、大に望みを屬せしは、決して浮泛の言にあらざるを信する。而して此の二人の文を伊集院・新納の武に比すべしと云うてゐるが、其の伊集院とは誰れを指したか不明である。併し新納は乃ち武藏守忠元たる事は違ひあるまい。忠元の武勇は既に世に遍ねく知られて居る、尤も彼れは文才にも長じて居た。頼山陽の『前兵児謠』、「衣至衿。袖至腕。腰間秋水鐵可斷。人觸斬人。馬觸斬馬。十八結交健兒社。北客能來何以酬。彈丸硝藥是膳羞。客猶不屬饗。好以寶刀加渠頭」の北客以下の四句は、彼れが作りし、「一ツとや。肥後の加藤が來るならば、焰硝肴に團子會釋、それでも聞かずに來るならば、首に刀を引出物」と云うのを翻案したもので、これには「十ウとや。とがなき敵を法もなく、殺さば後の罪作り、よわき加藤は其儘に、いざや仁愛加へ置け」まで十首がある。是れ關原役後、加藤清正來攻の風説ありしに際し、士氣を鼓舞せんがために作りしものなるも、尙ほ後世まで之を歌ひ敵愾心の養成に資したとの事である。

海門の鹿兒島に還るや、専ら造士館に恪勤して、大に他藩の新知識をも注入し、教授山本秋水を翼けて規模を擴張、教方を革正し、越えて天明三年、助教授に任せられた。是に於て乎彼れは藩侯に具申して、恩師たる孤山を招聘し、大に優遇する所があつた。孤山は途上、大隅加治木の邑主島津久徴をも訪ねた。久徴、號は錦水、學を好み士を愛し、詩名世に著はれてゐた。古賀精里が、カキ椀城公子の文采風流紫溟に映すと云うたのは此の人のことである。孤山は需めに應じ錦水の爲めに、其の「名山樓」の記を作つた。

海門は更に擢んでられて、重豪の世子齊宣の侍講となつた。實に大なる名譽と謂はざるを得ぬ、時は天明四年、其齡四十六歳である。是れより以降、彼れは世子に隨つて隔年毎に江戸に赴いた。同七年齊宣(時年十五)家督を相續し、重豪は隱居して榮翁と號し尙ほ藩政を行ふ事となり、海門は侍講を以て記録局長を兼ねしめられ、寛政五年には兵卒將領に轉する等、其の任重きを加ふると共に徳望も亦た益々高まつた。彼れは天明四年より寛政六年に至る十一年、半は江戸に祇役して、其の間幕府及び諸藩の名士と交り、大に其の學識を慕はるゝに至つた。高山彦九郎と相識りしも江戸である。寛政四年の春、彦九西遊、肥後より薩摩に向はんとするや、關吏の誰何して入國を拒んだので、彦九は腰の矢立を取り出たし。

「薩摩人いかにやいかに苜萱の關も鎖さぬ御代と知らずや」といふ一首の和歌を紙片に認めて、これを城下の赤崎源助(海門)に持ち行けと云つた。關吏はもとより海門の威名を知つてゐた、即ち急使を馳せて送りしに、海門より、入城差支なしとの返書ありしと云ふ逸話もある。

江戸に於ける交友中、最も親密なりしは、安藝の頼春水であつた、春水、名は惟完、字は伯栗、一字は千秋、通稱を彌太郎と云うた。其齡海門より少きこと七歳、夙に片山北海に従つて程朱の學を修め、藩主淺野侯世子の侍講と爲り、最も詩文を能くした。斯く學問境遇、海門と略ぼ同じきを以て、殊に親密であつたのであらう。春水の『師友録』に

赤崎楨幹、子は彦禮、海門と號し源助と稱す。薩世子の伴讀たり。人と爲り溫厚和平、詩及び和歌を善くし、句々實を吐き、一の浮詞ある無し。亦た曰く子は余と同じく世子に従ふ、世子の徳は一藩の盛衰之れ



に係る、補導の任、何んぞ自ら輕んず可けんや、子は則ち實に悲歡を同うする者なりと。余に長ずる十歳ばかり。薩世子封を襲ぎ、歳毎に駕に從つて東西するや、或は同じく東都に役し、或は之を吾が府下に要し、二十年間相逢ふ虚歲なし。彦禮の學、初め鳩巢を主とす、又肥後に遊び敷孤山に從ふ。識趣甚だ高し。又聞く彦禮性豪壯、少時任俠を爲せしと、余二十年の交りに、豪も舊態を見ず、蓋し其の學の變ずる所のみ。特に時に歌詩をつくりて其の隱衷を叙し、持ち來つて我に示し、慷慨泣下る。

と云ひ、又特に海門の爲めに『學統說』なるものを作つて送りし中に  
薩國赤崎彦禮、余と交を結ぶ、學其の趣を同うするを以て也。其の職掌とする所は則ち其の國學都講を以て世子の講讀に侍すと云ふ。世子の學は善く其の統を明かにするに在り。世子の學統絶續の係はる所、社稷の安危、生民の利病從へり。薩は大國なり、其の傳保よりして左右侍御、濟々踏々たるもの幾百人、而して其の德の美を成すの責、一に彦禮に在り、彦禮其れ重思を慎まざる可からざる也。

と云ふてゐるにても如何に其の眞心を披瀝せしかゞ窺はれる。又『春水遺稿』には、海門に贈りし詩を多く載せてある。

鶯花過眼已三春。知爾天涯思老親。賜告縱爲歸觀計。其如君側更無人。送赤崎彦禮(天明五年乙巳)

書劍去國萬里賒。赤心奉君不憶家。家有倚門人垂白。愛護穉孫送年華。繞堂萱草綠離離。倚門之憂無忘期。子規枕上時驚夢。夢迎兒歸覺後疑。賢勞在東幾春暉。日夜豈不戀慈闈。嘗侍儲君講且讀。成君今日從君歸。草木生光氣色分。已見英名天下聞。儻問獻親有何物。爲指堂堂有斯君。送赤崎彦禮從其藩侯入封(寛政元年己酉)

客至乘官暇。披襟似有期。吾交曾自許。狂語不相疑。獨鶴掠長海。群禽爭一枝。悠然極遐矚。夕照浮春

陂。彦禮至(寛政三年辛亥)

客地送人鄉思多。山陽紫海幾關河。阿戎十四留看舍。未足玄談君且過。送赤崎彦禮還薩兼請其過藝見家兒襄(寛政五年癸丑)

春風料峭發麴城。水驛山關從駕行。芳草備裝路千里。梅花下榻月三更。雅盟昔向都門會。文旆今於鄉國迎。詩酒無由罄歡去。征驂明日奈嚴程。赤崎彦禮東行過府下訪其館(寛政六年甲寅)

是れに由つて觀るも、春水は、或は江戸に於て彼れを送り、或は郷里廣島に於て彼れを迎ふる等。其の交際は頻繁なるものであつた。殊に客地云々の詩は、寛政五年、春水が江戸祇役中、海門の歸國に際し、途上、廣島に兒の山陽を見んことを頼みしもので、乃ち其の六月四日、海門の同地を過ぐるや、山陽は叔父杏坪に伴はれて本川ホンカハの水樓に彼れと對面したのであつた。而して其の對面は單に尋常の拶拶ではなく、これには大に理由があつた。それを後年山陽は「書通鑑綱目」と題せる文中に委しく言つてゐる。

襄十三歳、先人江門に祇役す、家信の中、時に襄が詩有り、諸老人偶ま見て獎賞す。薩藩赤崎彦禮先生、之を柴野博士に語る、博士曰く、千秋(春水の字)子有り、之を教へて實才を成さず、乃ち詞人と爲さんと欲する乎。宜しく先づ史を讀ましめ古今の事を知らしむべし、而して綱目より始めよと。赤崎先生、西歸藝を過ぎ襄に諭ぐ、襄乃ち發憤して之を讀む。後ち十八歳、東遊して博士に過ぎ謁す、博士問ふ、綱目を讀むや否やと。曰く盡く讀む能はずと雖、大意を領するのみ。博士曰ふ可なり。(中)襄唯々として退く、當時數々語り其の緒論を聽かざりしを恨む。今碌々たる此の如しと雖、學の嚮ふ所を知れる者、博士の賜ものな



り。今此事を記し起せば。今を距る三十餘年なり云々。

家信の中、時に襄が詩有り、とあるは、彼れの作として有名なる「十有三春秋。逝者已如水。天地無始終。人生有生有死。安得類古人。千載列青史」の詩であつた。而して此の文に由るも、後年山陽が『日本外史』、『日本政記』等著し、文章を以て名を成すに至つたのは、乃ち是れ、栗山(柴野)と海門の懇情に基因するものと謂ふてよい。山陽が赤崎彦禮先生と敬稱して居るのも宜なりである。

時運到来、海門は、寛政七年其齡五十七を以て、造士館教授に陞進し、同十一年まで約五年間、久し振りにて鹿兒島に留まり、故園の風月に吟嘯するを得た。然るに彼れをして更に最も顯榮なる地位を博せしめたるは、同十二年八月、林大學頭(述齋)・尾藤良佐(二洲)・古賀彌助(精里)の連名を以て、幕府に呈出したる推薦状である。尤も此の推薦は、殊に文教に熱心なりし前の執政松平定信(樂翁公)の鑑定より出でたりとも言ひ傳へられてゐる。

昌平坂學問所稽古人、此節段々相増、日々素讀且講釋會讀定日計に罷出候者之外、寄宿は勿論、通稽古之内にも日々之様に相越、寄宿人居屋の二階に相詰出精仕候者都て六十四人も有之候間、輪講質問等様々に取扱、尾藤良佐・古賀彌助引請相勤罷在候、其上別段會讀詩文點制之儀等迄相兼候儀御座候、全體御座敷並稽古所講釋定日多く、其上内外多人數に相成候に付ては、雜事の取扱も彼是有之兩人之勤方も、殊の外手張候様相成申候、尤御座敷講義は、柴野彦助・岡田清助相掛り、會讀は山上藤一郎並勤希組頭よりも相勤候儀に御座候得共、中々以引足り不申、右之通稽古人段々相増出精仕候處、教方の者手足り不申、追々手届き兼候儀に御座候間、可相成儀に御座候はば、松平豊後守家來・赤崎源助・松平安藝守家來・賴彌太郎兩人之儀、學問並詩文共世上にも相聞へ候者にも御座候去る寛政四年古賀彌助松平肥前守家來にて罷出、出府仕候節於御場所講釋被仰付御例を以て、右兩人在府中學問所に罷出御用相勤候様被仰

渡御座候様仕度奉存候、左候得ば、定日相立講釋會讀並詩文點制申談取計可申候、然時は御儒者御人少にても先御間に合可申奉存候、一體御家人之内より教方手傳等仕候様取計度色々相考評議仕候得共、當時相應之者無之候に付、不得止事右兩人之儀申上候儀に御座候、此節學問所一統教育等之儀厚く御世話も御座候に付ては、追年出精仕候者之内より教方御用に相立候者隨分出來、行々は事足り可申哉奉存候得共、何を申儀にも當夏より御教育の儀も始り候事、殊に學問の儀は外藝術と違ひ、中々纔年月稽古仕候程の儀にては人の師範仕候様出來候様にては無之候間、只今より教方に手を盡し、追て御用立候者出來可申手續第一之事哉に奉存候、前申上候通、教方手足り不申候に付、不得止申上候儀に御座候、右の趣を以て御評議の上被仰付も御座候様仕度、此段申上候以上。

書中、松平豊後守家來と云へるは、當時島津氏は松平姓を用ひ、藩主齊宣は豊後守(後に薩摩守と改む)と稱した故である。斯くて幕府老職の決裁を經、赤崎源助(海門)・賴彌太郎(春水)の兩人は、日本に於ける最高學府と云ふべき、昇平疊の名譽ある講師として聘せられた。此れ實に同疊創立以來、未曾有の事に屬する。併し一面より觀れば、當時の幕臣中に絶えて碩學大儒の無かりしを證するに足り、又一面、海内三百諸侯の扶持したる幾多の儒流が、耳目を聳動して彼等兩人を羨望せしを想像される。又兩人としても同時に此の名譽に遇ひたる深き因縁に感激したのであらう。

此の前年、海門は定府(江戸居住)を命せられ、職を前の教授山本秋水に譲つて江戸に出でた。これ既に幕府當局より藩主に對つて、昇平疊に登用するの内意を通じたりしに由るは勿論である。當時、熊本(の)の辛島鹽井も亦た江戸に居た。其の「東游録」は能く名士の交際の狀を寫して居り、併せて懇友たる海門の消息をも窺ふことが出来る。因つて之を抄録する。

赤文學、芝江邸舍餞宴。是日春盡、歲時の感、加ふるに別意を以てす、誰か悵然たらざらん。主人琉球酒



を酌み、猪肉を割く、皆是れ珍羞、亦た他藩の無き所、四坐歡び甚たし。倉文學親から大白を引き、豪談大笑、旁に人無きがごとし、俄頃あつて坐客に謂ふ、吾れ佳句を得たりと「萬古聖賢皆尙友。百年天地酒杯」。其の天真自放、滿坐絶倒す。來り會する者、賴文學・樺文學・倉文學・古賀太郎右衛門・和子成及余なり、午前にして集、夜五鼓半に及んで散す。

四月十五日、岡田先生、寒泉書院別宴、賴千秋故有り會せず、來り會する者、二洲先生・赤文學のみ。偶ま草香和助なる者來る有り、清音を善くす、余が爲に別曲數闕を唱ふ、音聲清亮、離想惘然たり。岡翁人と爲り高潔、世の標望たり。快辯劇論、人の胸次を滌ぐ、時に二洲先生酒を止む、余及彦禮勺飲に堪へず、先生素より飲を嗜む、獨大白を引き且つ飲み且つ談じ、人をして頓に鄙吝の心を忘れしむ。夜四鼓に及んで退き、遂に彦禮と同じく手を携へて月に歩し、覺えず赤羽橋に至り、宋之間の下山歌を吟じて別る。

四月念四日、馬侍監と同じく栗山先生の宅を過ぐ、以て別を告ぐるなり。寒泉先生父子・二洲先生及び赤倉二文學・芙蓉山人・谷文一等、皆來り會す、古賀先生故有り來らず、令子太郎右衛門與かる。是日我公内厨に命じ酒饌を作り以て之を賜ふ、行厨具さに備はり諸公歡ぶこと甚だし、蓋し特恩なり。(略中)是夜、九鼓にして宴散じ、寒泉・二洲兩先生の出づるを待ち、諸子と同じく柴先生を辭して去り、櫻田に到る。則ち唯余と赤文學の二人手を携へ、城池の上を過ぎて歸る。醉吟風と行き、同携の再びすべからざるを嘆じ、赤羽橋を渡り、再び下山歌を唱ひ、匆々手を分つ。(略下)

文中、赤文學は海門、賴文學又賴千秋は春水、樺文學は前に掲げたる石梁で、和子成は熊本の和田子成、倉文學とは豊前中津の儒員、倉成龍渚を云うたのであり。而して二洲先生は即ち尾藤良佐リヤウスケ、古賀先生は精里名は彌助で、同じく昇平疊の教官たりし柴野栗山名は彦輔と并せて三助と曰ひ、又寛政の三博士と稱せられた。

岡田先生即ち寒泉先生に就いては、茲に特筆するの必要がある。彼れ名は恕、字は強卿、江戸の人で、業を山崎闇齋派の村士スゲリ淡齋及び其の子玉水に受け、人と爲り明朗俊邁、旁ら醫理に通じ、又和歌を善くした。服部栗齋を友として切劔相發き、幕府に仕へて教官に任せられ、柴野栗山と共に昇平疊の學政を修め、後ち尾藤二洲・古賀精里の至るに及び、出でて代官と爲り、數萬石の邑治に於て大に美績を擧げた。玉水、名は宗章、其の剛直の性、護園派の浮華を矯正するに努め當時性理を談するに於て、久米訂齋・西依成齋と並稱せられたる人であつた。而して玉水門下の雙壁と謂はれたのが、寒泉と栗齋である。栗齋は江戸麴町に學舎を開き、玉水の學舎信古堂の名を繼いで之に扁した。春水の弟にして山陽の叔父たる賴杏坪の如きも彼れに學んだ一人である。明和年中、師なる玉水は、退溪の『朱子書節要』に倣つて、『李退溪書抄』十卷を著した。後ち之を刊したの

は寒泉である。其の刊行に際して、古賀精里は、序文を作りて

余嘗つて朝鮮醇儒に退溪李先生なる者有るを聞き、其の著す所の書を購求し、獨り邦版自省録・朱書節要・聖學十圖を得たり。頃歲始めて先生の文集謄本を得て之を讀み、益々其の學の純にして功を用うる親切なるを嘆ず、眞に師とし仰ぐ可し。(略下)

と云うてゐる。而して文化八年(朝鮮純祖十一年)、精里は、佐賀の草場佩川・會津の高津藩川と共に、朝鮮の信使金



履喬・李勉求等と、對馬に會した時、此書を履喬に贈り、履喬は禮安なる陶山書院に贈つた。此の寄贈の事は『眞寶李氏家乘』の中にも記してある。是れに由つて之を觀るも、當年日本最高學府たる昇平疊の教官、寒泉精里が退溪を重視せしことを知るを得べく。要するに鹽井の『東游錄』中に載せある人々、換言すれば海門の交りし多くの儒者は、殆んど退溪の學說尊信者であつた。

斯く海門は顯榮の任を得た。薩摩の人々に取りても、寔に名譽のことである。惜むべし天公無情、久しく彼れに壽を假さず、其の翌々年、即ち享和二年八月、疾に罹りて歿するに至り、島津氏累代の塋域たる、江戸高輪大圓寺に葬られた。時に享年六十四である。

予は海門の事蹟を詳かにせんとして、久しく歳月を費し、鹿兒島に行きても之を調べたが、上叙の外何等得る處が無つた。碑文中に「有文稿若干卷」と書いてあるが、近年出版されたる『薩摩叢書』等にも掲げて無く、全く其の所在は不明に屬し、彼地では海門の名さへ忘却されてゐる。或人は、斯くも海門の名の忘却されるに至つたのは、王政維新の大業に盡瘁したる薩摩人士は、多く陽明學を修めし爲め、朱子學派の人を以て單に道學先生と看做したるのみならず、保守的の慣習を脱せざりし人士は、彼れが隣藩熊本に修學したるを嫌ひ、且つ郷士出身として卑みたるに由るものなりと云うた。寔に首肯すべき節もある。併し造士館は今尚ほ高等學校の名に用ゐられてゐる、其の創立者の一人として苦心し、久しく教鞭を執りし此の大儒海門の名を忘却せらるゝといふのは如何にも遺憾の極みである。但、彼れが魂魄を慰むべきは、彼れと時代を同うしたる諸大家の遺稿を見ると、概ね彼れと、應酬の作を載せてゐる。故に彼れの名は故國に於て忘れられても、他國の文獻に由

つて、永久湮滅することはあるまいと思ふ。

彼れの學說として傳はりしもの、無い中に、和文を以て書きし『村雨夕』と題したものがある。左に少しく之を抄録して、彼れが抱負を窺ふに供する。

文月の末つかた、村雨打そゝぎいと物すごき夕ぐれ、またびの窓により、から歌などうちすしゐたり。折しも隣の翁とぶらひきて、けふは幸に園におはして暇なれば、君の昔物語り聞ばやといへり、丸、ほゝゑみて、かの安達が原の鬼のふる事や語るべき、又那須野の原の狐のふることや語るべきと戯びれぬ。翁、かうべ打ふり、君の常に誦し給ふからの文の正しき理りこそ、きかまほしけれと、いとまめに言ければ、丸、深く感じ、さらば先づ何事をか語らんと首をたれぬ。翁、古への聖の大きみ、大學校、小學校とて、物まねび處を設げ、上中下の子弟らを教へさせ給ひしは、いかなる故ぞ、その理りを語り玉へといとせちに請ひければ、丸、大小の學校は、久堅の天、あしの根の地のことはりもて、人の徳を養ひ、人の才を育て、國を治むるの具とし玉ふより外はなし、小學校は人の下として人に事ふるものに其わざを教へ、大學校は人の上として人を治むるものに其理りを教ゆる所也。

翁、陽儒陰佛とやらんにて、あらはに程朱の學に従ひ、ひそかに異なる學を事とするものありと傳へ聞き侍りぬ。

丸、わが三つの國(薩摩大隅日向)は、不知火の筑紫の果にして、その國ふりいと鄙びたれども、人の正直にして、頼もしければ、斯る恐しきわざはあらじ。



翁、異なる學の世の禍となる理りもあるや。

丸、かの學に従ふもの、上なるは、己が心に備へし久堅の天、葦の根の地より出しまことの理りを捨て、只かりの法もて國を治むるものなめりと云ひて、世を欺き、下なるものは、只ひたぶるに、腸の錦はたもりひろく、口の縫物針の細かならんことを務として、世に衞ひぬ、かゝる人もて人の上となさば、國の風衰へ果て、散りゆく花の匂なきが如くなりゆきやせん。古へもろこしに、かゝる學の行れて、國の命ものどかならぬ例いと多かりき。

翁、異なる學の世の禍ひとなるを始めて聞き侍りぬ。さらば、かの學に従ふ輩を、などていたく責め玉はざるや。丸、吾が程朱の道は孔孟の道、孔孟の道は堯舜の道、堯舜の道は久堅の天、あしの根の地にいでぬれば、此道だに明かならば、いかでか彼の學興らんや。かの學の興るは、我ともがら此道を學ぶもの、科なれば、ひたぶるに己が身に立歸り、此道を修めなば、彼が輩おのづから従ひなん。譬へば心と腹ムネとに病あるもの、元の氣さへ能く補へば、其病せめずして癒るが如し。かの學を退げんとて挑み争ふは、さながら獸の牙もてかみ、鳥の爪もてつかむが如し。いと賤しきわざなんめり。

彼れが號は、薩摩灣口に聳ゆる海門嶽より取つた。而して其の海門嶽が薩摩富士の名を以て、紫芙蓉の南溟の綠波に映する如く、彼れの詩は適麗を以て當時に艶稱され、和文和歌も亦た京都の芝山宰相持豊に學んで堂奥に達したものであるが、其の遺稿散佚して、世に存する太だ少なきを遺憾とする、茲に予が蒐め獲たるものを掲げて豹の一斑を示すこととした。

飄泊天涯客。踪如水上萍。塵途長沒沒。蓬鬢已星星。凄雨空山夜。殘燈古驛亭。鄉心凄欲斷。孤枕夢初

醒。題驛壁

標兼鸞鳳舞。名共斗山高。腹裡舊黃卷。夢中新彩毫。臨風吟朗朗。帶月醉陶陶。到處歡娛足。何須避世

羈。贈志村詞伯

列炬光將盡。城頭晚景清。林芳梅已發。海色日纔生。筆與阿兒戲。酒同慈母傾。家山多喜氣。禽鳥亦歡

聲。庚戌試筆

韶光何靄靄。樂事亦融融。賒酒爛花下。聽鶯毛柳中。吟襟開麗景。醉面帶和風。喜此閒遊趣。與吾幽侶

同。花朝遊南郊得東

數里西郊路。行行趣不同。時逢題竹客。或見賣花翁。野店就幽處。村歌聞古風。黃昏猶戀賞。芳樹月朦

朧。其二

名園叢桂樹。良夜此攀緣。霞液千鍾瀉。錦篇五色聯。樂傳天上曲。人似月中仙。願得長生藥。年年醉此

筵。月前陪宴

名苑宜幽眺。風煙此地偏。綺樓飛鳥外。江檻落霞前。攀倚皆奇石。遨遊或畫船。先生有深戒。慎莫樂流

連。陪遊仙巖謹賦

朝吟青山上。夕嘯青山下。慇懃語青山。君獨知我者。山行

吾生驛且愚。生長在山籬。一朝被維束。誤此列朝位。本不知世機。亦不解時事。濟濟滿廷賢。誰不嘲且



笑。到死有故態。偏說猷芹意。病中作

返景微微古木根。偶乘休浣到郊村。童奴不解吟行樂。頻說前程夜色昏。

成偶

白鶴奮飛入故林。江天煙景轉蕭森。樓頭唯有孤輪月。偏照蘭湯浴後襟。

同蘭晚先生長季安木儉齋種子脩遊浴蘭樓分韻

醉餘意氣更縱橫。說盡平生報國情。誰道夫君今老矣。腰間寶劍作龍鳴。

同前用蘭晚先生韻

閒庭孤月照梅花。吏散朱門寂不譁。今夜與君拚一醉。何知官事亂如麻。

春夜官舍某與同賦得花字

花塢柳塘何處過。酒家都在碧巒阿。黃昏一片江天月。低照漁人鼓柁歌。

兵庫雜詠

露濕殘花斜月清。深宮半夜奏瑤箏。梨園弟子頭如雪。泣說先皇御製聲。

宮詞

淒風朗月古禪樓。二十年前此境遊。腸斷梅兒墳畔柳。老來今日復維舟。

月夜泛舟墨水到木母寺

鬱鬱病懷誰共論。年年竊祿似朱門。匣中古劍龍三尺。留與兒孫報主恩。

病中口號

伏枕中秋夜色高。何堪風露透襦袍。月宮仙藥知多少。不向人間頌一毫。

病中秋

伴讀多年主遇深。寵光相照舊儒林。殊恩未報身先死。孤負平生一片心。

臨終口號

たまならぬ名さへも君に磨かれてならぬ光をそふるうれしさ。

作れる詩を人の稱美しければ

する終に直きこずるやあらはれんまがれる枝はさき匂ふとも。

故ある時思ひつけ侍し

いつの日かあまつ春風吹きいでて身のうき雲を拂ひつくさん。

同

すみすてしのちいかならん秋の露今だにかゝる宿のよもぎふ。

菊月の末つ方公の勤にて鹿兒島へ移侍るとて

いまよりはたれをしるべに草分ていつこの常の道をたどらん。

月洲山田君かくれ給ひし比

今日はなほ植しむかしをしのべとや松ふく風も音なふるらん。

父の一回忌にあたり侍る時手づから植を置せ給し砌の松に吹く風も常よりはいと身にしむ心地し侍りて

みがけ猶君がこゝろのますかぢみもとの光のあらはるゝまで。

壬子の仲冬止水觀にて大學衍義を講し侍る時よんで奉る

まなべこの遠つみ親のことのはの花に實にある道のすがたを。

日新公のいろは歌を講し侍るとて

きみよまづ麻としならば民くさにまじる蓬もしげりはてまし。

以上二首、世衰へ人の心まめならざるを痛み歎かせ給ひし時よめる

いにしへに吹きかへさなん國の風人のこゝろのちりを拂ひて。

(大正十五年一月稿)



大正十五年三月十五日印刷  
大正十五年三月二十日發行  
昭和二年三月二十日再版增補

朝鮮總督府

京城府蓬萊町三ノ六二  
朝鮮印刷株式會社



甲 羅 漢 佛 教 會 報  
宣 統 三 年 庚 申 年 六 月 二 日

佛 教 會 報

第 二 十 三 號 二 十 日 發 行  
大 正 十 三 年 庚 申 年 六 月 二 日  
大 正 十 三 年 庚 申 年 六 月 二 日



